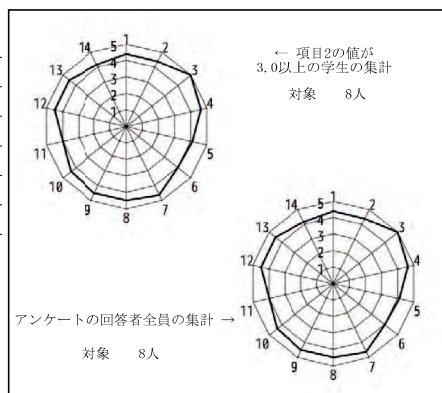


2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 国際会計論B
授業コード 42C24-001
教員名 白木 俊彦
教員コード 101090
登録人数 18
回答数 8
回答率 44.4%
休講回数 0 回
補講回数 0 回

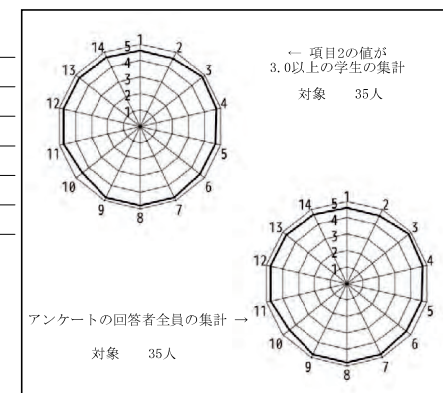


授業評価結果を踏まえた点検・評価

- ① 開講当初に設定していた目標と到達の程度について。
本講義は、会計基準の国際的な統一化を目的とする国際財務報告基準の意義と課題について考察する。特に、(1)財務報告基準の概念フレームワーク、(2)経営のグローバル化に伴う会計処理について考察した。関心のある学生が受講しており、理論の探究心を期待した。
- ② 数値データおよび自由記述等を踏まえての担当科目に関する総合的な自己点検・評価。
前回の授業評価に比べて高い評価になったことはよかったが、内容が難しいことから受講人数が減少したことは残念である。全体的な平均値と比較して、授業に対する講師の熱意や姿勢については高い評価を得られたことはよかった。しかし、到達目標に関して、問5、6、11および14の質問に関して低い評価であったことから、当初の目標が達成できなかった。一部の学生は強い関心をもって学習にも熱心に取り組んでいたこと、また、答案にも講義内容が表れている学生もあり、ある程度の効果はあったと考える。全体としての評価結果はよかったが更なる関心を持つ学生が増えるよう取り組まなければならない。
- ③ 次クォーター・学期以降に向けての改善点、今後の抱負、方針など
本講義のレベルを下げることなく、さらにグローバル経営に関心のある学生が増えるよう、内容をより分かりやすく解説し、演習も時間をとれるように対応する必要がある。概念フレームワークを中心にした資料作成に取り組みたい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 組織心理学B
授業コード 42C26-001
教員名 中尾 陽子
教員コード 064188
登録人数 98
回答数 35
回答率 35.7%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



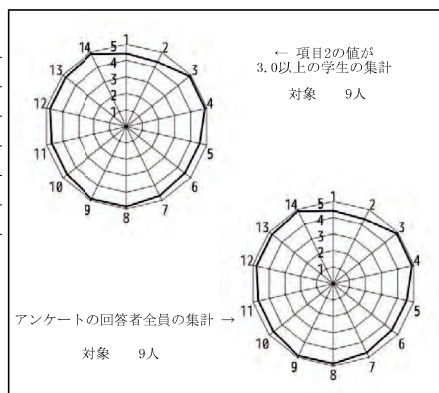
授業評価結果を踏まえた点検・評価

本科目では、組織における『個人』を対象とした組織心理学の研究領域の概要を理解するだけでなく、受講生の皆さんの日常の中で起こる具体的事象とこれらの心理学的知識を関連づけ、何らかの形で役立てていくことができる力を養うことを授業の目標としてきました。評価の値をみるとどの項目も平均値を上回っており、受講生の方々にとってある程度満足のできる授業を実施できたのではないかと思います。また、最終試験では授業目標の到達度に関して各自の体験を具体的に記述していただきましたが、それぞれの生活の中で出会った現象を心理学的に分析することができるようになったり、中には学びを意識的に活用している様子をうかがい知ることができました。そのため、もちろん人による程度の差はありますが、今後の生活の中でも、今回学んだことを活用していく基本的な力をつけていただくことはできたものと考えます。

自由記述からは、グループワークを通した学びが有効であったこと、また、この時期に自己分析につながる内容が多く盛り込まれていたことが有効であったということがわかりました。これらについては、基本的に来期も継続していこうと思います。とはいえ、グループワークが学びにつながるかどうかは、受講生の方々の意識や意欲によって大きく左右されます。学生のみなさんがコミットしたいと思えるような学びの素材を探究していくと共に、受講生同士が共に成長したいと思えるような学びの場づくりに努力していきたいと思います。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 マーケティング・コミュニケーション
授業コード 42C37-001
教員名 川北 眞紀子
教員コード 102879
登録人数 69
回答数 9
回答率 13.0%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

当初設定していた目標は、広報・PRについての理解やリリースがかけられるようになることであった。これについては、設問13「この授業を通して、新しい知識（あるいは、技術や能力）を得たり、理解が深まったと感じますか。」の点数が4.78と高いため、到達できているだろう。

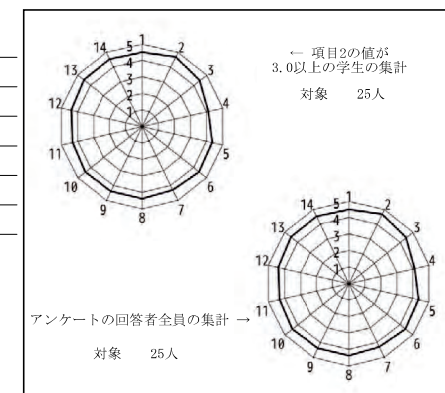
設問3～14は、すべて4.5以上となっており、全体的に高い得点となっている。ただ、評価人数が9名と少なく、遅刻や欠席しがちな学生たちが評価をしていない。そう考えると、きちんと授業に出て課題を出している学生たちにとっては、かなり有益な授業になっていると思われる。

全体満足も、4.89と高い。

次年度も、この水準を確保しつつアップデートしていきたい。また、さらにモチベーションをあげ出席を高める工夫が必要かもしれない。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 情報処理B
授業コード 42D03-001
教員名 姜 秉国
教員コード 019547
登録人数 32
回答数 25
回答率 78.1%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



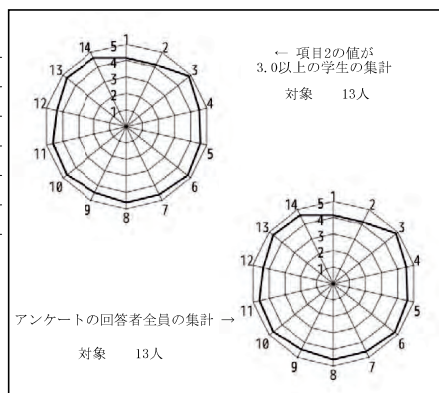
授業評価結果を踏まえた点検・評価

「ビジネス情報の基本的な加工・分析ができること」と「簡単な事務処理の自動化システムの構築ができること」が開講当初に設定した目標であった。登録した学生のExcelの使い方に関する習熟度にばらつきが大きいと、講義内容に対する学生の理解度に合わせて進めていく必要があった。評価項目全般にわたり良い評価を得ており、現段階で特に改善を要する点は見当たらない。学生の出席、レポート、発表内容からみて、授業の目標は十分達成されたものと判断している。自由記述式設問（この授業の良かった点、評価できることは何ですか）の回答には、以下のようなコメントがあった。

- － パソコンの知識がついた。
- － 社会に出て使える能力を養うことができる。
- － 難しいけど面白かった。
- － Excelの使い方やマクロの使い方を少し理解することができた
- － マクロはこの授業を受けないと理解できなかった分野なので学べたのがよかったです。
- － ただ式を教えるだけではなく、自習だけでは理解しづらい部分の「どうしてこうなるのか」といった詳しい説明があること。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 データ解析A
授業コード 42D09-001
教員名 奥田 隆明
教員コード 102600
登録人数 49
回答数 13
回答率 26.5%
休講回数 0 回
補講回数 0 回

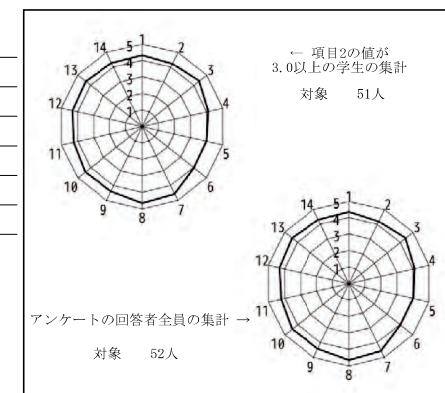


授業評価結果を踏まえた点検・評価

今年度は、リニア中央新幹線のインパクト分析を例に取り上げて講義と演習を実施した。数学や統計（Excelの操作を含む）を得意としない受講生にも理解できるように、できる限り復習を行いながら授業を進めた。しかし、当初の目標は概ね達成することができたと考えている。実際、受講生の目標理解（設問6）については平均値4.62（学部平均4.15）、目標到達（設問7）についても平均値4.77（学部平均4.08）と高い値を示している。また、受講生の知識・理解（設問13）については平均値4.62（学部平均4.13）、総合的な満足度（設問14）についても平均値4.69（学部平均4.25）と高い値を示している。しかし、自由回答欄を見ると「分かりやすい」という指摘が多い反面、授業情報の適切な提示が指摘された。来年度は、今年度の経験も活かしながら、数学や統計（Excelの操作を含む）を得意としない受講生にさらに理解できる内容にすることを心掛けたいと考えている。また、シラバスの説明についても改良を加えたいと考えている。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 企業論B
授業コード 42E02-001
教員名 後藤 剛史
教員コード 100374
登録人数 94
回答数 52
回答率 55.3%
休講回数 1 回
補講回数 0 回

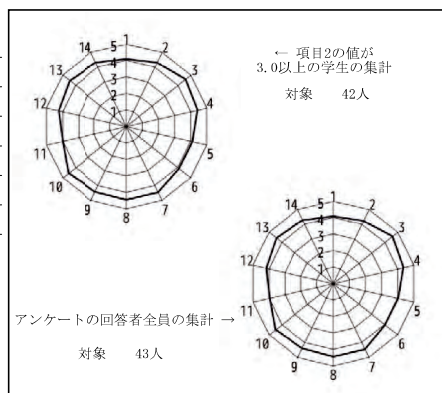


授業評価結果を踏まえた点検・評価

- ①到達目標は「様々な人事制度について、そのメリットとデメリットを経済学的に考察できるようになること」である。試験結果を鑑みると、この目標はおおむね到達できた。
- ②数値データについて、カテゴリーを同じくする科目と比べて著しく劣る項目はなく、いずれの項目も4点を超えている。自由記述は、「丁寧に板書してください、見やすくありがたかったです。後藤先生の授業はどれも3年間受けてきた中で1番好きです!」、「話が分かりやすくちゃんと聞こうと思える授業だった。将来就職した際に役立つことを学べた」、「論理的な考え方で、非常に分かりやすかった」、「実生活における具体例を提示してくれたため、分かりやすかった」など、好意的なものがほとんどであった。こちらが講義にあたって気をつけていることが評価されており、うれしく思う。好意的でないものは、「数式が難しかった」および「ノートをとる暇がなかった」が1件ずつである。前者はともかく、後者については、次年度、受講生の様子を見ながら板書を消すタイミングを図ることで改善したい。
- ③1点がついたのは項目4・7・9・11・14で、1件ずつかつ同一の学生によるものであった。この学生の意見を改善に生かしたいところだが、残念ながら自由記述がない。低評価をつける際には理由も付すことにはいただければ、PDCAサイクルが回しやすくなる。検討をお願いしたい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 経営環境論B
授業コード 42E06-001
教員名 薫 祥哲
教員コード 018168
登録人数 63
回答数 43
回答率 68.3%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

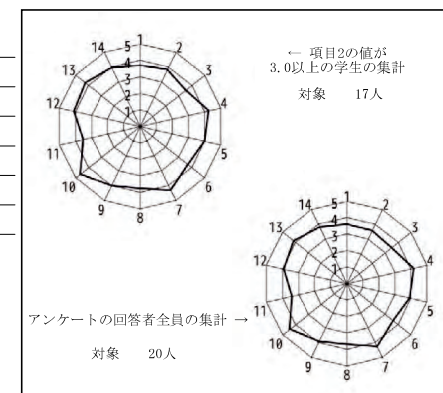
この授業では、漁業資源の最適利用や、資源リサイクルに関する課税や補助金政策がどのような影響を及ぼすのかについて、理論的な講義を行った。また、米国における2大環境法規制である「大気浄化法」と「水質浄化法」を取り上げ、環境改善のための法規制がどのようなプロセスで進められ、どのような問題点があるのかについても解説した。授業では毎回レジュメを配布し、その内容に沿って講義を進めると共に、関連する新聞記事を多数配布して受講生達の理解を深めるように工夫した。さらに、学期中に講義トピックスに関連した練習問題のレポート課題を2回出し、そのレポートが提出された直後に授業で解答を解説した。環境政策を進めるためには便益費用分析が重要であり、環境資源の最適利用を考えるための経済学的アプローチを理解する事を目標とした。

全体としての満足度を尋ねる設問14の平均値が4.26であり、設問2で尋ねられている「予習・復習や主体的な授業参加」についての評価も4.23と高く、今回の授業評価は満足できる結果であった。その結果、当初設定した目標も概ね達成されたと判断している。

自由記述欄への記載は少なかったが、良かった点として「新聞記事も含め、色々な環境問題について知ることができた」「説明が多く、わかりやすかった」といった肯定的なコメントが多かった。なお、改善的として「もう少しゆっくり喋って頂けるとありがたいです」という指摘があったので、今後、その点に注意して授業を進めていきたい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 グローバル・ビジネス論B
授業コード 42E12-001
教員名 KHONDAKER, Rahman M.
教員コード 100361
登録人数 32
回答数 20
回答率 62.5%
休講回数 1 回
補講回数 1 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

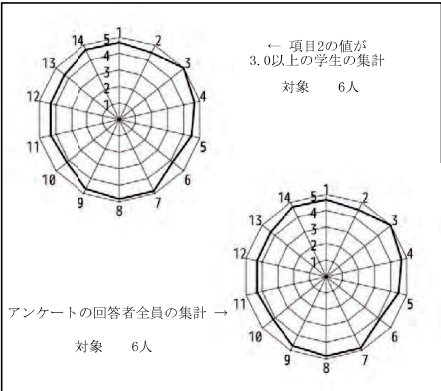
本授業の目的はビジネスのグローバル化が進む中、アジア諸国における人的資源管理の国際比較学習である。履修者は、アジアにおける人的資源管理の基礎と実用的方法を学び、人的資源を活用するための必要な手法、戦略や視野を身に付け、日本の人的資源管理と比較研究を出来るようになる。授業は、テキスト・講義レジュメ・関連資料などを配布し、1回休講のため1回補講し、シラバスを終了しました。シラバスの目的を全面的に達成したと思っている。

設問1から設問2「授業への参加について」に関しては、2019年度第4クォーター全科目と経営学部の42001-001～42H04-999番台科目群とを比較すると、低い評価を受けている。設問3から設問7「授業全体について」の平均値4.58、4.38、4.16、4.12、4.43 に対して、本科目の評価は、3.50、4.20、3.95、3.60、4.25となっている。設問8から設問12「授業の運営について」では平均値4.40、4.38、4.46、4.23、4.35 に対して、本科目は3.70、3.90、4.45、3.45、3.95となっている。設問13から設問14「全体的な評価」では平均値4.39、4.29 に対して、本科目は4.15、3.80となっている。昨年と比較すると全ての設問の平均値が上がり、評価が3.00以上になっている。設問15から17「自由記述」では、「細かいところまで、国別で知ることができた；人的資源管理という分野を預かっていた点；配布資料が細かくてわかりやすかった；先生の授業に対する熱心さ」などの良いコメントと同時に「授業が終わるのも遅い；何を言っているかわからない」などのいくつか批判的コメントもあった。

本科目内容が多少広がったが、私の努力・労働を考えると、上の評価数値で満足ができない。授業時間内には私語、遅刻、「習慣的に授業の途中でトイレに行く方」、無断早退や授業以外の内職などがあった。適切に注意をかけた。教科書が買わなかった学生もいた。教科書が買わない学生の指導をどのようにやれば良いか、分らない。今後もより高い評価水準をめざして様々な改善を試みる。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名	ビジネス英語IVオーラル・コミュニケーション2
授業コード	42G07-002
教員名	BIERI, Thomas
教員コード	102517
登録人数	10
回答数	6
回答率	60.0%
休講回数	1 回
補講回数	1 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

1. The goals of this course were to use common Business English expressions, show learning of new vocabulary, show improved fluency and increased confidence in speaking English, and explain a project for three to five minutes. Learners who attended and participated in all class activities and all preparation achieved these goals with the possible exception of increased confidence for some, others who were often absent only partially achieved them.
2. The only comments were positive. Just over 94% of all individual responses were either 4 or 5 and none were 2 or 1. Most averaged scores above departmental and general averages. Overall, the students were satisfied and I feel the methodology is largely appropriate.
3. I would like to bring in more real communication opportunities and, in future, greater emphasis on English study of business administration topics already being studied in Japanese. In class, students occasionally complained that the video screen was too small, and I agree. I hope to have better equipment in the future.

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名	英語ビジネス・ライティングB
授業コード	42G13-001
教員名	HEATHER, James
教員コード	103649
登録人数	26
回答数	4
回答率	15.4%
休講回数	0 回
補講回数	0 回

レーダーチャートなし
(回答数4件以下のため集計しない)

授業評価結果を踏まえた点検・評価

- The goals were set to complete one textbook unit for every 2 classes. Each unit consisted of textbook activities, an assignment and a review worksheet. Each student had 2 chances to have their written assignments edited before final submission. If students chose to adapt the edits and improve their work, their final grade for the assignment would increase. Students who followed the program and didn't miss class had no problem completing the coursework in time. Students who were absent, or did not follow the daily schedule had trouble completing all of the assignments in time (or at least they had to rush in the final couple of classes to get things done).
- I received positive verbal feedback from students throughout the course. The students find the course to be a heavy workload, but fair. They like that it relies greatly on each individual student to complete the work independently yet at the same time requires peer to peer and student to teacher interaction to be successful.
- The next time I teach the course I would like to pass on some of the administration duties on to the students. I also feel the need to encourage students who get diverted off course.

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 法と人間の尊厳2
授業コード 10D05-002
教員名 服部 寛
教員コード 103600
登録人数 6
回答数 2
回答率 33.3%
休講回数 2 回
補講回数 2 回

レーダーチャートなし
(回答数4件以下のため集計しない)

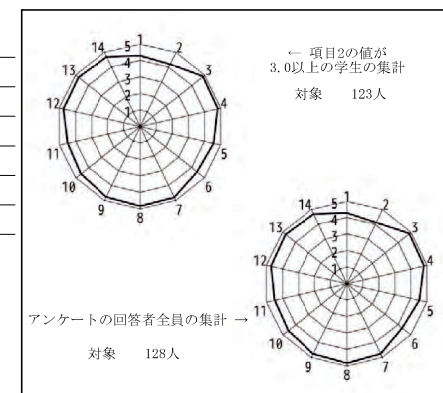
授業評価結果を踏まえた点検・評価

受講者・アンケート回答者とも少なかったため、以下では、「学生回答結果」をもとに、評価報告を行うことにしたい。

①開講当初に設定していた目標・到達の程度については、シンプルにまとめれば、授業計画に沿った形で最終回まで予定していたプランで授業を遂行できたといわれると、残念ながら、否定的に解さざるを得ない。大きな理由として、序盤の総論的説明（第4回あたりまで）で大きな時間を割かれてしまっていることがある。この点を次年度において大幅に改善したいと考えている。他面で、タイムリーな話題に適宜触れ（それはそれで時間をとるが）、そのことが、受講者（出席者）の興味関心を惹くことに少なからず寄与していることも否定できない。当初設定の予定と、時宜的な話題への言及とのバランスを保ちつつ、充実した授業の実施に努めたい。②回答者が熱心な出席者であることと思われるためか、上記の進行速度に関する点を除き、概ね好意的な評価をもらっている。授業自体の形式および内容については、概ね問題ないものと思われるが、その点の改善を随時試みたいと考えている（この点が同時に③すなわち次クォーター以降の改善点・抱負にかかわる点である）。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 生命と倫理問題3
授業コード 13A03-003
教員名 森山 花鈴
教員コード 103223
登録人数 214
回答数 128
回答率 59.8%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

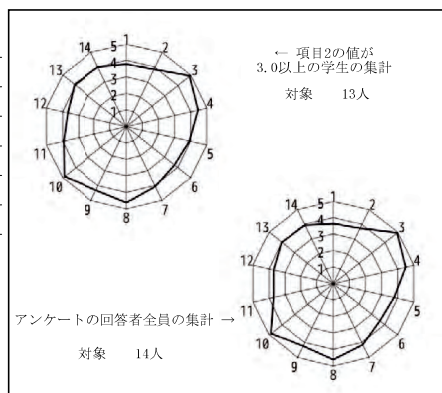
①開講当初に設定していた目標については到達していると考えます。生命と倫理に関する問題について、学生自身が深く考え、学んでいることがリアクションペーパーやレポート課題から確認することができました。

②大学全体の平均値、学際科目での平均値、科目登録者数別集計の平均値をほぼすべての設問で超えることができた。ただし、設問2の予習・復習についてはわずかに全体平均に届いていないため、今後気を付けていきたい。自由記述欄では、「プリントが見やすくよかった。」「先生の教え方がめちゃくちゃよかった。わかりやすいし聞きやすい。」とレジュメや説明の丁寧さについて評価があった。また、これまでの授業でも多くあがっていたが、「授業の進行、ビデオを用いた説明等、分かりやすかったです。」といったような映像教材を併用した点に対する評価も多くあがっていた。さらに、受講人数が多かったものの、ウェブクラスを通じ質問を集め、次の授業までにできる限り毎回学生からの質問には答えていたので、「授業に関することについて、とても質問しやすい雰囲気だった。」との評価があった。

③話すスピードや教え方、学生からのリアクションペーパーを通じて質問に答える形式については毎回評価が高いため、次クォーター以降も形式を検討しながら引き続き実施していきたい。また、今回は人数が多かったため難しかったが、グループワークなども適宜入れていきたい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 政治・経済の諸相6
授業コード 13C06-006
教員名 西村 邦行
教員コード 104090
登録人数 28
回答数 14
回答率 50.0%
休講回数 0 回
補講回数 0 回

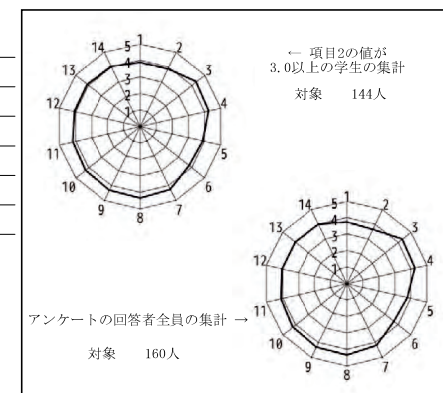


授業評価結果を踏まえた点検・評価

今年度から始めて担当する内容の科目でもあり、一部説明がたどたどしくなってしまった箇所もあったため、講義内容の伝達度合いにやや不安を感じていたが、評価結果を見る限り大きな問題はなかったようで安心した。他の科目では速すぎると指摘のあった授業の進行速度についても反省が活かされたようで、本学の学生に対してどの程度の速度が適切かの目安が得られたように思う。差し当たっては、自由記述欄にあった点について改善できるところから見直していきたいと思う。具体的には、資料の不足という点については、一部心当たりのある箇所もあるため、来年度に向けて補填をしておきたい。また内容が右往左往するというコメントがあったが、これも正確性を期すために補足的な内容を話過ぎた箇所のせいと思われるため、同じく次年度に向けて見直しておきたい。一部設備についての要望もあったが、この点については如何ともしがたいものとして学生に理解を求めたい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 憲法B
授業コード 44A06-001
教員名 菅原 真
教員コード 102064
登録人数 258
回答数 160
回答率 62.0%
休講回数 0 回
補講回数 0 回

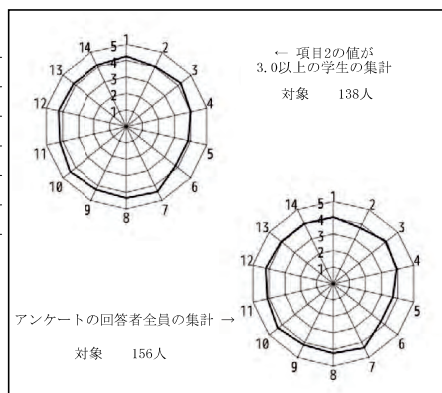


授業評価結果を踏まえた点検・評価

- ①開講当初に設定していた目標および到達の達成度については、本授業を履修しているゼミの学生たちの意見なども踏まえると、概ね達成できたと思う。Q3に出された学生からの意見を踏まえ、授業の理解を高めるための視聴覚教材なども積極的に活用し、個別回答（項目15）には多くの肯定的意見が寄せられた。学部のDP・CPを意識しながら、授業を実践した。
- ②数値データは、項目1～14の平均が4.04、項目3～14の平均が4.10と、大教室の授業としてはまずまずの結果に終わった。問題点は、Q2（予習・復習を含む主体的な授業参加）が3.63と、相変わらず他の項目と比して極めて低いことである。授業中に「大事な点」を強調し、復習の要点を示し、学習を促したが、積極的に取り組む者とそうでない者との開きが激しい。授業中、大教室の前半分に座った人には、重要な条文を読んでもらい、また論点に関する意見を述べてもらうため、マイクを向ける旨、事前に告知をしたところ、5分の1程度の学生が前の席に座り、その者たちには高評価であったようだ（質問項目15の肯定的意見）。
- ③次年度以降は一個人的には必ずしも好ましいやり方ではないと考えるが、授業中、履修している学生たちが教員が提示した論点について、自分の意見をきちんと表明できたら、発言点を与えるなどしていった方がよいかどうか思索している。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 刑法総論B
授業コード 44A11-001
教員名 水留 正流
教員コード 101566
登録人数 255
回答数 156
回答率 61.2%
休講回数 0 回
補講回数 0 回

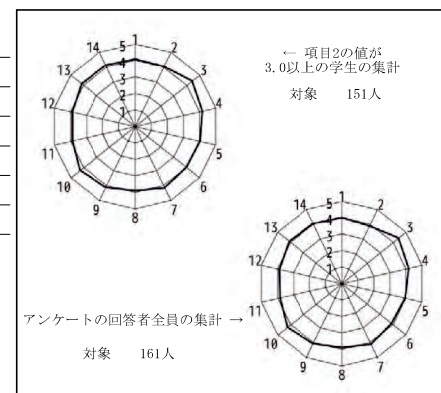


授業評価結果を踏まえた点検・評価

1. Q3の「刑法総論A」の理解を前提に、共犯などのやや複雑な事例での犯罪の成否の検討方法の体得することが、本講義の到達目標であった。
2. 項目全体の平均が4点を超えたこともあり、Q3から一定の改善をみた。とりわけ、Q3で問題となっていた設問3（授業の開始・終了時間）と設問4（毎回の授業構成・進度）については評価を大きく改善することができた。もっとも、Q3の報告でも書いたとおり、2コマ連続か週2コマかという開講形態の違いに由来するものであるかもしれない。
- 他方で、昨年度同様、設問5（到達目標の理解度：3.72）及び設問6（到達目標の実現感：3.71）の得点が伸び悩んでおり、なお今後の課題というべきであろう。
3. Q3の約71%からは低下したものの、今回のアンケート回答率は61.2%と、法学部及び登録者241名以上の科目の平均を大きく上回った。残念ながら、Q3からQ4にかけてアンケート回答率、ひいては授業出席率が低下するのは例年の傾向であるが、今年度は私の経験でも、Q3に引き続き、Q4としては最高の回答率を得た。これが、私の授業に、学生たちの多くが少なくとも何らかの興味を持ってくれたことの反映であれば喜ばしい。次年度も引き続き、刑法の授業に時間を費やしてくれる学生たちがもっと満足できるような授業を目指したい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 物権法＜2019年度入学者＞
授業コード 44A18-001
教員名 副田 隆重
教員コード 045880
登録人数 411
回答数 161
回答率 39.2%
休講回数 0 回
補講回数 0 回

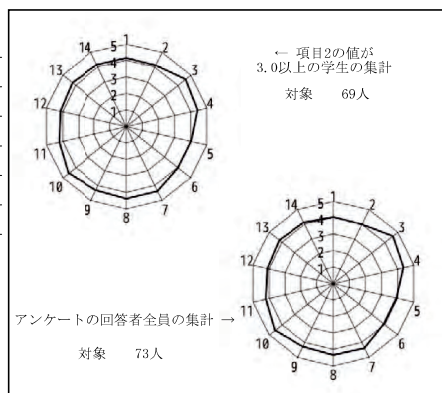


授業評価結果を踏まえた点検・評価

予想外に400人を超える多人数の講義となった物権法であったが、事前に設定した目標値—全体の評価として4.0以上—をクリアすることができた。項目No. 13(授業を通じて知識や理解が深まった)が4.10、同14(全体の満足度)が4.04であった点は安堵している。その他の高い評価を得た項目としては、No. 3の開始・終了時間の順守の4.43のほか、No. 4の授業構成や進行速度が4.19、No. 7の教員の取り組みの誠実さ・真剣さが4.12、No. 10私語等に対する適切な対処が4.25であった。他方で、評価が低かった項目として、No. 11の学生の学習意欲を引き出し積極的な授業参加を促すために適切な指導等があったかにつき3.86の評価であった。情報のインプットに追われて、難しい課題であるが、工夫を試みたい。個別的な意見としては、授業の内容や配布されたレジメがわかりやすいとの評価が多く寄せられた。反対に、改善すべき点として、声が聞き取りにくいとか、声が小さいとの指摘が散見された。過年度の経験から使用された教室S21のピンマイクの性能は信頼できないので、有線マイクを使用した。講義の前後にでも音量につき指摘していただければ対応できたと思われるが、今後はその旨も留意したい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 行政法総論B
授業コード 44B05-001
教員名 榊原 秀訓
教員コード 100548
登録人数 245
回答数 73
回答率 29.8%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



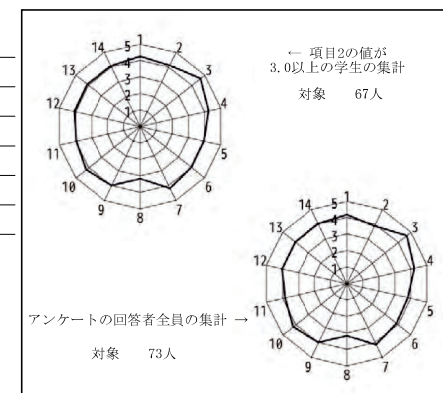
授業評価結果を踏まえた点検・評価

授業評価報告書—行政法総論B

①設定していた目標にはほど到達したと考える。
②過去に比較する適当なものがないので、直前に担当した「行政法総論A」と比較してみる（前者がA、後者がB）。「到達目標を理解することができましたか。」3.49から3.93、「到達目標に向けて力がついてきていると思いますか。」3.55から3.92、「適切な指導や情報提供はありましたか。」3.97から4.21、「質問や相談の機会が、十分に設けられていましたか」4.19から4.12と、概ね上昇か同等である。全体の満足度も3.78から4.11と上昇した。「応用」部分の講義なので、意欲のある学生が残ったからか、レジュメをWebClassを通してではなく、印刷して配布したからか、両方なのかもしれない。自由記述では、レジュメについて好意的意見もあるが、レジュメと判例を分けて配布して欲しいといった要望もあった。そこまで必要か、必要ならば自分で分ければ良いようにも思う。そのためにはWebClassの方が便利だろうが。
③また、自由記述には、「多方面に対する嫌味が多い」とか「朝から叱られると気分が悪くなる」といった意見もあった。「多方面」の中身は不明であるが、もし「社会批評」をこのように感じているのであれば、感性を揺さぶるもっと強い刺激が必要なのかもしれない。後者が「朝」に力点があるのであれば、開講時間を変更するしかない。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 家族法B
授業コード 44B21-001
教員名 伊藤 司
教員コード 100474
登録人数 299
回答数 73
回答率 24.4%
休講回数 0 回
補講回数 0 回

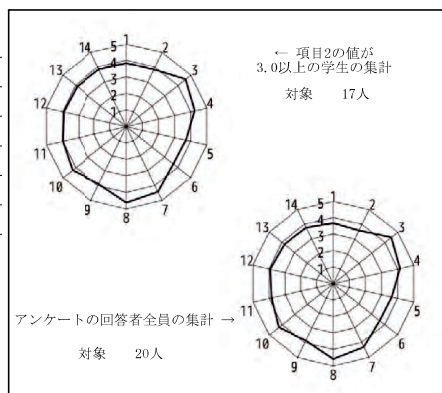


授業評価結果を踏まえた点検・評価

この講義は、民法第五編「相続」を概説するもので、民法の条文を使用して、家族法上のいろいろな問題解決の方法を学んでいくことが到達目標となる。今年度はこの部分の改正が成立し手から初めての本格的講義で、それについての知識も必要となった点でややこちらとしてははてなご舞いであった。それでも学生からはおおむね高評価をえることができ、特に不満も漏らされていないようである。ここから特に早急に改善すべき点などはないように思われるが、これに慢心することなくよりよい講義を追求していくべきであろう。
また以前から指摘してきた点であるが、講義の出席者に比較してアンケートの解答者が少ない。これは以前も指摘した点が、もしも授業評価アンケートに協力をする気のない学生が多いということであれば、アンケートのあり方自体を再検討する時期にきているように思われる。講義時間をこれだけ費消して行うべきアンケートであるのかどうか、あるいは毎回全教員を対象にすべきかどうかなど、検討すべき点は多いように思われる。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 会社法A
授業コード 44B23-001
教員名 佐藤 勤
教員コード 101599
登録人数 76
回答数 20
回答率 26.3%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

今年度、会社法のカリキュラム体系を全面的に改め、会社法Aは、会社法の骨格部門（企業統治）を対象とすることとなった。この範囲は、会社の概念から会社組織まで、会社法B、応用会社法を学ぶにあたり、必須となる部分である。ただし、近年の法改正により、会社の形態が大きく4類型となり、その類型のすべてについて理解する必要がある。また、司法試験、ロースクール入試などの各種資格試験等において必須の領域である。

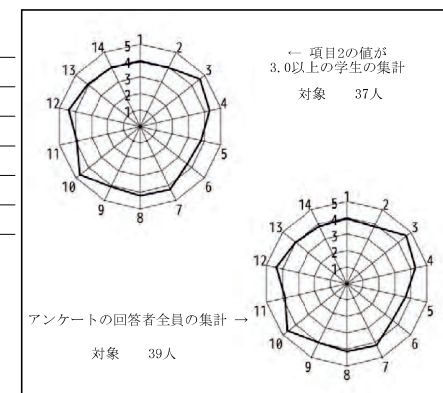
本講義では、上記背景を踏まえ、修得が必要となる範囲を講義範囲とし、各種資格試験に対応できる最低限の知識を習得することを目標とした。このため、自宅学習（中心としては「復習」を推奨している）が必須となる。授業の出席状況は、平均して55%前後であった。定期試験の結果を見る限り、講義の重要なポイントを概ね理解していると思われるものが、約20%程度であった。授業評価においても約20%の学生が肯定的な回答をしていることも一致している。また、この授業を履修する前に興味を持っていたかという設問（1）も13名が肯定的な回答であった。

以上を踏まえると、開講当初の目標は達成できたものと考えている。

今後の課題としては、今回は内容を全面改定後1回目の授業であったことから、講義内容の一部に重複するような部分もあったので、講義内容の一部（レジュメ）の見直しをして、より効果的な授業を行えるようにしたいと考えている。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 国際私法B
授業コード 44B30-001
教員名 青木 清
教員コード 017855
登録人数 154
回答数 39
回答率 25.3%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

今回の授業評価については、正直、驚いている。

項目1から14の平均が4.07、項目3から14の平均が4.10となり、授業評価制度が始まって以来、私自身の最低の数値を示している。3点台の設問が、例年であれば一つか二つであるにもかかわらず、今回は7項目にわたっている。全設問の半分である。担当者としては、この結果を真摯に受け止め、問題点を考えてみたいと思っている。

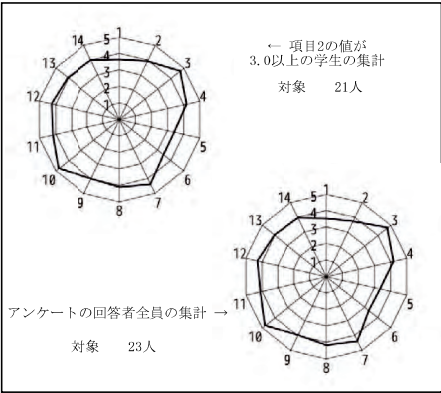
際だって低い設問は、項目5および6で、前者が3.69、後者が3.56である。これらの項目が他に比べ低いのは、前回と同じである。その点では、この点に関する改善策はまったく功を奏していないということになる。かなり時間を割いて、基本的な枠組みのことを数回話したつもりであったが、学生には伝わっていなかったということだろうか。

また、自由記述欄では、「説明がわかりやすい」とか「教え方がわかりやすい」といった、例年、散見される記述があるものの、今回は、独りよがりの独演会といった表現もあった。これにも驚いている。

いずれにしろ、評価結果を冷静に分析してみたいと考えている。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名	西洋法史B
授業コード	44B36-001
教員名	田中 実
教員コード	017038
登録人数	62
回答数	23
回答率	37.1%
休講回数	0 回
補講回数	0 回

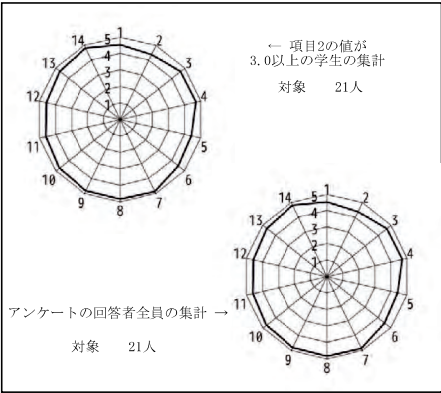


授業評価結果を踏まえた点検・評価

今年度は、登録者数が例年に比べて少なく、概して熱心な態度の聴講者に恵まれたと感じている。項目番号1（聴講前の授業内容への興味）並びに5及び6（到達目標の理解）について、例年に比べて低い。来年度は初回に講義の前提をより詳しく解説したい。その中で、項目番号13（知識習得や理解の深まり）や14（全体の満足度）については、それほど低くなく、ほっとしている。例年と異なっているのは、項目番号12（質問や相談の機会）について比較的高い評価を得ていることである。特段、こうした機会を設けたわけではないが、何人かの学生から毎回のように質問を受け、時間をかけて説明したことが影響しているかも知れない。また、冒頭に述べたように、聴講者数にも関係していると思われる。内容に関わる項目番号7（担当者の真摯さ）の数値は、学部隣接科目が少なく内容的にもそれなりに高度な講義に対しての評価としてありがたい。自由記述欄で、補足説明に対する肯定的な評価と、かえって復習を難しくしているとのコメントを得た。工夫改善の余地があると思う。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名	経済法B
授業コード	44C20-001
教員名	齊藤 高広
教員コード	103599
登録人数	60
回答数	21
回答率	35.0%
休講回数	0 回
補講回数	0 回

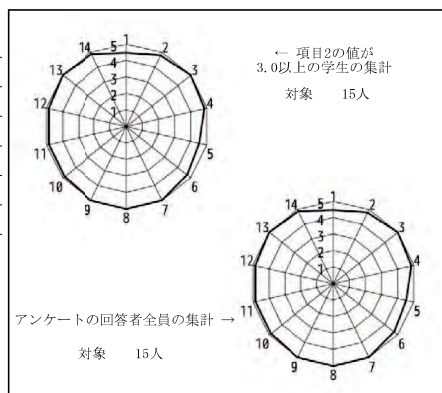


授業評価結果を踏まえた点検・評価

本講義は、市場経済における基本ルールである独占禁止法のうち、不公正な取引方法を扱った。学生の目標として、①経済活動に対する法的規律を理解すること、②市場における競争秩序の意義と規整方法を法的に説明することができること、③競争減殺行為の規制手法を理解することを掲げていた。おおむね15類型ある不公正な取引方法を網羅的に検討することができた。学生アンケートによれば、講義の前後で生じた実際の事件に触れることができ、有益であった旨の回答が複数見られた。とくに、就活生の個人情報・データ（辞退率）の無断販売について、不公正な取引方法における優越的地位濫用に該当することがある、というニュースについては、身近に感じられた模様である。シラバスに記載しているように、「企業のみならず、とくに消費者が普段接する経済活動とも密接に関連している」講義科目であることを体感してもらったようである。毎回配布するレジュメについては、毎年見直しをし、かつ、新聞記事もほぼすべて刷新しているが、引き続き、次年度も行っていきたい。なお、「テストに向けた問題の解き方やポイントの解説」を要望した者もいたが、講義では、常に具体的な事例を挙げて検討しており、また、事例式問題に対する解答方法のコツや思考方法については、今年度の講義でも扱ったはずである。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 倒産法
授業コード 44C22-001
教員名 小原 将照
教員コード 102897
登録人数 61
回答数 15
回答率 24.6%
休講回数 1 回
補講回数 1 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

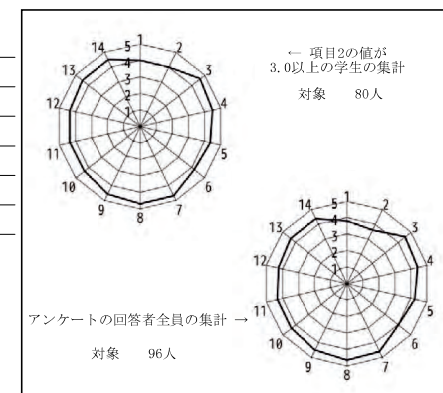
開講時点で設定していた目標については、かなり到達できたのではないかと考える。特に、この講義は民事実体法の基礎的な知識がなければ理解が不十分になることが多いので、できるだけ基礎的な知識の説明から入るように工夫した。このやり方の場合、内容が本来の倒産法の内容を薄めることに、研究者としての立場からは不満に思う点がないわけではない。しかしながら、学生の理解を高めるといふ点からは、挑戦的なやり方の方がいいのではないかと考えていた。そして、そのことが、今回の高評価につながったことから、研究成果を教えるというよりも、高度な専門知識をいかにわかりやすく伝えるのか、という点が重視されていると感じている。

また、学生の自主的発言や、復習に対する姿勢を検討するなど、前年度および前々年度からの修正点が、上手く活きているとの手応えを感じた。授業内容だけではないところの工夫が、学生の学習意欲や習熟度に対する実感を持たせるのではないかと感じた。

次年度に向けては、ほぼマイナーチェンジをしなくてもよいと考えるが、説明の仕方について、いくつか修正したい回があるので、その点を修正したい

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 宗教論[I]3
授業コード 10A01-019
教員名 山田 望
教員コード 000211
登録人数 145
回答数 96
回答率 66.2%
休講回数 0 回
補講回数 0 回

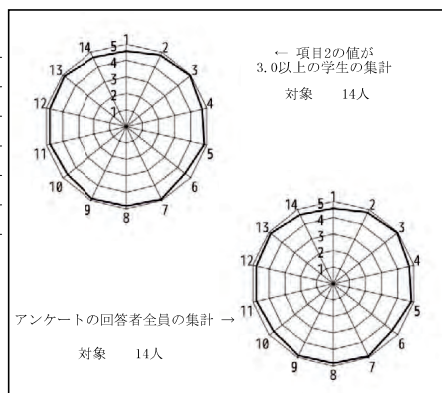


授業評価結果を踏まえた点検・評価

宗教科目の分野別平均値との差異を検証してみると、設問2、3、4、9、10、11、12の7項目について、分野別平均値を僅差であるが、本科目の各平均値が下回っていた。それに対して、授業全体の評価である設問13、14については上回っていたので、ほぼ、開講当初に設定していた目標に到達することができたものと判断できる。問題は、分野別平均値を下回っていた7項目についてである。分野別平均値との差異が最も大きかったのが、設問2の予習や復習を含め、主体的に授業に参加し、内容を理解しようとする努力をしたか、という設問であった。これは、自由記述欄の記述内容からもある程度、原因が推定できる。すなわち、昨年まで、毎回の資料を紙媒体による印刷物で配布したのを、今年初めて、WEBClassを使用した電子ファイルをアップすることによる配布に切り替えた。ところが、資料を毎回PDF化するのに手間取り、ほとんどの回で、WEBに資料をアップするのが、前日、もしくは当日の朝となってしまう、学生の立場からすると、前もってそれらをダウンロードして事前に学習しておく時間が取れなかったものと推定される。次回からは、資料の電子ファイルをアップロードするタイミングをより早い段階でアップすることとして、学生たちが十分に事前学習が可能になるよう努めたい。次に分野別平均値との差異が大きかったのは、設問10の私語、携帯電話、遅刻などの授業の妨げになる学生の行為について適切な対処がなされていたか否かを問う設問であった。確かに私語や携帯電話に関する注意喚起が手薄であったとの印象はあるので、次回以降は学生への注意喚起を徹底させていきたい。本結果を次回以降の授業に役立てていきたい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 日本語II(総合)2
授業コード 11L12-002
教員名 山口 和代
教員コード 049726
登録人数 22
回答数 14
回答率 63.6%
休講回数 0 回
補講回数 0 回

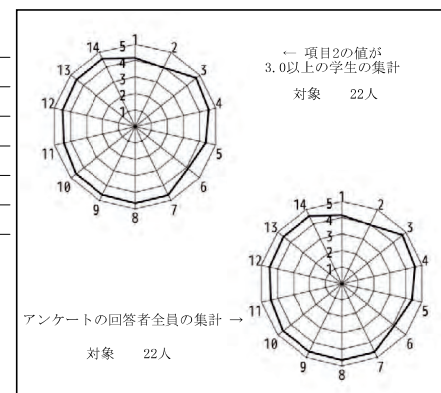


授業評価結果を踏まえた点検・評価

この授業では社会的トピックに関する基礎的な知識を学びながら、学期中に3回発表し、発表内容をまとめてレポートを書くという作業を行い、能動的学習により知識と技能を活用し身に着けることを目的とした作業を行う宿題を多く課した。授業評価を実施する時期が課題発表の時期と重なったため、回答しなかった学生もいたようである。学生による授業評価の設問への回答結果から授業運営および全体的な評価に関する項目を見ると、4.57から4.93という結果で、教員の授業に取り組む姿勢に関する項目が4.93で、授業の到達目標への理解・新しい知識の獲得と理解の深まりについても4.86であったことから、学生たちが授業の目標を理解し、力を付けてくれたと思われる。自由記述の良かった点に関しては、6つの回答があり、知識の獲得など、授業内容を肯定的に評価する内容であった。ただ、日本語Ⅰから急に難しさが増すことが大変だという記述もあり、扱うコンテンツが総合政策学部の講義に準じたものであるため、最初は難しいと感じる学生もいるようである。また、おそらく授業環境についてだと思われるが、広いクラスでの授業を希望する学生がいたが、学生数が増えたため、モニターの使用に際し、席によっては見にくいこともあったかと思われる。今後も様々な点に注意を払い、学生の様子を見ながらモチベーションを下げることなく取り組んでいけるよう、工夫をしたいと思う。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 文学A2
授業コード 12A03-002
教員名 原田 直枝
教員コード 018754
登録人数 46
回答数 22
回答率 47.8%
休講回数 1 回
補講回数 1 回

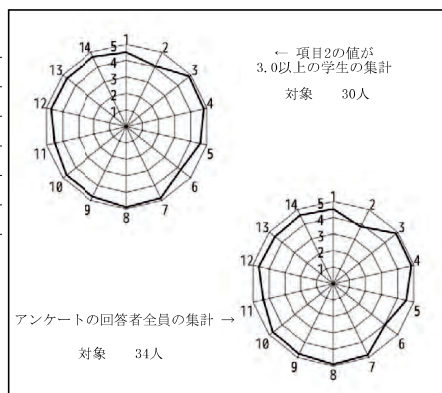


授業評価結果を踏まえた点検・評価

- ①開講に際して3点の到達目標を設定した。すなわち、1)「文学というのは何か？人間の生活とどう関わるのか？」という問いについて、自分なりの答えや説明の糸口をつかんでいる。2)日常の中で無際限に消費されていく通信文と、「文学」との違いが、わかるようになっている。3)中国古典の文献にこめられたメッセージを自力で読みとるための、初歩的な知識や方法を理解している。授業後に提出させたリアクションペーパーの記述、および本評価、試験の成果等を見ると、基盤科目として目標を最低限達成できているように見受けられる。
- ②評価項目6「あなたはこの授業の到達目標に向けて力がついてきていると思いますか」の数値は、授業を終えての学生たちの自己評価の側面があると思うが、それが他項目に比べて低めである。古典文学（漢詩）を一人で理解し考察できるようになるには、15回授業を受けただけでは充分とは言えず、これからさきの反復や習熟の機会があつてだんだん身についていくものであると思われる、この段階での低めの自己評価は、やむを得ないかも知れない。担当者としては、今後、充足させていってもらえたら嬉しい。
- ③パワーポイントの運用について、受講者の理解に有益になるよう、今後も工夫と努力をしていきたい。また、今年度は、抽象的な説明に頼らず、詩のイメージを視覚的に具体的に伝えるように幾つか工夫したところ、比較的評判がよかったので、今後も続けていきたい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 社会の諸相4
授業コード 13C04-004
教員名 久村 恵子
教員コード 100026
登録人数 59
回答数 34
回答率 57.6%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

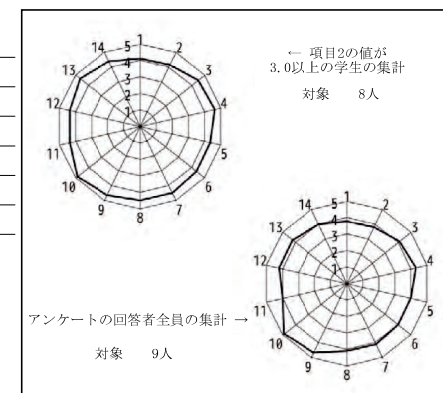
本授業は、「リーダーシップ」という概念に焦点を当て、前半ではリーダーシップに関する一連の研究の流れを理解し、後半では、変わりゆく現代社会における新たなリーダーシップのあり方を通じて今後の課題や問題についても紹介し、理解を深めてもらうことを目的とした。

今回の結果では、設問3～設問14の平均値は4.64（前回値4.45）、全体的評価（設問1～設問18）の平均値も4.58（前回値4.41）であり、学際科目の平均値を踏まえても、全体として肯定的な評価が得られたといえる。自由記述欄では、「説明やスライドが分かり易い」、「WebClassでの講義資料の掲載が復習に便利」、「配付プリントが使い易く、分かり易い」、「声が聞きやすく話すスピードもよい」など授業運営面に関する肯定的なコメントと共に、これから社会で歩いていく上でのヒントが得られたといったコメントも寄せられた。

その一方、自主的な学習に関する項目（設問2）の平均値が3.82（前回値3.92）と項目全体の中で低い値である。次年度ではより自主的な学習へと繋がるようにHP上の資料に関して学生への具体的な使用・活用方法もより紹介・指導すると共に、自主的な学習に結びつく授業運営の在り方を探りたい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 社会の諸相5
授業コード 13C04-005
教員名 前田 洋枝
教員コード 102264
登録人数 11
回答数 9
回答率 81.8%
休講回数 2 回
補講回数 2 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

開講当初に設定していた目標はほぼ到達できていたと考える。各評価項目の平均値はほとんどが4点台前半であるが、これは授業評価アンケートの回答者が10名に満たない中で、匿名で提供される学生回答結果を確認すると1名のみが多く項目に1を付けていたため、このことが影響していると思われる（この1名以外の学生はほとんどの項目に4または5と回答しており、履修者全体としては基本的に肯定的な評価を得られたと考えている）。

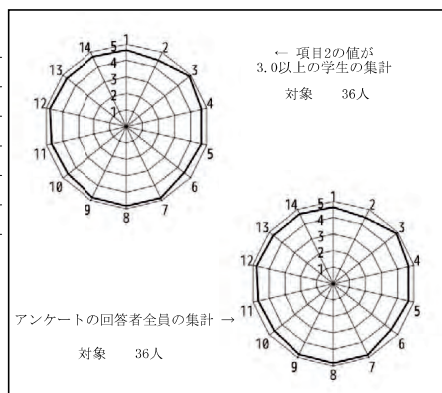
自由記述欄では良かった点について、この欄の記入者全員からゲーム演習が挙げられていた。実施後の振り返りも含めてより充実したものにしていきたい。

自由記述欄の「改善すべき点」で指摘されていたスライドのスピードについては、配布資料への書き込み時間を取るなど配慮しているが、書き込み欄を特に設定していないスライドについても、早すぎることがないように注意したい。

（他に「水曜日だから、午後に授業入れるのはどうかと思う。（2時間も）また、テスト週間にいれるのは、ちょっと困る。」との記述もあったが、受講生へのアンケートの結果、2コマ分の休講に対する補講として授業最終週で元々の15回目の水曜1限の後に2限と3限の2コマを使用することを決めたが、他の水曜日の3限を2回使ったり他の曜日の5限とするよりはよかったと考える。※この記入をした学生は補講を実施した1月22日をテスト週間と勘違いしていたようだが、通常の授業期間の15週目であった。なお、この授業での休講は担当者の体調不良によるものだったため、今後は体調不良で休講にする必要がないよう、十分に注意していきたい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 中級中国語II語法2
授業コード 35A08-002
教員名 梁 暁虹
教員コード 045229
登録人数 51
回答数 36
回答率 70.6%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



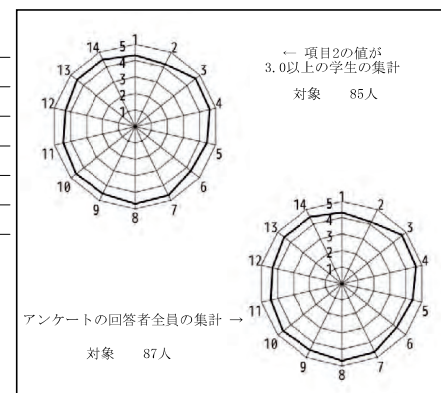
授業評価結果を踏まえた点検・評価

「学生による授業評価」から判断して、この科目に設定した目標は、概ね達せられたと思う。「授業評価集計」を見ると、設問1～14の平均値は4.70、設問3～14の平均値は4.72、設問3のは4.89、設問8のは4.86、設問7のは4.83、設問9と12のも4.78、結構高い点であり、学習者の満足感が窺えよう。授業担当者のもそれに比例する。

学生の自由記述項目15では、「先生が楽しそうに授業をしてくれる」「文法だけでなく、DVDを見て中国の暮らしや文化についての知識も得ることができた。」「授業の説明が分かりやすく、理解が深まりました。」「予習の量と進む量がちょうど良かった。」「教科書の例文が複雑だと先生が判断したときには、生徒の理解のために簡単な例文で解説してくださり分かりやすかった。」等のよい評価があった。しかし教師として改善の余地がないわけではない。設問6は「あなたはこの授業の到達目標に向けて力がついてきていると思いますか」は4.50であり、少々低めであった。そのため、今後どのようにしたら、学生がこの授業を学習する目的を理解、彼らの学習欲を引き出し、さらに積極的な授業参加を促すような工夫をする必要があると考えている。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 社会保障法
授業コード 44C24-001
教員名 三輪 まどか
教員コード 102263
登録人数 286
回答数 87
回答率 30.4%
休講回数 1 回
補講回数 1 回



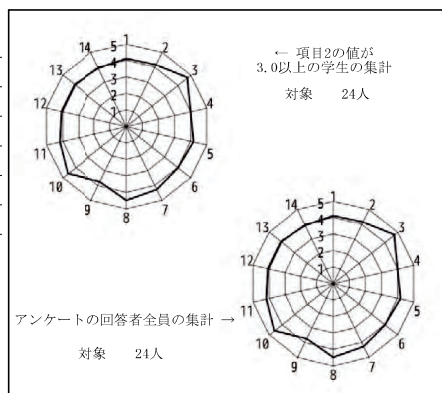
授業評価結果を踏まえた点検・評価

本講義は、わが国の社会保障の法構造と仕組み、現代社会の情勢に基づく法のあり方について教授するものであるが、定期試験の記述などを見ると、それが十分に達せられ、社会における課題と社会保障法との関わりについて十分理解されたものと思われる。

数値的なものを見てみると、全体の満足度は4.48、履修前と履修後の満足度は4.32から4.49とアップしており、また、私の意欲についても4.64と高評価をいただいたものと思う。これはひとえに、受講してくれる学生の皆さんの熱心さのたまものと思う。ここに記して御礼申し上げたい。また、自由記述に目を転じてみると、具体的に講義してもらえた、丁寧に教えてもらえた、今まで知らなかったことも知ることができたという好意的な意見があり、教員冥利に尽きる。一方で、レジュメをWebclassで配布することについて、紙で配付してほしいとの不満の声が多く上がった。しかしながら、環境への配慮と必ずしも全員が出席せずあまりが出てしまうこと、また受講人数280名近くということもあり、大変申し訳ないのだが、この点はご了解いただきたい。加えて、授業前に全ての資料をダウンロードさせてほしいという要望もあるが、さすがにこれは授業準備の都合や理解度を測りながらの授業であるため、ご容赦いただきたい。また、条文→判例→学説という勉強の進め方を希望する学生もいたが、社会保障法という法律の特性上、こうした講義は大変難しく今後も気をつけていきたいと思うが、給付→拠出→事例という進め方になっている旨理解していただけるとありがたい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 環境と文明
授業コード 46B04-001
教員名 大八木 英夫
教員コード 104123
登録人数 79
回答数 24
回答率 30.4%
休講回数 1 回
補講回数 1 回



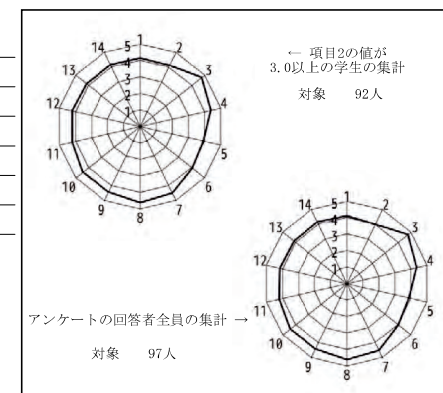
授業評価結果を踏まえた点検・評価

本授業では、環境と文明に関して、世界の文明とその背景にある自然環境と密接なかかわりについて、自然環境と人間との関わりについて科学的に探究することを目的としている。その中で、現代社会で生じている自然環境問題についての理解を修得させ、多岐にわたる専門分野における情報や数値がもたらす意味を基礎的事項として授業を展開させた。

内容については、地球環境と文明の間にどのような周期性あるのか？、約2万年前の最終氷期が我々の生活にどのように関わっているのか？、過去2千年間の気候の変化は世界の歴史とどのような関係にあるのか？、身近な地域の自然環境と都市はどのように形成されたのか？、について理解を深めた。本講義では人類が築いてきた文明と自然環境との関係にスポットを当て総合的に文明と環境のかかわりについて、日本だけでなく世界の各地の情報を提供しながら、学生の意欲を引き出すことに努めた。アンケート結果からは、進行速度や構成についてはやや評価されなかった部分があるが、概ね学生からの対応は良好であり、授業への展開については良好であったと考えられる。今後に向けては、特に、時事ニュースは、常に変化していくものであり、今後の授業においても古い知識にならないように気を付けながら、自然地理学や地球科学等の複数の学問における様々な観点について授業を展開し、環境と文明の基本論理の講義を介して、自然環境について自分で考える能力を身につけさせることを目標としたい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 国際関係論
授業コード 46D06-001
教員名 小尾 美千代
教員コード 102453
登録人数 236
回答数 97
回答率 41.1%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



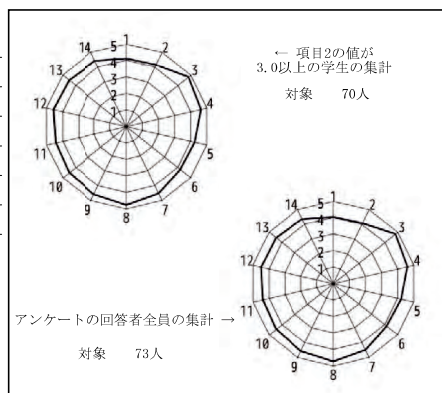
授業評価結果を踏まえた点検・評価

この授業では、国際社会の特徴を国内社会との相違から位置付け、国際関係の変遷や主要な課題に焦点をあてつつ、リアリズム、リベラリズム、コンストラクティビズムを中心とする国際関係の主要な理論や概念について扱いました。そして、(1)国際関係論の基礎的概念を理解すること、(2)国際関係の変遷や現在の主要課題について理解すること、(3)国際関係を体系的に捉える分析視角を習得すること、の3点を目標としました。回答者は97人で、そのうち「受講に際して主体的に授業参加をした」との質問項目で3.0以上の評価をした人は92人でした。授業評価については、項目1～14の平均値は4.28（前年度：4.05）、項目3～14の平均値は4.31（同4.06）でしたので、それぞれ昨年度よりもよい結果となりました。

項目5「この授業の到達目標を理解することができましたか」については3.90で、昨年度の3.77よりは高くなりましたが、総合政策学科の平均値4.18よりは低かったのでこの点は課題だと認識しています。項目6「あなたはこの授業の到達目標に向けて力がついてきていると思いますか」については4.01で昨年度の3.48からはかなり上がったのでよかったと思います。映像や講演会、パワーポイント、私語への対応は好評でした。この科目は1年次履修の基礎科目なので皆さんの今後の専門的な学びにつながってくればうれしいです。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 環境地理学
授業コード 46D14-001
教員名 藤本 潔
教員コード 100100
登録人数 219
回答数 73
回答率 33.3%
休講回数 0 回
補講回数 0 回

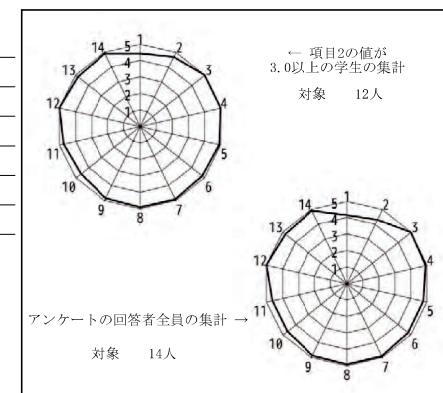


授業評価結果を踏まえた点検・評価

本科目は2017度から新たに開講した科目であり、これまでの2回の授業評価の結果を踏まえ、いくつかの改善を試みた結果、項目3-14の平均が2017年度の4.15、2018年度の4.30から、今年度は4.48へ向上した。200名を超えるマスプロ授業としては高い評価が得られたと言えよう。主な改善点は試験と授業参加度（レポートを含む）の比率を8：2から7：3に変更した点である。この科目は当初は演習的要素も取り入れた科目とする予定であったが、2017年度は履修者が450名のマスプロ授業となったため、授業内での演習的要素を最低限に抑え、そこで行えなかった部分を3度レポートとして課すこととしたが、その負担の割に授業参加度の比率が低いという学生からの指摘があり変更したものである。昨年および今回の自由記述欄にさらにこの比率を高めてほしい旨の記載があったが、中にはまったく授業に出席せずにレポートを提出する学生もあり、そのような学生に単位を与えることにもなりかねないため、もうしばらくはこの比率で様子を見たい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 社会調査法
授業コード 46E04-001
教員名 狭間 諒多朗
教員コード 104124
登録人数 25
回答数 14
回答率 56.0%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

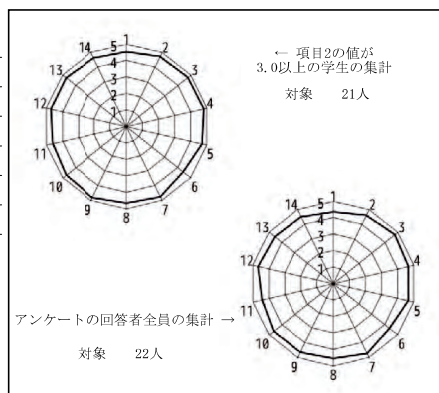
本授業では「①社会調査の過程を理解する」「②社会調査を正しく評価する能力を習得する」「③統計パッケージを使って簡単な分析ができる」の3つの到達目標を掲げている。①については、調査の設計から実査、報告書の作成に至るまでの課程を一通り解説することができ、受講生の理解も進んだと考えている。②については、授業の中で適切ではない社会調査の例をたびたび紹介することで、習得できたと思われる。③についてはSPSSの使い方を説明し、毎回の課題をこなすことで多くの受講生が自分で分析できるようになったという手ごたえを感じている。

数値データをみると、項目番号1の平均値が4.14と低くなっているのに対して、その他の項目は4.5を超えており、おおむね高い評価となっている。これは、受講前に興味がなかった受講生が授業を通して本授業の内容を理解し、満足して受講を終えたことを意味している（項目番号14の平均値は4.93）。項目番号12の平均値が5.00となっていることからわかるとおり、本授業では質問・相談の時間を多くとることを心掛けた。このことが、学生の高い満足度につながっていると考えている。また、自由回答をみると、担当教員の説明がわかりやすいとの記述が多くみられることから、受講生の理解度に沿った適切な講義ができたと自負している。

ただし、全体として授業で説明する内容が多く、詰め込みすぎた可能性もあると感じている。今後は授業内容を精査し、適切な分量に調整したいと考えている。

2019年度Q4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 総合政策英語III5
授業コード 46F03-005
教員名 CROKER, Robert
教員コード 100082
登録人数 36
回答数 22
回答率 61.1%
休講回数 0 回
補講回数 0 回

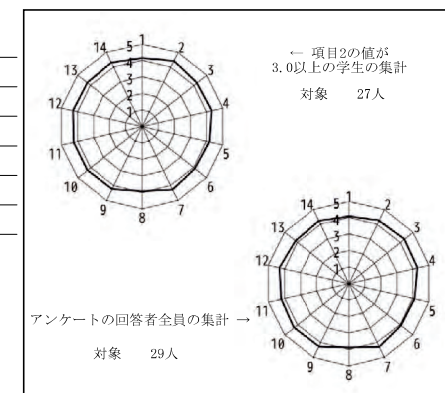


授業評価結果を踏まえた点検・評価

This was an introduction to comparative sociology class. The goals of the class were to learn about one country in depth and the basic concepts of sociology through exploring basic topics such as family, education, health, and gender. The students chose which country they wanted to focus upon, and each week researched about that country. In the first week, students read a book about the country; in the second, they compared their country to another country. From the third class, each week a different sociological theme was explored: education, food and health, changing family structures, life course, and gender. In the final class, each student gave a 5~7 minute presentation to a small group about the country that they had researched about. The results of the student feedback were positive. The students seemed to enjoy the class very much, and found it useful. In students' written comments, one student wrote that we looked at many graphs on PowerPoint slides and on handouts, some of which the font was too small in. That student suggested that all of the class materials be placed on WebClass with fonts that are big and easy to see. I will do so from the next semester.

2019年度Q4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 行政学
授業コード 46K01-001
教員名 井上 洋
教員コード 100177
登録人数 111
回答数 29
回答率 26.1%
休講回数 0 回
補講回数 0 回

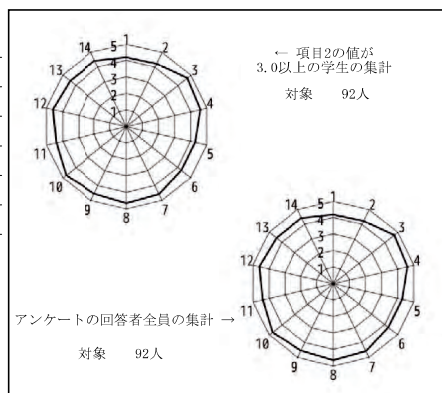


授業評価結果を踏まえた点検・評価

近代日本における官僚制の形成過程において発生した諸問題が2020年の今の行政にみられる悪弊（問題状況）につながっているということを、歴史をたどりながら話すことを課題としたが、授業に対する満足度の数字4.21というのとは別に、講師の意図がいくらかなりとも受講生に受け止められたかどうか心もとない気がしている。公文書の改竄や不当廃棄、統計数字の不正操作などなど現今の日本の行政は底が抜けてしまった感があるが、まずこの問題状況を共有できないのである。時事的な問題を意識的に話すとかそういう次元ではまったくなく、もっと深いところで社会や行政に対する認識拒否の態度や権力に対する無力感とその裏返しに依存意識が受講生の間に形成されている気がする。このような受講生からなる教室空間において社会や歴史に関するいかなる発話が可能なのか自問を繰り返すばかりである。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 グローバルガバナンス論
授業コード 46L01-001
教員名 佐藤 創
教員コード 103882
登録人数 183
回答数 92
回答率 50.3%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

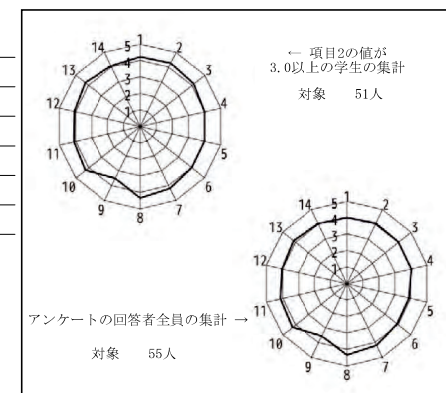
開講当初に設定していた目標と到達については、アンケート及びテストの結果をみると、おおむね達成できたと思われる。本授業の全体の満足度は4.43であり、全体の平均4.36、また登録者数別の集計（本講義は180名あまりの登録）4.38よりも若干良い結果となっている。

今回のこの授業ではレジュメを事前配布し、そのレジュメのなかで穴埋めをさせる方法を採用した。この方式は概して、学生の評判が良いという印象をもつ。しかし、学生の「レジュメ依存」が憂慮すべき水準にあり、レジュメやパワーポイントなどいわば親切にしすぎていることが学生の自発性を低めているのではないかと考えており、つまり、学生にいわば楽をさせることで学生の満足度の数値が向上しているという側面が、この方法にはあると思う。

しかし、レジュメを配らないと、課題論文などの事前学習を課しても結局、学生がついてこれず、授業の進度が落ちることになりがちである。したがって、「当該授業の理解度」「自発的な学びの促進」「社会人としての教育」という方程式の、マスプロ授業の落としどころとしては、このあたりなのかもしれないとも考えている。が、引き続き、他に良い工夫がないか試行錯誤しながらより良い講義になるように努めたい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 対外政策論
授業コード 46L03-001
教員名 平岩 俊司
教員コード 103613
登録人数 162
回答数 55
回答率 34.0%
休講回数 0 回
補講回数 0 回

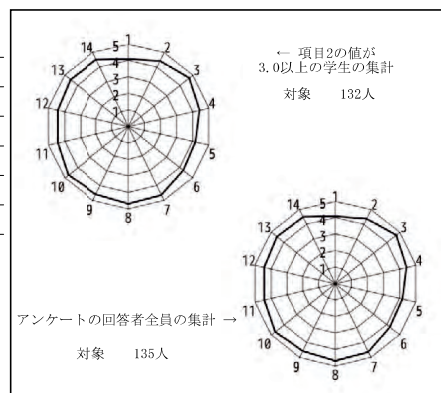


授業評価結果を踏まえた点検・評価

日本の朝鮮半島政策を事例として日本の対外政策決定過程、政策の特徴などを整理し理解してもらうことを目指したが、期末試験の結果からおおむね目標は達成できたと言って良いし、むしろ予想以上に理解してもらえたと思う。ただ、講義期間中にも日本の朝鮮半島政策で具体的な動きがあったことから、その部分を説明する際には、構造的な理解に資する事例というよりも多少時事解説的な講義になりがちであったので、今後、リアルタイムで発生する事例についても、構造的な理解に資する事例として整理、説明する必要があると感じた。また、できるだけ臨場感をもって授業を行いたいとの思いもあり、PDFを使わず、ワード画面を板書代わりに使用しているが（ここ数年同じスタイル）、PDFとシート、あるいはレジュメの配布を希望する学生が多い。板書の方法について改善する必要があると感じる。ただ、自分なりのメモ、ノートの取り方を学ぶことも講義の重要な目的であることから、そうしたことを学生に周知する必要もあると感じた。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 環境経済学
授業コード 46N01-001
教員名 鶴見 哲也
教員コード 102265
登録人数 226
回答数 135
回答率 59.7%
休講回数 1 回
補講回数 2 回

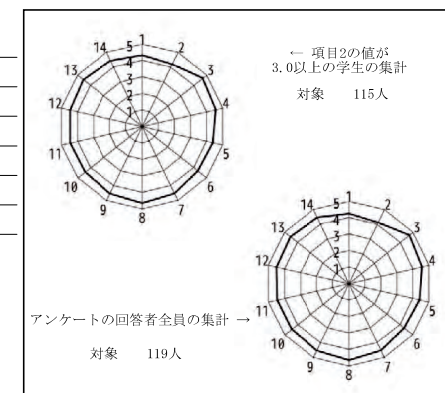


授業評価結果を踏まえた点検・評価

項目3から項目14の平均が4.51であり、同人数帯の平均である4.43を超えることができ、一定の評価が得られたと考えている。到達目標である環境問題を金銭価値で議論していく点について、期末試験の結果をみると一定の理解を受講生はしているとみられる。環境経済学は経済学の中で応用科目に該当するため、経済学を受講したことがない学生にも分かるように、ゼロから具体例を豊富に説明をしているが、この姿勢が一定程度評価されたのではないかと考えている。ただし、平均を大きく上回る点とならなかったのは、内容がもともと難しいことも影響していると考えられる。理解が難しい学生のために質問の機会を多く設けたが、個別対応は多人数講義の限界もある。そのため難しいと言われる内容を現状よりもさらにかみ砕いて説明をしていく姿勢をもち、新聞等の具体的事例を、最新のものを取り入れながら、より理解をしやすいものを題材に説明をすることでさらに理解をしやすい講義を作成していきたい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 国際経営戦略論
授業コード 46N03-001
教員名 金網 基志
教員コード 102923
登録人数 273
回答数 119
回答率 43.6%
休講回数 2 回
補講回数 2 回

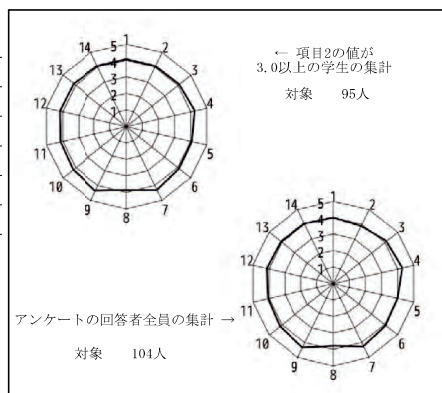


授業評価結果を踏まえた点検・評価

項目3から14の平均が4.51であり、総合的な評価を示す設問14の平均は4.44である。これらの数値は、総合政策学部の平均を上回っており、大学全体の登録者数別集計の平均も上回っている。自由回答を見ると、具体例を示しながら説明している点、スライドの分かりやすさ、説明の分かりやすさ、Exerciseの活用、DVD視聴などが評価されている。国際経営に関する理論の説明と具体例をセットにして説明している点が、分かりやすいという評価に繋がっていると考えている。また、教員側の一方通行にならないように、学生に質問を投げかけ、それについてまずプリントに各自書かせた上でマイクを向けてそれぞれに意見を聞くスタイルも評価されている。一部で、プリントの枚数が多いという評価もあるが、プリントで復習がしやすいという評価もあるので、プリントについては現在のスタイルを続けていくことにする。レポートの課題についてのアプローチも欲しいという評価もあり、この点は今後検討していくことにしたい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 地域経済論
授業コード 46N06-001
教員名 森 徹
教員コード 101861
登録人数 315
回答数 104
回答率 33.0%
休講回数 0 回
補講回数 0 回

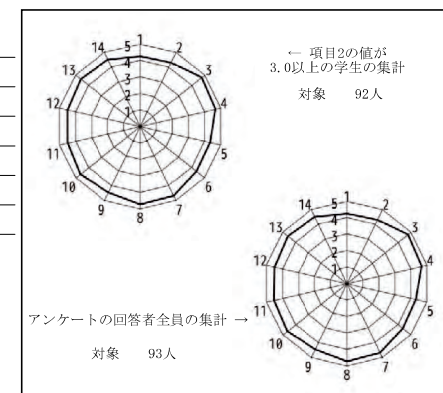


授業評価結果を踏まえた点検・評価

- ①授業の進行が授業計画通りに進んだこと、授業評価の平均点が概ね4.0を超えていること、定期試験の成績がかなり良好であったことなどから、当初の到達目標に掲げた人口、産業構造、所得水準の地域的分布とその推移及びこれらの相互連関に関する理解の獲得、日本の地域政策の変遷とその背景の理解、大都市制度の現状と今後の方向性に関する考察力の育成等の達成は概ね図られたと考えている。
- ②講義内容や方法に関する総合評価の平均値は4.0を超えており、比較的良好な評価を得られた。特に、担当者の授業への誠意や熱意、学生の理解への配慮等の点で高い評価が得られたことは、喜ばしい結果である。反面、担当者の声が小さい、聞き取りにくいというネガティブな評価、自由意見も出されており、今後話し方やマイクの使用方法に配慮して講義を進める必要があるとの認識を抱いている。
- ③今後については、上記のような評価結果を踏まえて、真摯で熱心な講義姿勢を一層追求していくとともに、話し方やマイクの使い方に留意しつつ、学生にとってよりわかりやすい説明方法を工夫していきたい。また、大人数の授業では困難な面もあるが、学生の意見や質問を引き出す方法についても一層工夫していきたいと考えている。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 政治変動論
授業コード 46N10-001
教員名 星野 昌裕
教員コード 101897
登録人数 221
回答数 93
回答率 42.1%
休講回数 0 回
補講回数 0 回

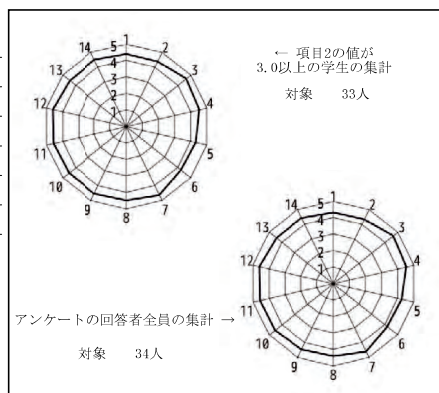


授業評価結果を踏まえた点検・評価

- この授業では、東アジアの政治変動を理解するのに必要不可欠な政治学の基本概念を詳しく説明したうえで、中国の一元支配政治システムの形成とその変容過程、台湾における権威主義体制の確立と民主化、また授業に関連する時事問題、今年度については香港区議会議員選挙および台湾総統選挙をテーマとして取り上げた。これらを通じて、「地域とは何か」、「歴史とは何か」といった地域研究の分析手法、「権威主義」、「民主化」、「民主主義」などの政治学概念、世界各国の政治体制を比較分析する手法を習得することが、開講当初に設定した本授業の目標である。
- 授業評価集計における各設問の平均値をみると、例えば、項目3から項目14の平均値が4.57の評価を得ていることから、総じて言えば開講当初の目標を十分に達成することができたのではないかと考えている。授業の到達目標に向けて力がついてきているかどうかを問う設問6の平均値は4.39ではあったが、昨年の4.12に比べて0.27上昇しており、昨年の課題であった「授業の内容は理解できていても、それを自らの分析手法として十分に活用、応用するには至っていない」の点がやや改善されたと考えられる。
- 今年度の授業も、政治学概念に関する授業が10回、具体的な事例に関する授業が5回となり、政治学理論の比率が高めであった。来年度以降の授業においても、抽象的な政治学概念を平易に伝える工夫を一層ほどこしつつ、東アジアの時事問題をより多く具体的事例として取り入れ、政治学理論と東アジアの現状分析を実践的につなぎあわせる知見を受講生に示せるよう努力していきたい

2019年度Q4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 開発政治論
授業コード 46N11-001
教員名 POTTER, David M.
教員コード 100098
登録人数 133
回答数 34
回答率 25.6%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



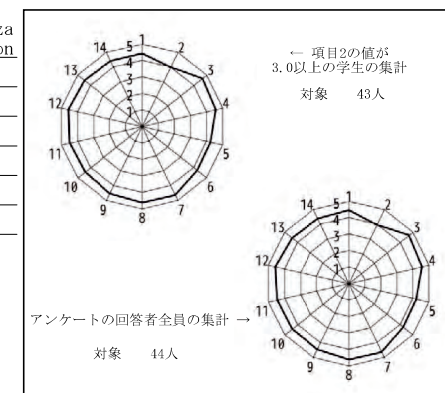
授業評価結果を踏まえた点検・評価

This course covers postwar international political and economic development. It is lecture-based.
I am in a bit of a quandary as to how to read the results of this evaluation. First, the overall scores are good and in line with previous evaluations. On the other hand, the response rate this time was low. Written responses were very limited, only four in total, so it is difficult to generalize student comments. there were no student comments about the classroom even though it is one of the most outdated on campus.

I will continue to teach this course as I have done in the past few years.

2019年度Q4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 グローバル化と国際協力 / Globalization and International Cooperation
授業コード 48E05-001
教員名 山田 哲也
教員コード 100839
登録人数 110
回答数 44
回答率 40.0%
休講回数 1 回
補講回数 1 回

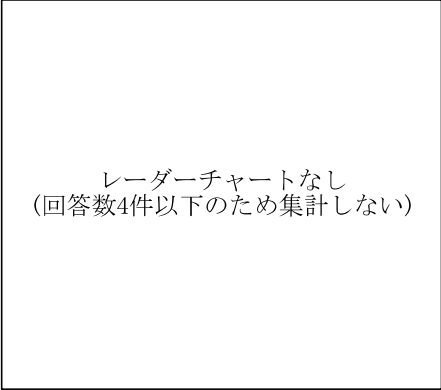


授業評価結果を踏まえた点検・評価

- ①この科目（名）は、自分自身の専門分野と関連はあるものの、科目（名）通りのアプローチで研究を行ったことはなく、いかに自分の専門分野に近づけて講義を行うか迷いがあったのが実体である。また、完成年度前ということもあり、シラバスを自由に組むことができず、その意味でのジレンマもあった。従って、目標と到達の程度については自己評価し難いものがある。
- ②とはいえ、学生からの評価をみれば、（自由記述の中には「シラバス通りではなかった」とのコメントはあったが）おおむね「自分自身の専門に近づけた『グローバル化と国際協力』」の講義としては成立していたのだろうと思われる。また、アクティブ・ラーニングについては、学生の基礎知識のばらつきや、アクティブ・ラーニングそのものに対する学生の好き嫌いに温度差があり、結局決まった学生が積極的に発言する傾向が強かったように思われる。
- ③次年度については、教科書の選定・使い方、授業の内容について、予め学生に明示するよう努めたい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名	文化と情報<国際科目群>
授業コード	13E05-901
教員名	鈴木 敦夫
教員コード	016469
登録人数	13
回答数	3
回答率	23.1%
休講回数	1 回
補講回数	1 回

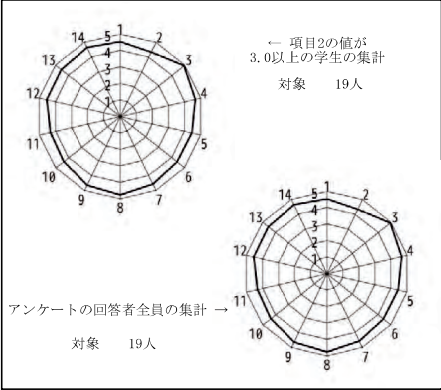


授業評価結果を踏まえた点検・評価

受講者数が少なく、授業評価は3名の学生が行った。ここからは、①、②、③とも有用なことは読み取れない。この科目は、国際科目群で、熱心な学生は4名ほどいたが、そのうちの3名が評価してくれたものと思われる。3名の評価の平均は、それぞれ5.0、4.7、4.5であり、一応授業内容に対しては高い評価を下している。自由記述にほかの教室の音が聞こえるとあったが、マイクは使用していなかったの、ドアの遮音性の問題かもしれない。登録者に比べて、出席者が少ないことに対しては、来年度からは出席をとるなどして対応したい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名	文化と情報3
授業コード	13E09-001
教員名	三浦 英俊
教員コード	102259
登録人数	32
回答数	19
回答率	59.4%
休講回数	1 回
補講回数	1 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

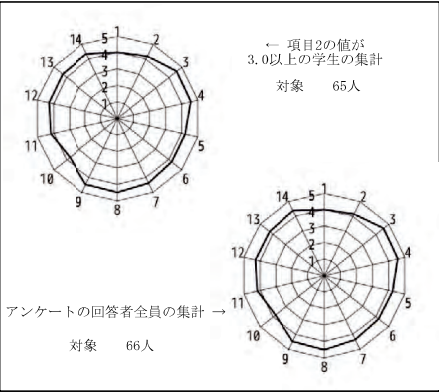
①開講当初に設定していた目標と到達の程度について。
1. ORが実社会でどのようにつかわれているか、いくつかの例を知っている。
2. ORの基本的手法について理解している。
3. 実社会の様々な問題解決のためにORの一連の考え方が有効であることを理解している。
の3つを設定した。おおむね到達できた。

②数値データおよび自由記述等を踏まえての担当科目に関する総合的な自己点検・評価。
この授業を担当して5年目となり、教科書の内容を補完するための教材や例示も蓄積ができたことと、講義内容が「こなれてきた」ためであろうが、一定程度の授業評価を得ることができた。

③次クォーター・学期以降に向けての改善点、今後の抱負、方針など
ORを専門としない学生に対して、新しい知識として「教養としてのOR」を学ぶことの意義を伝えることに今後とも努力していきたい。このような学生諸氏に対して最適化問題を解くソルバーとして適当なものが見当たらず、授業では数理計画問題は定式化をするだけで解くのは教員がやり方を説明するだけとなっている。来季に向けて容易に使える最適化ソルバーを見つけておきたい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名	幾何学概論
授業コード	51B01-001
教員名	小市 俊悟
教員コード	101691
登録人数	235
回答数	66
回答率	28.1%
休講回数	0 回
補講回数	0 回

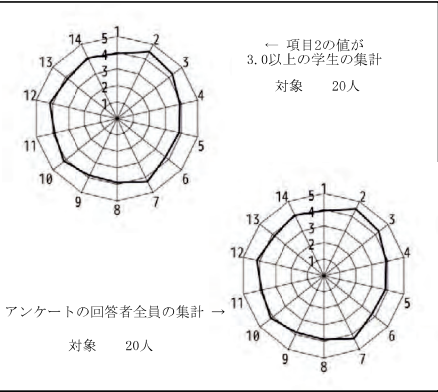


授業評価結果を踏まえた点検・評価

- ①成績等から判断すれば、ほとんどの学生が目標に到達したものとする。この授業では、グラフアルゴリズムを主に教えているが、定期試験において最も複雑と思われるアルゴリズムを利用する問題に対して2割弱の学生が間違えていた。定期試験ではPCを利用できないので、扱う問題のサイズが小さいため、答えとなるアルゴリズムの出力結果は、実のところ、アルゴリズムを厳密に適用しなくてもわかる問題である。このような確認すれば間違いに気付くような問題に対して、誤答率が高いのは残念である。
- ②評価数値も悪いものではなく、自由記述欄も説明方法や配布資料について好評なものが中心であったので、総合的には良い授業を行うことができたものとする。注意すべき指摘として、授業中にうるさいときがあるというものがあった。授業評価以外のところでも、これについては指摘されたことがあり、今年度は注意をしたので、昨年度よりは改善したのではないと思うが、引き続き改善が必要であろう。教室が縦に長いというS22教室の特性もあり、全体の状況を把握することが難しい。
- ③多少内容の変更はあったものの、5年近く同じような内容の授業であったが、理工学部の改組後には開講時期が変更になることもあり内容を少し変更する（変更できる）予定である。好評な部分は引き継ぎながら、教えるべき内容を考えていきたい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名	非線形・整数計画法
授業コード	51B04-001
教員名	福嶋 雅夫
教員コード	042820
登録人数	144
回答数	20
回答率	13.9%
休講回数	0 回
補講回数	0 回

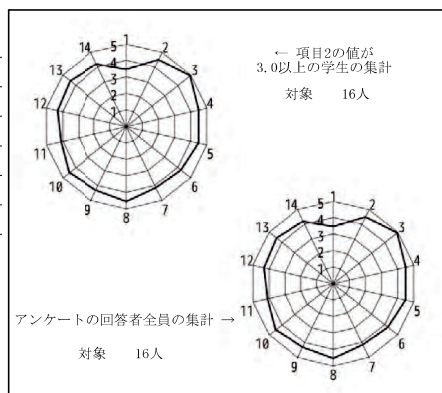


授業評価結果を踏まえた点検・評価

本科目は主に3年生を対象とした専門科目であり、大学1年および2年で学習する線形代数学や微分積分学などの数学的知識を基礎として、さまざまな問題のモデル化、および最適化の理論とアルゴリズムを説明している。最初の数回はモデル化が中心であるが、学生が興味を持てるようにと考え、いろんな応用分野から問題を取り上げた。その際、関連する事柄にも言及するなどしたため当初の予定より若干多くの時間を要してしまった。さらに後半の理論とアルゴリズムの説明においても、基礎となる数学的事項について学生の知識を確認しながら、必要に応じて補足説明などを行いながら授業を進めたため、全体として時間不足になってしまい、授業の最後のほうでは、駆け足で説明をせざるを得なかった項目が出た。比較的多人数クラスであることや数学に対する学生の関心と習熟度にかなりばらつきがあるという事情はあるが、現実の問題への応用について言及したり、丁寧な説明を行うことなどを心がけることにより、学生の学習意欲を引き出すよう努めている。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 情報倫理[FB・FF・FG]3
授業コード 10C01-017
教員名 大月 英明
教員コード 047340
登録人数 30
回答数 16
回答率 53.3%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



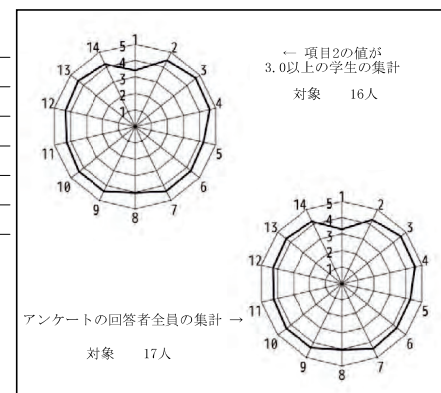
授業評価結果を踏まえた点検・評価

ここ何年かは情報倫理が授業評価の対象となっており、評価の点数や、設問による評価の高低は例年ほぼ同じ傾向にある。(設問1を除き)今回は設問7と11が低い、どちらも評価1、2をつけた学生がそれぞれ1名であった。一方、どちらの設問も、評価5、4をつけた学生は12人である。回答者数が少ないと、このように少数派の評価が大きく平均を下げてしまうことになってしまう。授業評価のために時間を確保はしているが、なかなか協力してもらえないこともあり、回答率を上げるのには苦勞をしている。

次に自由記述欄の指摘に注目したい。この授業では、グループディスカッション、その後学生による発表を行なっている。学生の感想としては、例年概ねポジティブな評価がほとんどである。しかし今回のアンケートでは、「ディスカッションをせずにすぐに発表準備に取りかかるグループが多い。ディスカッションだけの時間をもうけるべきではないか」という意見があった。また、「教員の質問が専門すぎる」「学生から質問を出すことを強制して欲しくない」というものもあった。これらの意見は一見バラバラではあるが、実は同じことが原因であるように思える。ディスカッションなしで、すぐに発表準備にとりかかることにより、与えられたテーマについての理解が深まっていないのが、これらの意見の元にあるのではないだろうか。このクラスで特に専門的な質問をしたことはないが、質問に十分答えられないグループが見受けられた。ディスカッションとは、他のメンバーの考えを知る気づきの場である。ディスカッションを深めることで、「どんな質問が出るか」ということが自然にわかるのである。スライドを作る能力は長けている学生は多いようであるが、これからはこのような点に注意して授業を運営していこうと思う。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 情報倫理[FB・FF・FG]5
授業コード 10C01-019
教員名 金山 知俊
教員コード 019455
登録人数 30
回答数 17
回答率 56.7%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

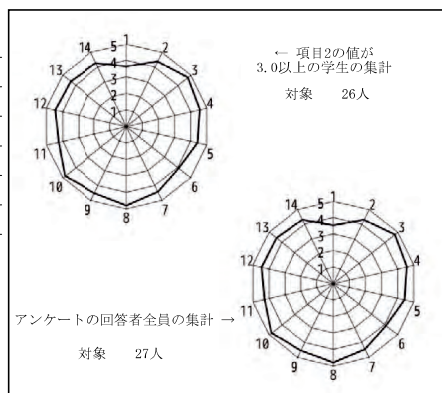
1. 本科目はe-learningとグループ・ディスカッションや発表によって学習を進めるアクティブラーニング形式の科目であり、情報ネットワークに関する4つのテーマについて順次学習を進めることでシラバスに示された3つの到達目標は達成できたと考える。第2,第3クォータに引き続いての担当であり、学生への対応やTAによるサポートなど継続的に改善を積み重ねてきたことで順調に授業を実施することができた。

2. 授業評価の結果は項目1~14の平均が4.26、項目3~14の平均が4.33であり、情報科目全体の集計結果より少々低い値であった。個別の項目の評価では履修前の授業に対する興味を示す項目1が3.29、音の聞き取りにやすさに関する設問8が4.06と、他の項目に比べ低い値であった。自由記述欄にも教員の声が聞き取りにくいという意見があった。この点はマイクを積極的に使用することで改善を図りたい。その他の項目は顕著に低い値はなかったが、登録人数30名に対して回答数が17名であり、授業評価を行わなかった13名には不満があった可能性もある。また、レポート提出に遅れた学生から他クラスと扱いが異なるということで不満を主張する意見があった。考慮すべき理由がない限り期限後のレポートは受け取らないのが原則であるので対応は適切だったと考えるが、他クラスとの整合性については今後注意するようにしたい。

3. 第4クォータはTAの人数不足により、TAのサポートが受けられなかった回がある。授業中にも次年度のTA募集を案内したので来年度はTAの体制が充実することを期待したい。また、レポートの取り扱いなどが異なることのないようにクラス間で調整を行いたい。また、授業日程の都合もあるが、年末年始に欠席者が多い回があった。グループのメンバーに迷惑をかけることになるので、できるだけ授業を欠席しないよう学生に注意を促したい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 情報倫理[FB・FF・FG]7
授業コード 10C01-021
教員名 張 漢明
教員コード 049627
登録人数 30
回答数 27
回答率 90.0%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

■開講当初に設定していた目標と到達程度について

・ネットワーク社会における基本的な情報の取り扱いやコミュニケーションに関する知識や特性を理解して、情報の利用や発信をするのさいに社会的な責任を伴った行動ができるようになるという目標は、概ね達成することができた。

・プレゼンテーションやそれに対する質疑応答の機会を通じて自分の考えを相手に伝え議論する能力を身に付けるという目標は、十分に達成することはできなかった。

■総合的な自己点検・評価

・アンケート結果から、最初は授業に対して興味があまりなかった（項目1 3.5）がその他の項目では値が高かったことから、グループ学習や発表を通じて情報倫理に興味を持ち、情報に対する理解は深まったと考えられる。

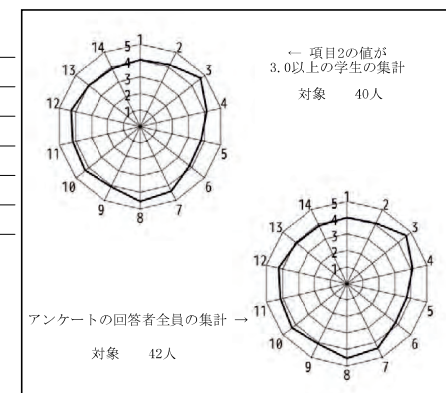
■改善点、今後の抱負、方針

・レポート内容の質にはばらつきがあるので、事前にレポート作成のポイントを示し、提出されたレポートを元に解説を行うことで、レポート作成の意欲を高めたい。

・プレゼンテーションに対する質疑応答を活性化するために何らかの工夫を施したい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 情報システム開発実習[S]2
授業コード 52A04-002
教員名 横山 哲郎
教員コード 101934
登録人数 49
回答数 42
回答率 85.7%
休講回数 0 回
補講回数 2 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

本実習では、教育版レゴマインドストームEV3を用いた工学的なソフトウェア開発の実践をしている。受講生は設計図に基づき統合開発環境を用いて開発したプログラムをクロスコンパイルしてロボットに転送し実行する。ロボットを実際に動かすことで、組込みソフトウェア開発技術の基礎概念や基礎技術を実践を通して理解を深めることを目標としている。本実習を始めて開講したときには、ロボットプログラミングは目新しいものであったが、街でも子供向けロボット教室を見かけることが珍しくなくなり、受講生の中には課題で課されている以上の解答をするものも少なくない。ロボットを実際に動かす実習を楽しんでいると感じる受講生は結構いるようだ。

項目1から14の平均と項目3から14の平均は同じグループの科目群とくらべて約0.15ポイント低かった。特に

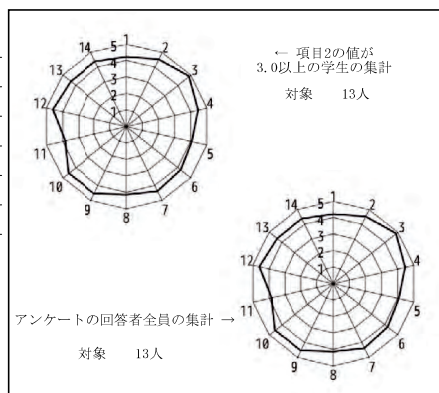
- ・設問5 この授業の到達目標を理解することができましたか。
- ・設問6 あなたはこの授業の到達目標に向けて力がついてきていると思いますか。

はそれぞれ3.76と3.79であり、最も低かった。毎回の講義資料で目的を掲示し、レポートにおいて自分の言葉で目的を書くように課題を課していたが、到達目標との関連がより明確になるように講義資料を工夫したい。

本年度は実習に使用する環境をブロックベースのビジュアルプログラミング言語のみならずプログラミング基礎・プログラミング応用で用いたC言語を用いるようにした。C言語は産業界でも用いられる言語であり学ぶことは受講生にとってもより有意義であると捉えてもらえるものとする。提出されたレポートにおいて、設計図（プログラム流れ図）とプログラム以外に文章をほとんど書いていないレポートが少なからずある。実験レポートをほとんど書いたことがない受講者に対して理科系の文章の書き方を引き続きサポートするようにしたい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 ソフトウェア工学実習[S]1
授業コード 52A05-001
教員名 蜂巣 吉成
教員コード 019448
登録人数 48
回答数 13
回答率 27.1%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

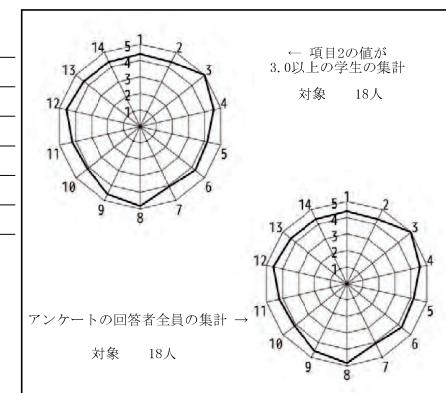
この授業は3年生の必修科目で、週1回、火曜1,2限の開講であった。Webアプリケーションを試作する実習を通して、情報システムの仕組みや開発方法を理解し、ソフトウェア工学に関する知識を深めるのが目的である。実習は第1回から15回分の講義資料、課題を提示した。各週ごとに補足資料も提示した。授業のはじめにその回で行うことの概略を説明した後、各自に課題に取り組んでもらった。実習内容はWebサーバやDBMSの設定、HTMLやCSSによるWebページの作成、PHP、およびPHPによるフレームワークを利用したWebアプリケーション開発であり、少し高度な内容となっている。

全学共通の授業評価の点数は設問11を除いて4点以上なので、少し難しい内容の割には評価は高かったと思う。ほぼ全員出席していたのにも関わらず、アンケートの回答率は高くないが、向上心の高い学生の回答が多かったものと推測される。設問11については、学生が課題に取り組んでいるときに机間指導などを行なったが、学生にとっては十分ではなかったようだ。実習内容が高度なので、改善も難しいが、来年度はFAQを用意するなどの工夫したい。

実習にはTAの学生2名の協力を得た。授業の運営、学生からの質問対応などに関して大変感謝している。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 ソフトウェア工学実習[S]2
授業コード 52A05-002
教員名 宮澤 元
教員コード 019422
登録人数 49
回答数 18
回答率 36.7%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

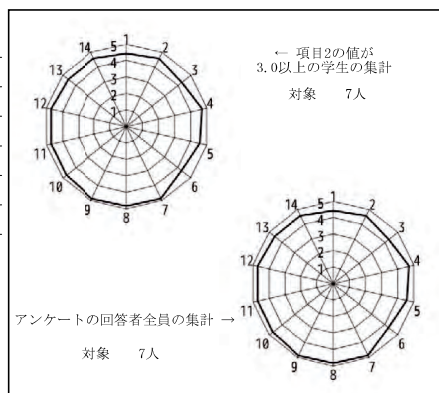
学科の専門科目を学習中の3年次生を対象に、Webアプリケーションを題材に実践的なソフトウェア開発を経験してもらうことを目的に、用意した資料を元に課題をこなした上に、さらに学生の自主的な工夫を促すような実習形式を中心として授業を行った。設問14までの項目は全て 4以上と学生から評価される授業を提供できたことは素直に喜ぶたい。一方で、設問19～21の結果は2点台半ばかりから3点台前半と、学習内容を十分定着させることができなかったのは大きな反省点である。

課題の難易度は高いものの、基本的な部分はほぼ資料通りに進めればこなせる内容で、学生はこちらの期待通りにソフトウェア開発の面白さと難しさを経験してもらえたものと思う。自由記述を見ても、資料や解説の内容、TAによる実習中の質問対応を行ったことなどが評価されている。改善点についても、実習中のトラブル対応についての意見や課題に対する解答の提示に関する要望など、建設的な提案が寄せられた。

授業の意義は十分理解されており、学生からも課題に積極的に取り組もうという意欲が感じられるので、学生からの提案も含めて資料等を改善し、来年度以降の授業で学生の内容に関する理解度を向上できるよう取り組みたい。

2019年度Q4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 ソフトウェア工学特別講義[S]
授業コード 52B10-001
教員名 青山 幹雄
教員コード 046243
登録人数 58
回答数 7
回答率 12.1%
休講回数 1 回
補講回数 1 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

①開講当初に設定していた目標と到達の程度について

本科目はソフトウェア工学の中の発展科目である。これまで学んだ内容が現実社会でどのように応用され、また、応用する上でどのような課題があるか、実社会におけるソフトウェア工学の実践とその最新の話題や、現場における経験などの講述により、理解することを目標としている。そのため、科目の過半を企業でソフトウェア工学を実践、指導、あるいは研究する立場にある各分野の技術者、研究者、経営者を講師として招聘し、内容に応じた授業運営を行っている。毎回、時間内で質疑の後にレポート課題を課して提出しているが、その内容の評価から受講生は目標を概ね達成していると判断できる。さらに、アンケート結果から、ほぼ全ての項目で評価4.5を超えており、非常に良い評価となっている。設問13、14から受講生の達成度、満足度が高いといえ、科目としての意義が非常に高いといえる。

②数値データおよび自由記述等を踏まえての担当科目に関する総合的な自己点検・評価

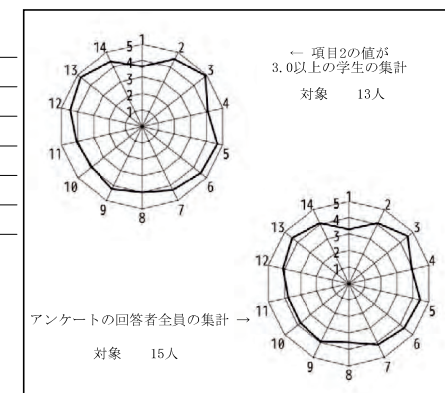
受講生のアンケート結果から、ほぼ全ての項目で評価4.5を超えており、非常に良い評価となっている。設問13、14から受講生の達成度、満足度が高いといえ、科目としての意義が非常に高いといえる。ただし、回答者数が少ないことから今後回答者数を増やす必要がある。

③次クォーター・学期以降に向けての改善点、今後の抱負、方針など

外部講師は概ね東京/関東地区にある大手企業に勤務しており、本年度から、遠隔地からの非常勤講師の旅費支払いができなくなり、次クォーターでの講師の手当が大変困難となっており、科目の存続に関わっている。本科目の重要性、ならびに、受講生の高い受講意欲、達成度、満足度に鑑み、科目の存続を図るための対策が必要である。

2019年度Q4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 情報倫理[FS・FA]4
授業コード 10C01-026
教員名 杉原 桂太
教員コード 101115
登録人数 25
回答数 15
回答率 60.0%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



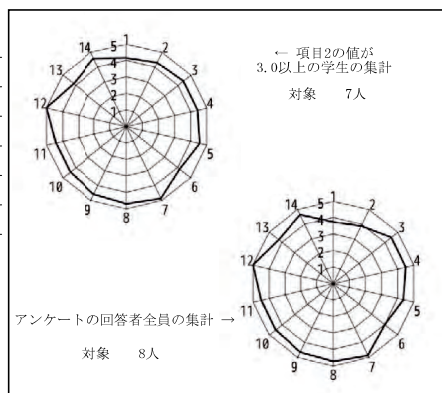
授業評価結果を踏まえた点検・評価

この授業は、「アクティブラーニング」を採用し、「反転授業」を行うという共通方法が複数教員で行われた科目であった。そのため、そのような授業が問題なく展開し、受講者が情報倫理をより理解できるようになることが目標となった。項目（1-14）では4点台の評価も得られたが、3点台もあった。設問1（3.27）から、受講者はインターネット利用のルールや法について興味を持つ傾向がそれほど高くなかったことが分かる。項目4（3.93）より、下記項目16を踏まえる必要があることが分かる。項目8（3.60）より、教員の発話に関して改善の必要があることが分かる。項目9（3.93）から、受講者の理解度への留意が求められる。項目10（3.80）から、受講者のコントロールを求める意見が見られることが分かった。項目11（3.80）より、学生が授業の内容についての情報提供を求めていることが分かる。自由記述からは、設問15について、「グループワークがたのしかった」、などの評価がある一方で、項目16では、「先生の話の論点や結論が分からない。ほとんどスマホで調べて問題を理解していく形だった。」、という記述があった。項目16については、教員が「アクティブラーニング」、「反転授業」を促進するための説明を行っていることが受講者に伝わらなければならないことが分かった。

以上を踏まえ、諸所の改善点が必要であることが分かる。次のクォーター以降のこの科目においても、「反転授業」等のこの科目の狙いがより効果的に実施できる授業を目指したい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 人間と機械<国際科目群>
授業コード 13E04-901
教員名 大石 泰章
教員コード 101405
登録人数 11
回答数 8
回答率 72.7%
休講回数 2 回
補講回数 2 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

○当初の目的と到達の程度

この授業は国際科目の1つとして、動的システムの基礎と応用について英語で講義し、数学が実世界においていかに役に立つかを伝えることを目的とする。文系の学生が履修できるように、高校で必修の数学だけ（数学Ⅱ、数学Ⅲまで）を仮定し、必要なことはすべて授業中に説明する。

予定通りすべての内容を講義することができた。この授業を担当するのは3回目であり、内容も整理されて完成の域に到達しつつあると考える。

○数値データおよび自由記述をふまえた自己点検・評価

数値評価はほぼすべて4点を超えており、「英語で数学」というハードルの高い授業であることを考え合わせると、満足すべき水準に達していると思われる。

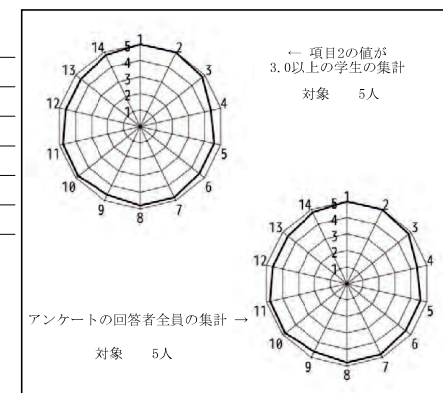
評価できる点（設問15）には、「わかりやすい」「質問がしやすい」「理解できるまで教えてもらえる」などとあった。一方、改善すべき点（設問16）には特に記載はなかった。学生から見て満足できる授業になっているものと解釈して素直に喜ぶたい。しかし教員から見ると、難しい授業であるとの思いはぬぐえない。実際、英米や国際教養の学生は楽しそうにしていたが、それ以外の文系の学生は妙に静かであった。説明を丁寧に行っても、英語なので理解につながっていない可能性があり、悩ましい。

○今後の改善点、抱負、方針など

せっかくの授業なので、もう少し受講者が多いとよい。授業の宣伝に努めたい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 数学科指導法B
授業コード 15B81-001
教員名 杉浦 洋
教員コード 100769
登録人数 25
回答数 5
回答率 20.0%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

・開講当初に設定した授業目標

講義と受講生の模擬授業からなる授業である。講義では、近代日本の数学教育の流れと問題点について述べる。また、高等学校の数学単元の基礎について述べる。模擬授業では、25分の授業と相互評価を行う。

授業の他に、英語で書かれた数学教科書の翻訳と、教科書の作成のレポートを課す。2つのレポートにより、英語を通して数学に触れ、数学的経験と視野を広げ、また、知識を整理し、説明力を養う。

・実践状況（目標達成度）

今年は受講生が25名だったので、7.7回を講義、8.3回を模擬授業に当てた。

第1回は近代日本数学教育史、第2回は現代数学教育の問題点、第11回は大正時代の教育改革に関するビデオ鑑賞、第12～15回は高校数学の単元の数学的基礎について講義した。

模擬授業は、概ねよく準備されていた。板書法、授業組み立ての要点、生徒の学力に対する配慮などについて、指導した。

英語翻訳、教科書作成は積極的に取り組んでいた。

・授業評価

アンケートを見るとこの授業は好評である。受講生は目的意識があり、積極的に授業に取り組んだことがわかる。高校単元の数学的基礎に関する講義も好評である。

・改善点抱負方針

アンケートの回答数が5で、非常に少ない。強くアンケートへの参加を求める必要がある。高校単元の数学的基礎はこれからも積極的に取り組みたい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 情報科指導法B
授業コード 15B85-001
教員名 河野 浩之
教員コード 048595
登録人数 7
回答数 3
回答率 42.9%
休講回数 0 回
補講回数 0 回

レーダーチャートなし
(回答数4件以下のため集計しない)

授業評価結果を踏まえた点検・評価

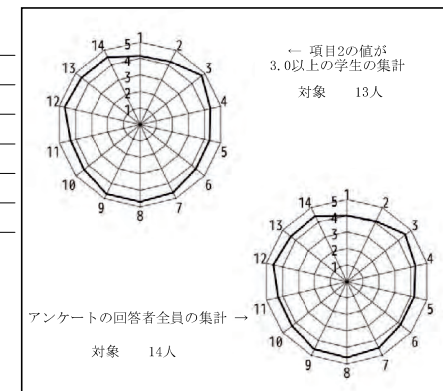
①開講当初に設定していた目標と到達の程度について。
学習指導案の作成の課題は、PDCAサイクルにより、修正すべき点をコメントする形で複数回の作成を行った。模擬授業では、例えばセキュリティなどの最新情報を収集して補助教材作成を行うなどした。作成した指導案において計画した時間で、模擬授業の円滑な実施を試みた。その他、模擬授業は、教員以外に、他の学生による評価を行うことで、適切に改善するきっかけがつかめると考えている。以上より、多くの学生は、開講目標に到達した。

②数値データおよび自由記述等を踏まえての担当科目に関する総合的な自己点検・評価。
受講生7名（内、大学院生1名）から3件の回答を得た。回答数が少ないためレーダーチャートがないが、「課題の作成にPDCAサイクルを導入していたことはより良い学習効果を得られるものだと感じました。」と記述した回答があった。教員を目指す学生であることが多く、熱心に取り組んでいると考えられる。

③次クォーター・学期以降に向けての改善点、今後の抱負、方針など
昨年度に続いて、今年度の授業でも取り上げたが、学習指導要領改訂が進んでいる点に注意した授業を実施する必要がある。高等学校については、2020年度は教科書検定となっており、2022年度の使用開始までの移行期間となっていることに注意を払っている。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 制御システム実習2
授業コード 53A02-002
教員名 中島 明
教員コード 103140
登録人数 42
回答数 14
回答率 33.3%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



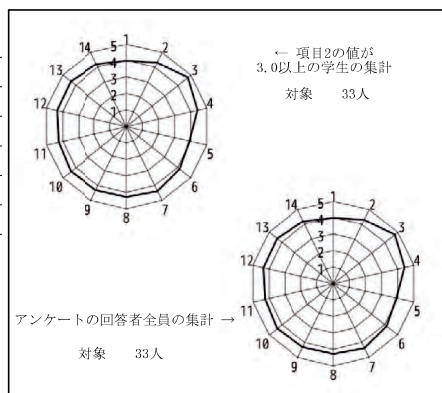
授業評価結果を踏まえた点検・評価

1～18まで4以上のスコアを記録しているが、こちらは教員側がそれなりに真剣に授業運営をしていればそれなりの評価がもらえるものであり、指導側の授業態度が最低限は満たしているとは言えるであろうがそれ以上のものではない。もっとも重要な項目である19～21については毎年の通りの低スコアであり、これらの値を改善できていないことについて反省が必要である。
また、アンケートがオンラインになってから回答数は低迷を続けており、その中で殊勝にも回答してくれる学生は基本的にまじめで成績も優秀ある傾向があるにも関わらず理解度に関わる項目が低いことは、非常に由々しき事態である。
実習をすすめるために必要な基礎知識を補うための指導に大きく時間を囚われる構成となっているため、一つ一つの課題自体は理解できても、それらを複合した課題まで理解が及んでいないことが考えられる。
授業・自習と実習のバランス調整は非常に難しいものではあるが、必要な知識の授業時間をもう少し減らし、実習により自分で考える時間を増やす方が必要であろう。

話は変わるが、同実習はQ3、Q4と実施しているが、Q3の学生に比べQ4では無気力で積極性にかける学生が非常に多くいたのには驚いた。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 電子通信工学実習2
授業コード 53A03-002
教員名 野田 聡人
教員コード 103679
登録人数 43
回答数 33
回答率 76.7%
休講回数 0 回
補講回数 0 回

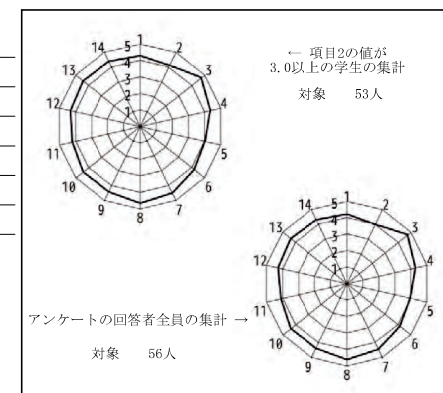


授業評価結果を踏まえた点検・評価

- ①開講当初に設定していた目標と到達の程度について。
授業にすべて出席した学生は最終的に全員目標通りの水準のレポートを提出している。なお目標は本学科の実態を考慮し、常識的な工学部2年生のレベルから考えると相当低く抑えている。基本的な内容としては昨年度に準ずる実習を実施したが、授業時間内に完了しない学生が昨年度に比べ相当減り、かなり早めに終わる学生もあった。初学者にとっての使いやすさを考えて使用機材を一新したことが奏功したかもしれない。
- ②数値データおよび自由記述等を踏まえての担当科目に関する総合的な自己点検・評価。※
昨年と同授業に比べると各段に評価が高くなっている。昨年までは授業時間中にアンケート回答時間を設けていなかったが、今年度は授業時間中に回答の時間を設けたため回答率が上昇し、これまで「アンケートで低評価を付けることで授業に関する不満を晴らしたい」というモチベーションの回答に支配されて低評価に偏っていたものが、より真の全体像に近いものが得られた結果と考える。
- ③次クォーター・学期以降に向けての改善点、今後の抱負、方針など
他人のレポートの剽窃などの確証は得られていないものの、大学2年生の日本語能力があれば明らかに異常性に気付くはずの文を羅列するなど、本人の思考のアウトプットとして文を書いているのではないと思われるレポートが散見される。このようなレポートは作成する時間も無駄であり、評価する時間も無駄である。無駄を排除する方法を来年度に向けて検討しておきたい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 情報通信セキュリティ[S]
授業コード 53B08-001
教員名 石原 靖哲
教員コード 103810
登録人数 233
回答数 56
回答率 24.0%
休講回数 0 回
補講回数 0 回

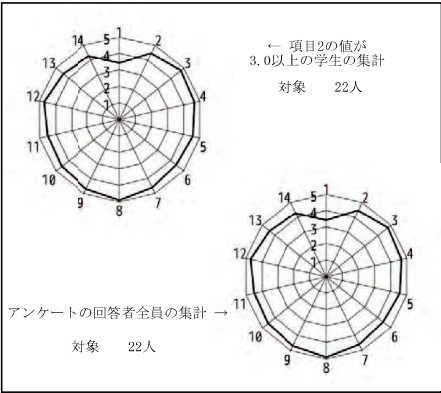


授業評価結果を踏まえた点検・評価

- ①情報セキュリティに関する個々の技術の習得度合いや位置づけの理解に関しては、今年度はほぼ完ぺきに習得・理解した学生がいた一方で、半分以上の学生が目標に到達しなかった。ただし、毎回の授業の出席人数は履修者全体の半分強で、その大半が教室の後ろのほうに着席していた状況を考えれば、妥当な結果であるとも考えている。
- ②今年度初めて取り上げたトピックであるウェブセキュリティに関して、授業に合わせてプログラムを自作しデモを行ったのだが、そのことを評価してくれた学生がいたことが大変うれしい。
- ③昨年度は履修登録180名に対し今年度は230名余りと大幅に増えたのだが、前半は授業中の私語が激しく、しゃべる奴は出て行けと怒鳴りつけたことも数回あった。質問に来る学生も少なく、これまでで最も手ごたえのない授業であった。昨年度は合格者約7割に対し、今年度は4割程度と、結果もその手ごたえのなさを反映したものになった。真面目に勉強しようとしている学生を守るためにも、授業を聞く気がない不真面目な学生を減らすべく、初回の授業全体の説明時にしっかりと指導したい。また、来年度はテキストを最近出版されたものに変更する予定であり、授業内容もそれに応じて微修正することになる。自由記述でリクエストがあったように、演習問題に取り組ませる時間を多く確保できるようにしたい。教員の努力を理解し評価してくれる学生もちゃんといふことを忘れずに改善を続けていきたい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 情報倫理[FB・FF・FG]1
授業コード 10C01-015
教員名 後藤 邦夫
教員コード 016428
登録人数 30
回答数 22
回答率 73.3%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

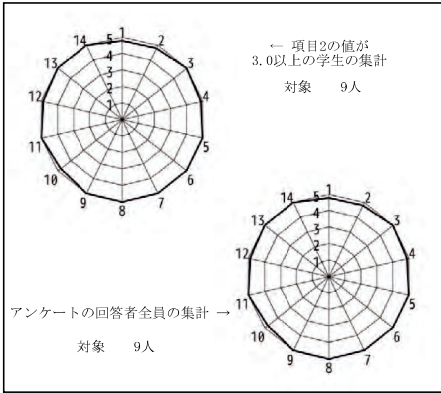
開講当初の目標は、真面目に授業を受けた受講者が良い成績を修めることである。このクラスは受講者の90%がA以上の成績を修め目標を達成できた。他に、共通テキストの内容に加え、約1年前に発効したThe EU General Data Protection Regulation (GDPR) に関する補足などの発展内容も教えられた。

評価の平均値は低い順に設問1(3.41: 事前の興味)、設問14(4.27: 満足度)で、どちらも情報科目の平均値は上回るので問題はない。他の設問の平均値は4.4を超えた。自由記述には、フィードバックが多いなど、肯定的なコメントが6件あった。否定的ではないが、WebClassでの宿題提出期限を忘れるのでプッシュ式の通知があると嬉しいという意見が1件あった。回答率は授業中に十分時間をとったにも関わらず22/30(出席者29名)とQ1のほぼ全員と比較すると低い。

今年度工夫したことは、「細かく誤りを指摘するが、ひどくなければ減点しない」と初回授業で明言したことである。学生にはレポートの文体や参考文献情報の不足などの細かい誤りを指摘されることを嫌う傾向があるが、採点は甘くすると言えば誤りの指摘に気分を害さないようである。次年度も同様に指導する。さらに、余裕がある学生には発展事項も学習できるように工夫する。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 英語IVオーラルコミュニケーション[G
11
授業コード 11A04-032
教員名 YARDLEY, Gabriel
教員コード 016998
登録人数 11
回答数 9
回答率 81.8%
休講回数 1 回
補講回数 1 回

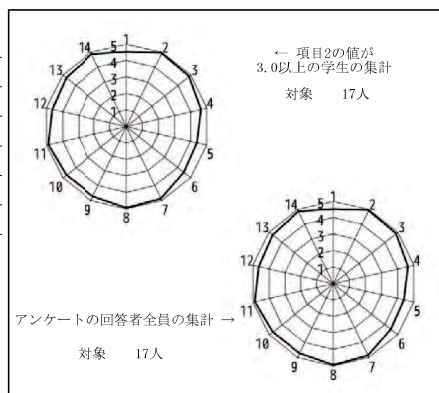


授業評価結果を踏まえた点検・評価

There appeared to be general satisfaction with the course in terms of the syllabus objectives—which were met in full, and in terms of the knowledge acquired and the updated materials and teaching methods used throughout the quarter. Where appropriate, additional activities and materials will be introduced or extended as requested by additional (anonymous) comments and suggestions—more presentations and additional analysis activities based on syllabus content related lectures and documentaries. The instructor will endeavour to provide a satisfactory learning experience for OC AD students in the coming year based on the materials that the class found challenging yet motivating and the suggestions just referred to. Students were lively, good-humoured and informed. They participated actively in all class activities and assignment completion and were a pleasure to work with.

2019年度Q4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 英語IVオーラルコミュニケーション[G]
12
授業コード 11A04-033
教員名 DEACON, Bradley
教員コード 046920
登録人数 19
回答数 17
回答率 89.5%
休講回数 1 回
補講回数 1 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

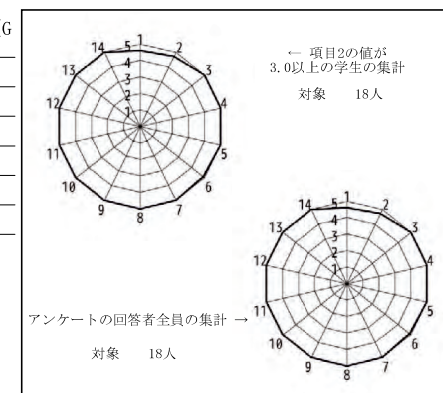
I was pleased to see that the students got a lot out of this course through their feedback. GLS OC is a demanding course in Q4 because students are introduced to the medium of debate. This requires that students actively debate in front of their classmates and others, build logical arguments with strong support from several sources, and make use of their English ability to follow the structure of debate. Students met the challenge and were able to grow and develop their debate skills in particular and English skills in general.

We spent quite a lot of time building a productive classroom community. This kind of community is necessary because students need to develop a greater ability to feel comfortable communicating in front of one another and working together in groups. I was satisfied with the active and open attitude that the students brought to our classes and could see from their feedback that they appreciated the opportunity to communicate in front of one another.

I will continue to stress the importance of bridging what students learn in GLS OC with the outside world including: their future English classes, Arizona State University (ASU) and other study abroad programs, their future job hunting and job contexts, and so on.

2019年度Q4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 英語IVオーラルコミュニケーション[G]
16
授業コード 11A04-037
教員名 MILES, Richard
教員コード 101363
登録人数 18
回答数 18
回答率 100.0%
休講回数 1 回
補講回数 1 回

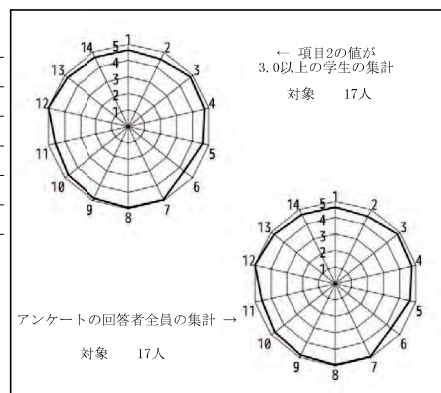


授業評価結果を踏まえた点検・評価

- Overall, I am very satisfied with the evaluations and with how the course went. This was the first time to teach this course, so there was a certain degree of trial and error involved in teaching it. The students were very positive overall in terms of their comments and the scores they gave the course. The course was designed specifically to help students become more independent speakers, so that they can work autonomously when they have to present and debate later in their studies at Nanzan and during their studies abroad next year. Students answered with a perfect score of 5.00 to question #14, indicating they felt they had achieved a lot and had improved their speaking and listening skills.
- The written comments from the students were all positive and reflected particular happiness with the atmosphere in the classroom and the interaction between the teacher and students. Responses to question #4 indicate that the course had been taught at an appropriate level and pace for the students. This was especially pleasing, as there was a wide range, in terms of the students' abilities and English level. The students wrote positively about my use of news articles in class, and how this helped them to better summarize in English and to better focus their listening skills.
- For next year, I intend to continue to concentrate on teaching oral communication skills, but to also try and find a more suitable textbook to use. While none of the students wrote anything about it, I feel the textbook was not very good.

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 英語IVリテラシー[G]3
授業コード 11A08-034
教員名 鹿野 緑
教員コード 101092
登録人数 18
回答数 17
回答率 94.4%
休講回数 0 回
補講回数 0 回

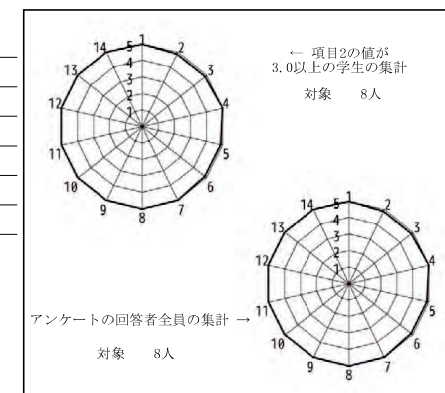


授業評価結果を踏まえた点検・評価

- ① 1年次Q4必修の英語リテラシーの目標は、主に1) アカデミックな英文を読み取る、2) 多読活動としてペーパーバックを読みきる、3) personal narrative、argumentative paperを書くの3点であった。1) は、教科書から発展的に興味を広げる点に難しさがあった。リテラシーの授業をQ1から受けて4回目であるためか、「次の段階のリテラシーへの移行」という意識が薄い学生が一部であった。2) 多読活動は、読了した学生と、読む時間を作れなかった学生とに分かれた。課外活動やアルバイトと授業とのバランスをとる必要がある。3) は、構成を学ぶという点は全員できていたが、それを支えるサブスキルの「文構築力」がそもそも欠けている学生は、やや苦戦したように思う。
- ② アンケートの平均値はからは、ある程度満足のいく数字がでており、大半の学生が目標を達成していた。質問やライティング推敲の機会を設けたが、数名ほど全くフィードバックの機会を使わない人があり、学習習慣を築く導き方が必要であった。
- ③ cumulativeな成績のつけ方をしており、毎週の継続的なworkが求められる点をさらに導く必要があると考える。クラス一体となって授業／学びを作り上げるようなグループ形成にも心がけたい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 フランス語II<G>
授業コード 11B02-013
教員名 中村 督
教員コード 102579
登録人数 22
回答数 8
回答率 36.4%
休講回数 2 回
補講回数 2 回

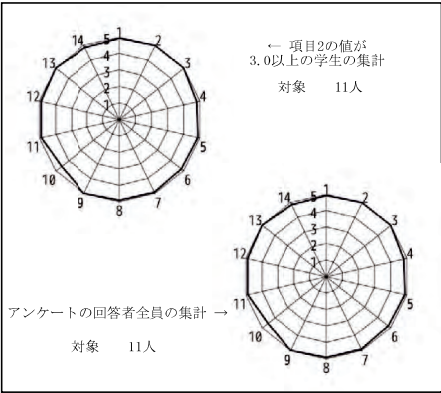


授業評価結果を踏まえた点検・評価

本授業は国際教養学部の2年次生を対象とした選択必須科目である。その目的は、基本文法からさらにもう一段階上の文法事項を学習することであった。くわえて、文法の学習を通じて、フランスの文化や社会についての理解を深めることも狙いとした。また、授業のリズムに緩急をつけるためにも、発音や音読を重視し、学生の積極的な参加を促した。学生の反応は、全体として、非常によく、熱心に取り組んでいたように思う。アンケートの結果も設問1から14の平均が4.96（設問3から14の平均が4.97）という数字であり、概ね学生の満足度が高かったように思われる。しかしながら、フランス語の授業は、人数も少なく、自ずと知的好奇心を刺激しやすい環境にあったことも否めない。とくに「2. 主体的な参加」は改善の余地があり、授業外の課題をもう少し出すことで対処したい。また、「5. 到達目標の理解」についても、より明確に何度かに分けて目標を示すべきである。今後は、履修人数の多い授業でも、同様の満足度を得られるように、工夫を重ねていくように努めたい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 ドイツ語II<G>
授業コード 11C02-010
教員名 大竹 弘二
教員コード 101968
登録人数 26
回答数 11
回答率 42.3%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



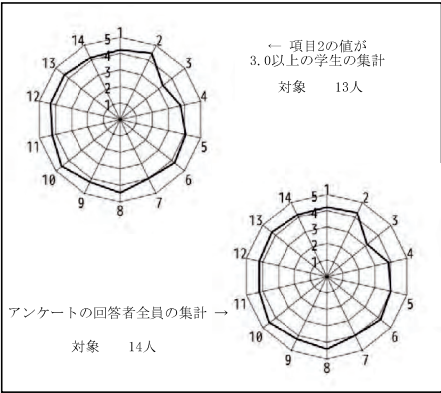
授業評価結果を踏まえた点検・評価

本科目は国際教養学部2年次生を対象とした初級ドイツ語の授業であり、Q3開講の「ドイツ語I<G>」の継続授業である。この科目を担当するのは2年目であり、前年度の経験を踏まえて、いろいろと授業の改善を試みた。国際教養学部は必ずしもドイツのことを専門的に学ぼうという学生ばかりではないので、ドイツ学科の学生に教えたときのようにとにかくドイツ語文法を覚えさせることを優先させるのではなく、なるべく学生たちがドイツ語学習のモチベーションを失わないよう、進度を気にせず丁寧に授業を進めたつもりである。昨年に比して復習の頻度も増やし、授業について行けなくなる学生が出ないように心掛けた。結果として、昨年よりも学生の授業理解度は上がったように感じている。また、授業進度的にも昨年に比べてそれほど遅れたわけではないので、今後も引き続きこのペースで授業を行いたい。

反省点があるとすれば、文法・講読の授業とはいえ、もう少しグループワーク的な方法を取り入れたほうが良かったかもしれないという点である。総じて一方向的な文法の教授が多かったような気がしており、その点で学生たちが本当に満足しているのか不安が残る。今年度は学生たちの積極的な授業参加態度に助けられた側面もあり、来年度以降は、教員側としてももっと学生の主体的な授業参加を喚起するような授業方法を試してみる必要があるだろう。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 スペイン語II<G>
授業コード 11D02-011
教員名 安原 毅
教員コード 017905
登録人数 35
回答数 14
回答率 40.0%
休講回数 1 回
補講回数 0 回



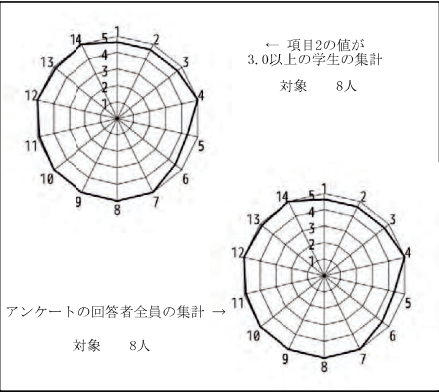
授業評価結果を踏まえた点検・評価

ほぼすべての項目で4.1を上回ったのはまずまずの結果と考え、とりあえず当初の目標は達成できたと考える。今年のクラスに関しては、20分以上遅れてくるものや授業中勝手に出ていく（おそらくトイレ退室か）が毎回数人おり、授業がややたるんだ印象になったかもしれないと反省している。R棟の教室はせきによってはエアコンの風が直接当たるうえ、直射日光が当たる席もあり、不可な思いをする学生いたようだ。

毎回の課題は回答数を増やすことだが、今回も2回の授業でわざわざ時間をとって授業中にスマホから回答するよう呼びかけたが、反応は希少だった。第4クォーターに入って内容が難しくなったため、学生によってはほとんど参加意欲を失ったかたさえ見えるものが数名いたのは残念だった。そんな学生にも授業中はたびたび指名して答えさせたのだが、効果は少なかったようだ。40名近い人数で学生一人一人にきめ細かく対応するというのは困難だが、今後は少しでも多くのものが積極的に授業参加してくれるよう授業方法を考えたい。また授業中にやらせる練習問題の解答をあらかじめ配布してほしいという声もあるのだが、これには対応すべきではないとかがえるのだからいかなものだろうか

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名	インドネシア語II<G>
授業コード	11H02-005
教員名	森山 幹弘
教員コード	100090
登録人数	10
回答数	8
回答率	80.0%
休講回数	1 回
補講回数	1 回

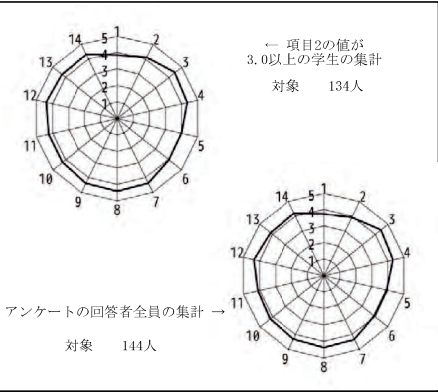


授業評価結果を踏まえた点検・評価

この科目はQ3に続いて今回も授業調査の対象となっていたので、その比較を念頭において授業の振り返りをしたい。設問のほとんどについては高い評価を受けたが、最も低い評価となったのは「この授業の到達目標を理解できましたか」であった。初回の授業でシラパスの内容を確認し、教科書の進め方についても説明をしているが、受講者には到達目標が伝わっていなかったということである。次年度からの授業ではより丁寧に初回にそのクォーターで学ぶインドネシア語の文法項目の概要を説明し、授業の進め方と理解目標を明示していくこととしたい。次に評価が低かったのは、「あなたはこの授業の到達目標に向けて力がついてきていると思いますか」であった。この設問は上記の設問と関係しており、到達目標がはっきりと理解されていなかった結果と考えられる。授業では、特に復習に力を入れるように促し、その際には各回の文法項目の要点を整理したが、一部の受講者は力がついてきていると感じていなかったということであり、今後の授業ではそれぞれの学生の能力に合わせた指導が必要と思われる。一方で、自由記述に「進度が適切かつとても勉強が楽しい授業でした。なおかつ力が圧倒的に付いている気がします。伸び代もある授業であると感じました。」という記述もあり、受講生の間の理解の格差があることがわかる。今後のクォーターでは、少人数のクラスであるので、全員が到達目標を理解し、それを達成したと感じられる授業運営を目指したい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名	環境と倫理問題5
授業コード	13D01-005
教員名	神崎 宣次
教員コード	103280
登録人数	564
回答数	144
回答率	25.5%
休講回数	0 回
補講回数	0 回

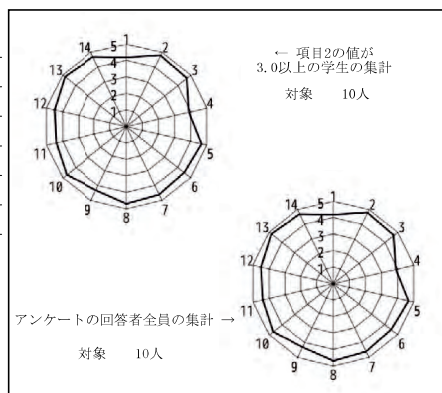


授業評価結果を踏まえた点検・評価

- 1 開講当初に設定していた目標と到達の程度について。
おおよそ目標を達成したといえる。最後の方の回でやや進度が早いという授業アンケートの回答があった点については、来年度以降は初回のイントロダクションの部分をもう少し短縮することによって対処したい。
- 2 数値データおよび自由記述等を踏まえての担当科目に関する総合的な自己点検・評価
数値や自由記述を見るかぎり、授業内容としては十分なものであったと考えられる。ただし、G30という大教室であったため私語や温度管理などの点で、授業中にこちらが気がついていない点があったのは次回以降に対応すべき問題点といえる。
- 3 次クォーター・学期以降に向けての改善点、今後の抱負、方針など
自由記述によると、WebClassを利用してのコメント、要望、質問の毎回の収集は機能していたと思われるので、次回以降も継続したい。
また、もう少し履修者を絞るため、来年度のシラパスの記述は受講者の負担が大きくなるように書き改めた。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 GLS English IV2
授業コード 48A08-002
教員名 松永 隆
教員コード 015081
登録人数 18
回答数 10
回答率 55.6%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

Course goals:

- (1) learn to read English in an academic context in order to obtain information,
- (2) learn to express their views coherently, rationally, and with appropriate discourse,
- (3) learn the basics for organizing and presenting different opinions and perspectives on a range of issues.

目標達成度

Active Learning をしっかりと実施することができ、目標は十分なレベルまで達成できたと思われる。

高く評価できる点

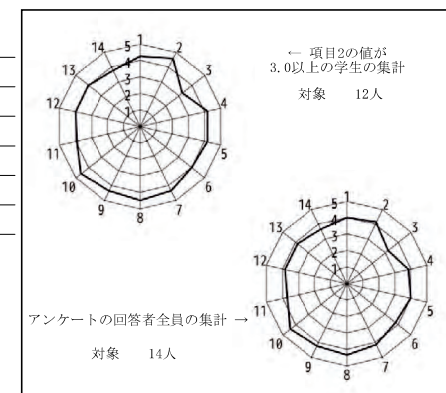
授業全体、授業運営、全体的評価に関してはすべて4ポイント台の前半に平均値があり、
まずまず満足のいく結果になったと思われる。設問1～14の平均値は4.54、設問3～14の平均値は4.54であった。また「プレゼンテーションをする機会が多くあり良かった」、「Ted Talkのビデオが興味深い」などのコメントがあり、今後もこのような手法は継続し、さらに新たな試みも導入していきたい。

改善点

Active learningの活動をもっと多様なものにしていきたい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 GLS English IV5
授業コード 48A08-005
教員名 森泉 哲
教員コード 100542
登録人数 19
回答数 14
回答率 73.7%
休講回数 2 回
補講回数 1 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

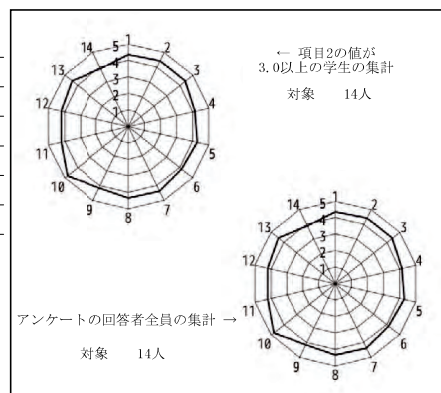
本科目は、英語によるコンテンツ科目であり、Q4では英語で社会問題（特に犯罪）を扱い、英語4技能とともに、国際教養を身につけることを目的としている。なお、本科目は、Q3で授業評価対象科目であったGLS English IIIと同クラスであり、またQ4としては、3年連続同一科目が授業評価対象となっているため、それらを比較しながら、自身の授業を内省したい。

Q3では、良いとは言えない授業評価の結果となり、特に「授業の開始と終了時間」と「全体の授業満足度」が低かったことから、これを改善すべく、Q4では努力した。結果として、Q3よりは改善しているものの、まだまだ改善の余地を残す結果となってしまった。これは授業終了が、グループ発表によって、終了が数分遅れてしまうというケースがQ4でも2~3度あったことである。今後は、グループ発表が授業時間内に終わるように、さらに慎重な計画を立て授業運営を行う。ただ、これまでの2年間と比較すると、学生自身の「履修前の授業の内容に関する興味」がQ3の3.3からは4.0に改善しているものの、過去2年間と比較すると、今年度は低下しているのも気がかりである。これも担当者の雰囲気づくりの要因もあるので、多様な学生がいる中で、個々の学びが最大化するような環境づくりを学生にも語りながら行っていかなければならない。

今回良かった点としては、学生から「教員が努力している様子がわかった」「定期的な単語テストと2回のディベートで英語能力が伸びた」など肯定的なコメントがあったことはありがたかったが、一方改善点として、「学生の学習意欲を引き出す適切な指導」「全体としての授業満足度」の点数が相対的に低いので、今後はより丁寧な指導、環境づくり、授業準備など、学生からの授業感想を定期的に確認するなどを通して、改善を行いたい。また、途中2回休講し、1回の補講と第16回目で授業を行ったのだが、16回目は補講届の提出不要と勘違いをしており、終了後学生からもポルタに掲示してほしいというコメントがあったので、これについても、次回気を付けなければならない。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 GLS English IV7
授業コード 48A08-007
教員名 平岩 恵里子
教員コード 100953
登録人数 18
回答数 14
回答率 77.8%
休講回数 0 回
補講回数 0 回

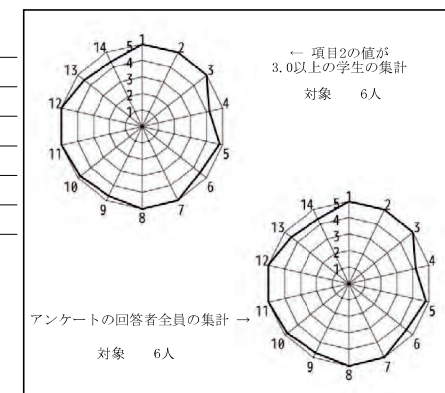


授業評価結果を踏まえた点検・評価

- ① グローバルな社会問題に関心を持ち、その背後にある社会や人々のあり方について学ぼうとする時の学問的な態度を養うことを目的とした。具体的には、テキストのトピックに添い、「米国における銃規制」と「死刑制度」を取り上げ、資料や論文を読み、議論し、考えをまとめてプレゼンすることを行った。銃規制についてはニューヨークタイムズの論説、死刑制度については米国の死刑制度に関する歴史的な事実を扱った論文を輪読。その過程で、日本との違いについても考察をした。長く専門用語の多い論説や論文を読むことについて、当初、学生は戸惑っていたようだが、少しずつ慣れてくれたと考えている。また、日本と違う社会の在り方についても、考察を深めてくれたのではないかな。
- ② 数値データについては、設問2と10を除いて平均値を下回ってしまったことは残念だった。共通のテキストをあまり利用しなかった点やプレゼン準備期間の短さに不満を持つ学生もいたように感じるし、内容についても、もう少し「目的」をはっきり提示すべきだったかもしれない。特に最終設問14が3.86という低い数字にとどまったことは、力不足を物語っている。学生は「やらされている」と感じていたかもしれない。自由記述については前向きなコメントがあり、目的の一部は達成できたようにも思う。
- ③ 改善点は、どのようにしたら学生が最終的に満足する講義にできるか、である。事前に毎回の講義予定（プレゼン予定や資料の提示）をはっきりさせて、学生自身が何をすべきか理解する工夫をすること、グローバルな社会問題に関する関心を高めるような語りかけをする、であろうか。また、模索すべきこととして、何かを知るためには大学生として学問的な態度が必要であることを学生自身が感じられるような運営をすること（トピックの選択等）、「これが出来るようになった」と学生が自信を持てるような仕掛け（プレゼンも含めて）を工夫すること（これが最も悩む点であるが）、であろうか。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 GLSアカデミック・ジャパニーズII
授業コード 48A13-001
教員名 北村 雅則
教員コード 100212
登録人数 6
回答数 6
回答率 100.0%
休講回数 0 回
補講回数 0 回

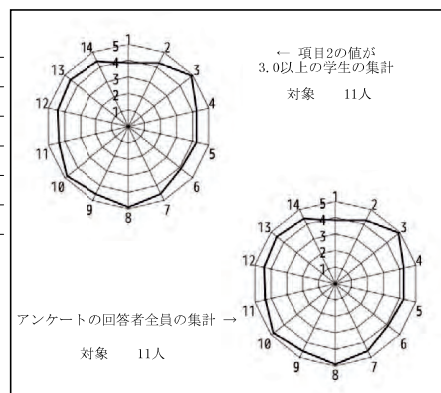


授業評価結果を踏まえた点検・評価

この授業の評価全体を見渡すと、非常に好意的な評価を受けた。少人数クラスであることも要因として大きいですが、それ以上に履修者のみなさんの努力があったからだ考える。それは設問2の回答として、全員が「5」と回答していることから分かる。この授業では到達目標として、(1)日本語で、適切な語彙・表現を用いたプレゼンテーションができる、(2)日本語による、論理性や客観性の高いレポートを作成できる、の2つを定めている。それに対して、設問5では4.83、設問6では4.50と設問2の各自の努力に比べると評価が下がっている。これは到達目標(1)のプレゼンテーションよりも(2)のレポートの作成の方に重点を置いた授業であったため、プレゼンテーションに関して到達できたかどうか分かりにくかったこと、レポートは、留学生にとって難しく、高い目標設定であったという2点が理由として考えられる。この授業の想定履修者である、日本語能力試験N3からN2レベルを考えると、履修者のみなさんは高い到達地点に達している。もちろんそれぞれの日本語能力に差はあり、得意とする四技能も異なるが、次年度では、履修者のニーズとこちらから提供したい内容をすりあわせながら、少人数クラスの利点を活かし、柔軟に内容を組み立てていきたい。

2019年度Q4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 Special Topics: Global Studies C (Religious and Social Studies)
授業コード 48E08-001
教員名 VOLPE, Angelina
教員コード 000167
登録人数 25
回答数 11
回答率 44.0%
休講回数 1 回
補講回数 1 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

This class has been very interesting to me as well. Being the first time, it has been a class, we could say, experimental. I think the students who chose this class were courageous, because the topic of religion and society is difficult and unusual for them to think in their daily life.

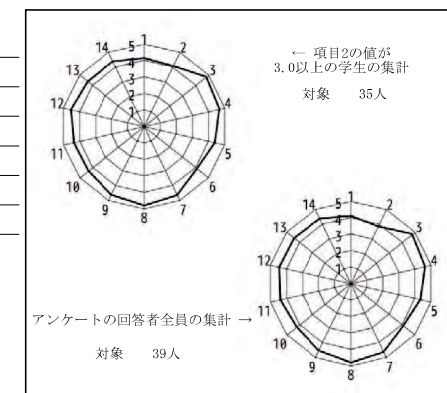
I believe that the aim of the course has been achieved as follows.

1. The students have understood that Christianity is for every culture and people.
For them it has been a true discovery to know that the gospel of Jesus has no border because its fundamental message is universal love, forgiveness and mercy.
2. They have thought about the reasons why so many prejudices against religions, especially Christianity have existed in general. The most important thing is that the students have discovered that "ignorance is the mother of every prejudice". Therefore, I think the students could reach the fact that they must improve their knowledge through further extensive reading and dialogue with other people belonging to other cultures and religions.
3. The Christian teacher and the students with no Christian faith have perfectly worked together.

However, the point I must improve is to encourage the students to talk in English more. Many of them are very good in reading but are still timid in speaking.

2019年度Q4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 異文化の理解6
授業コード 13C01-006
教員名 丹羽 牧代
教員コード 055715
登録人数 62
回答数 39
回答率 62.9%
休講回数 0 回
補講回数 0 回

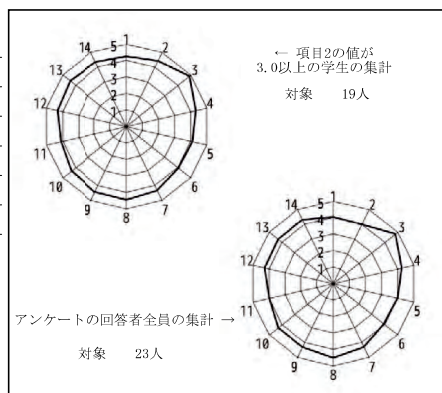


授業評価結果を踏まえた点検・評価

(1) 到達目標はi. 言語による世界観の相違とそのことによる文化の理解（誤解）ii. 特に英語文化と日本語文化の相違を理解する iii. 言語文化の違いを現実社会の中での理解と共生にどう結び付けるか考察することができる の3点とした。授業の中でwebクラスを活用したアンケートや応答のセッションを設けてそれをもとにまた授業の微修正を行うというスタイルであったが、各回の応答や最終レポートから観察されたのは、i とiiの「差異の理解」はかなりの程度達成できていたと思われる。ただし、言語の構文とそれが及ぼす認識の相違などの、抽象度が比較的高い例をとりあげた部分では、すぐに理解できる学生となかなか整理できない学生の差が開いた用いる例に応じた説明の多寡等、やり方を再考する必要があると考えている。iii については、授業内で語ったことや示唆したことに準じて考察できた受講者は多いが、共通教育の目標にひとつがさまざまな視点を持ちつつ自ら考察ができるようになることであろうことに鑑みると、「考えさせる」ことについてはやや仕掛けに工夫が足りなかったと感じる。各回ごとに学生の興味をひきつつ考えさせる組み立ては、広範な学科からの受講を考えると容易ではないが、何かしらの改善を考えたい。また、講義であることは前提ではあるが、もう少し受講者が相互に応答を知ることができるような仕組みはできないかと考慮中である。

2019年度Q4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 英語I翻訳＜全＞3
授業コード 14A05-003
教員名 中田 晶子
教員コード 055624
登録人数 25
回答数 23
回答率 92.0%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

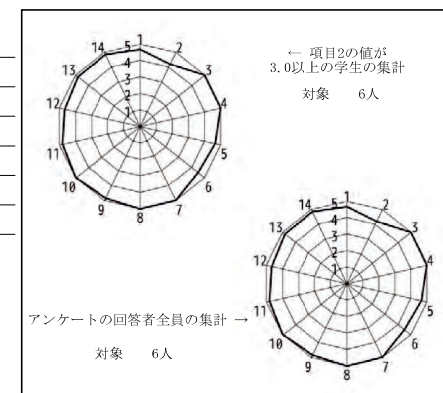
①開講当初に設定していた4つの目標の到達度は、個人差が大きいですが、三分の二以上の学生が到達できたと考える。翻訳のスキルを学ぶことに加えて、翻訳の歴史や翻訳研究の成果、現在の翻訳の多彩な状況等を学び、複数の翻訳における異同や翻訳者の意図を分析し、「翻訳とは何か」を考察できるようになる、という目標であったが、一クォーターの授業で到達するには高すぎる目標と感じた学生が多かったかもしれない。「到達目標の達成」は3.91で唯一4点台に達しない項目となった。

②初めて担当した科目であったが、項目1から14の平均が4.24、3から14の平均が4.28、設問13（知識・理解の深まり）と14（全体としての満足度）が共に4.30となり、数値的には大きな問題はない結果となった。自由記述では、講義のわかりやすさと共に翻訳に対する新しい視野を得られたことが評価されていた。期待とは全く異なる授業であったとの不満が1件あった。推測であるが、スキル訓練に徹した授業を期待していた学生ではないかと思う。第1回目の授業で授業のテーマや進め方について詳しく説明し、英語力をはかる小試験と共に、これまでの英語学習の傾向・この授業でとりあげてほしいことを問うアンケートを実施し、その結果を授業内容や進度に反映させている。第2回目から履修した学生にも短縮版のイントロダクションを行い、小テスト・アンケートを実施したが、第3回目以降に加わった学生は、小テスト・アンケートのみで説明を聞く機会がないまま授業に加わることになり、不満を抱いたかもしれない。

③次回はスキル訓練の割合を多くする予定であるが、クォーター開始後からの履修者が授業の内容・傾向を十分理解した上で受講できるよう心掛ける。ループ学習の機会が多い授業であったが、予想以上に、積極的にリード役を務めてくれる学生が多く、発言も多い授業となった。今回の受講生の傾向に過ぎないかもしれないが、次回も続くことを願っている。

2019年度Q4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 典礼学(感謝の祭儀)
授業コード 21C47-001
教員名 市瀬 英昭
教員コード 055525
登録人数 12
回答数 6
回答率 50.0%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

①開講当初に設定していた目標と達成についてはほぼ予定通りとなった。②設問項目3から14までの平均は、4.85であり、うち5項目については5の評価を受けている。その理由としては、まず初回の講義で、この講義の目的と意味、毎回の講義の内容について説明し、その後、毎回講義録を配布しつつ丁寧な説明を行ったことが考えられる。受講生の理解の程度を確かめながら、必要と思われる種々の資料を随時配布し、重要と思われる点に関しては繰り返し説明を行ったことも評価の要因となっていると思われる。常日頃から、大学の講義科目としての典礼学のレベルを落とすことなく、人間として生きていくこととの関連の中で講義を行うよう心掛けているが、今回の自由記述欄の記述の一つに「典礼という信仰の行為が人間に＜生きること＞を与えるものであることが、時間をかけて理解できた。他の人にも聴かせてあげたいと思うくらいでした」というものがあり、担当者の意向は伝わっていると実感できた。③今回のQ4で大学における講義を終了することになっており、次回へ向けての抱負を述べることはしないが、今後は大学外で一般の方々への向けて典礼の豊かさを発信し、彼らと共に学びを続けたいと考えている。南山大学においてこれまで典礼学の講義の機会を与えられたことに感謝しつつ以上を報告とする。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名	ミドル演習C＜2018年度入学者＞
授業コード	44B03-030
教員名	永江 亘
教員コード	103861
登録人数	14
回答数	
回答率	
休講回数	0 回
補講回数	0 回

レーダーチャートなし
(授業評価アンケート不実施のため)

授業評価結果を踏まえた点検・評価

①開講当初に設定した目標課題・到達度については達成ができた。もっとも、文献引用の適切さなどの品質的な部分については改善の余地もある。

②ベーシック演習では多岐にわたる内容を扱うため、その分分析の手法や課題の設定の仕方という基礎的な部分について主眼をおいて話をしてきた。この点、開始当初に比べるとずいぶんブラッシュアップがされているように評価できる。もっとも、演習にはつきものの悩みではあるが、チーム内での寄与度のばらつきなどにより、演習での成果にばらつきが生じる問題には改善の余地があるように思われる。

③次回ベーシック演習を担当する場合には、当期の反省を生かして、文献引用などの基礎部分についてより意識を高めていきたいと考えている。②で指摘した演習成果のばらつきの問題への対処は。今後の課題として対応を検討したい。チーム制ではなく個人で報告を行う機会を設けることにより一定程度の成果が期待できるものと思われるが、限られた演習時間の中で、どの程度これが実現可能であるかなど詳細に検討したい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名	ミドル演習C＜2018年度入学者＞
授業コード	44B03-044
教員名	都筑 満雄
教員コード	101565
登録人数	25
回答数	
回答率	
休講回数	0 回
補講回数	0 回

レーダーチャートなし
(授業評価アンケート不実施のため)

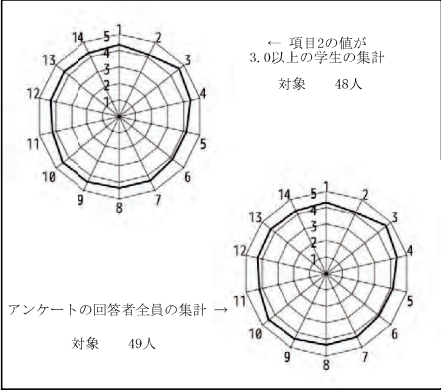
授業評価結果を踏まえた点検・評価

開講時に設定した目標は、①民法財産法をよりよく理解できるようになること、②よく調査しよい報告ができるようになること、③論理的な議論をすることができるようになること、であった。このうち①についてはある程度、②については相当程度達成することができたと思われる。春学期の報告と秋学期の報告を比較すると、全体として相当程度質が向上している。これに対し③についてはあまり達成できなかったように思われる。発言回数および内容に変化のない者が相当数おり、あまり活発でない回もままあった。今後は、学生に予習を徹底させることや議論へ誘導できるよう工夫をすることで、改善を図っていきたい。

また、本年度は関西大学法学部馬場圭太教授のゼミと東洋大学法学部芦野訓和教授のゼミとの合同ゼミを行った。学生には合同ゼミへの準備の過程や本番での報告その後の懇親会等においてよい経験になったものと思われる。学生にはとても好評であったため、今後もこのイベントを継続していきたいと思う。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名	刑事訴訟法B
授業コード	44B10-001
教員名	榎本 雅記
教員コード	103094
登録人数	299
回答数	49
回答率	16.4%
休講回数	0 回
補講回数	0 回

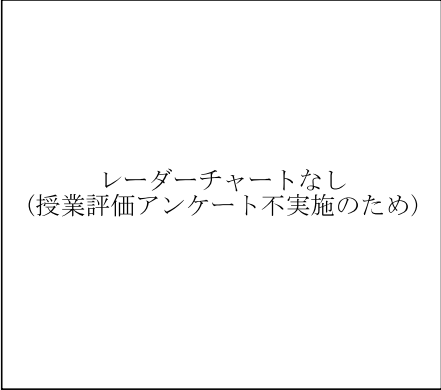


授業評価結果を踏まえた点検・評価

①シラバスで設定していた内容をほぼ達成することができた。②法律学科の平均値をほぼすべての項目で上回ることができたことはよかったが、唯一項目7（教員の授業の誠実さ・真剣さ）が平均値を下回った点には注意を要する。自由記述中に、ホワイトボードの字が見にくかったとの指摘が複数みられたのも反省点である。時事問題への興味喚起のための話をするのが数回あったが、その時間がやや長すぎたときがあったようなので、その点も注意したい。③ホワイトボードの字を見やすくすること、時事問題への言及する時間に注意すること等、すぐに改善できる点は次回に改善したい。アンケートの項目7の評価については、教員は誠実に授業を行っているつもりであるが、興味・集中力喚起のために、ネタ的話を折々織り込んでいるために、このような評価になるのかもしれない。興味深く聞いてもらうために、やや面白おかしく話をするのと、誠実さ・真剣さとはある意味トレードオフの関係にあるともいえるので、単に評価を上げようとするのがよいのかどうかは、さらに検討を要する。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名	アドバンスト演習C＜2017年度入学者＞
授業コード	44C03-039
教員名	今泉 邦子
教員コード	019505
登録人数	15
回答数	
回答率	
休講回数	0 回
補講回数	0 回

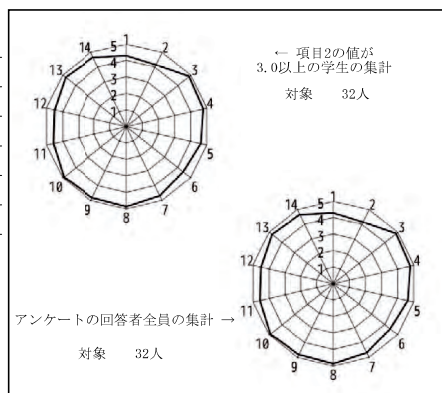


授業評価結果を踏まえた点検・評価

①②(1)本アドバンスト演習で予定していた法学検定問題の解説と検討、(2)重要判例の検討と報告、(3)論述問題の解説、検討およびレポート提出のすべてに関して、予定通りに実施し、かつ受講者は(1)から(3)の目標に熱心に取り組んだ。特に判例報告とレポートは、1Qおよび2Qの商法のアドバンスト演習の時のものと比べて改善され、個人の学力が増進したことのほか、他のゼミ生とのチームワークの取り方もよくなったと思います。3年生の11月から1月秋学期に開講した科目であるため、就職活動と同時並行して受講者は取り組まなければならなかったが、大学の規則に即した演習の成績評価方法を明示したところ、そのルール範囲内で就職活動と両立をはかり、欠席過多になる受講者もいなかった。
③ゼミは、毎年受講者の顔ぶれによって、大きく雰囲気が変わるので、来年度は、その受講者達にやる気をもって取り組んでもらえるような授業運営を行いたい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 性と生命における人間の尊厳10
授業コード 10D06-010
教員名 大塚 弥生
教員コード 000065
登録人数 41
回答数 32
回答率 78.0%
休講回数 1 回
補講回数 1 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

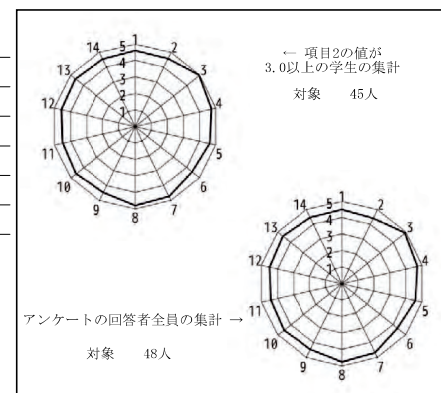
設問1（履修前の授業に対する興味）の平均値が4.28であったのに対し、設問13（授業を通しての新しい知識や理解の深まり）の平均値が4.78であったことから、本授業の目標は達成されたものと考え。また、設問14（授業全体への満足度）が4.66であったことから、受講生が授業内容に関心を持って取り組むことができたものと考え。

本授業では、毎回、授業の最後に自分の考えを言語化し、ジャーナルとして残すことを行っている。さらに、それらのジャーナルの内容をまとめたものを、次の授業で配布し、他の受講生の考えを知ることができるようにしている。この取り組みについて、自由記述において、「自分で考える時間が多かったことがとても良かった」や「毎回感想を書くので、自分たちで問題について考えるいい機会となった」、「話が苦手かもしれない人への配慮ができていた」とあり、学習促進に効果的であったといえよう。この取り組みは、次回からも続けていきたいと考える。

しかし一方で、設問6（授業の到達目標に向けて力がついてきていると思うか）の平均値は4.44であり、「正解」のない問いを続けていくことは、受講生にとって「これで良いのか？」という不安を残すものでもあるといえるだろう。今後の課題としては、受講生に対する肯定的なフィードバックを意識していきたいと考える。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 教職入門2
授業コード 15A02-002
教員名 宇田 光
教員コード 100494
登録人数 58
回答数 48
回答率 82.8%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



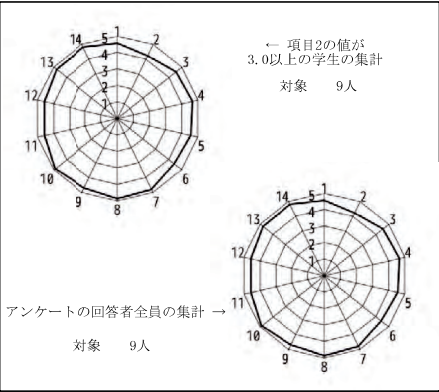
授業評価結果を踏まえた点検・評価

教職課程の必修科目である。主に1年生を対象としており、履修登録者数は59名、回答者数は48名。BRD（当日ブリーフレポート方式）を多用した講義をし、後半では小グループでのプロジェクトを入れている。項目3から14の平均値は4.58、満足度を示す設問14の平均値は4.44となっていて、レーダーチャートでも大きな落ち込み部分はない。全体としては、まずまず満足であるという回答を得た。

個別の自由記述では（a）良かった点として「時間厳守」「レポートに毎回修正やアドバイスを先生からもらえること」「ブリーフレポートのおかげで文章構成力がついた」「グループで学びを深めることができた」「教授の授業に対する熱意が感じられたこと。説明にも毎回具体例が混ざられており、分かり易かった」などの意見があった。一方、（b）改善すべき点については、「もう少し教科書を使って詳しく説明してほしいです」「この授業を受けているのはこれから一緒に教職をとる仲間たちなのでもう少しクラス内の人達と関われる授業展開ならより楽しくなりそうだなと思いました！」「授業前のブリーフレポートのお題が難しすぎて、なにも書くことが出来なかった。もっと書きやすいお題にするか、ある程度説明が終わってからレポートの時間を設けて欲しいです」など。参考にして今後、改善していきたい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名	教職実践演習(中・高)3
授業コード	15A16-003
教員名	笹尾 幸夫
教員コード	103858
登録人数	29
回答数	9
回答率	31.0%
休講回数	0 回
補講回数	0 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

教職課程の最後に受講する授業であるため、昨今の教育課題や身近な問題を取り上げ、演習形式で実施した。この結果、新しい知識を得たり理解が深まったか(質問13)や全体として授業に満足したか(質問14)では共に4.78であり、良かった点として「様々な場合の対応を疑似体験することができた」という学生の意見があった。この授業は同時期に4講座で実施しているが、受講生が4年であるため、他の講座に合わせ、フィールド・ワークでの代替授業を当初の「13回と14回」から「14回と15回」に変更した。「学生の立場に寄り添った授業日程であった」という良い評価を得たが、授業評価の期間が13回の授業の後であったため、授業中に評価する時間を確保することが出来ず、評価した学生がわずか9名と少なかった。

次回はフィールド・ワークの代替授業を今年度のシラバスから変更するとともに、フィールド・ワークの内容を愛知県総合教育センターの研修講座の参観と定め、内容の充実を図る予定である。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名	教職実践演習(中・高)5
授業コード	15A16-005
教員名	五島 敦子
教員コード	101282
登録人数	9
回答数	3
回答率	33.3%
休講回数	1 回
補講回数	1 回

レーダーチャートなし
(回答数4件以下のため集計しない)

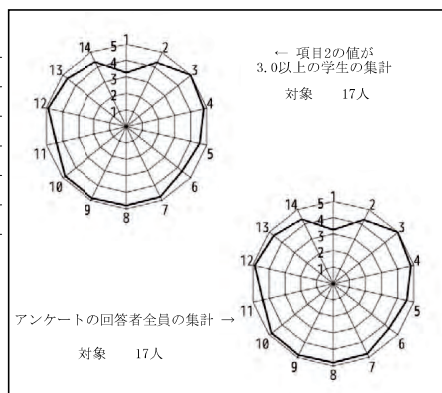
授業評価結果を踏まえた点検・評価

1. 授業目標の達成度・点検・評価
本科目は、教職課程4年間の学修履歴を総合的に診断し、教員としての資質の確認を目標とする。卒業年次の学生全員を5クラスに分けて実施するが、15回の講義のうち、学外講師による合同講義が5回、フィールドワークが2回を占める実践的な科目である。クラス単位で実施する講義では、教育実習等の振り返り、フィールドワークによる研究報告、学外講師による合同講義のまとめなど、受講生はすべての課題に真摯に取り組み、十分に授業目標を達成することができた。受講者が9名と少なかったため、一人ずつにきめ細かな指導ができた。自由記述でも「発表のフィードバックが丁寧でした」というコメントがみられた。

2. 今後の改善点・抱負・方針
課題は、アンケートの回答率が低く、数値による点検・評価ができなかったことである。レーダーチャート作成に足るだけの回答数がなかった理由は、履修者が少なかったうえに、アンケート回答期間がフィールドワーク期間と重複したため、授業時間中に回答の時間をとれなかったことによる。セメスター科目であるうえ、合同講義が多いため、回答を促す機会も十分ではなかった。ウェブクラスのメッセージ機能を利用して学生に回答を促したが、読んでいない学生も多かった。今後は学生との連絡についてルールを定め、授業外での連絡が行き届くように工夫したい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 情報倫理[FS・FA]1
 授業コード 10C01-023
 教員名 栗原 寛明
 教員コード 103522
 登録人数 26
 回答数 17
 回答率 65.4%
 休講回数 0 回
 補講回数 0 回



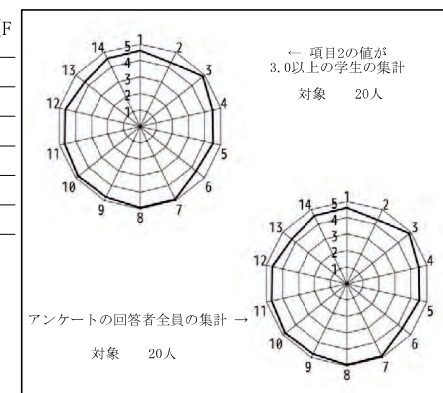
授業評価結果を踏まえた点検・評価

本科目の到達目標は、情報ネットワークの拡大に対応した社会的ルールを知っている、情報ネットワークにおけるプライバシーの重要性を理解している、様々なコンテンツは知的財産権によって保護されることを理解している、の3点であった。最終レポートを含むすべての課題を提出し、積極的に授業に取り組んだ受講生については、到達目標をおおよそ達成しているとみなしてよい。特に、インターネットを用いた活動とプライバシーや著作権との関わりに対して理解を深められたと思われる。

授業はe-learningと対面授業の組み合わせであり、e-learningで学習した内容に関して対面授業でグループディスカッションや発表を行うことで理解を深めるようになっている。e-learningの教材と課題の分量は適切であり、しっかり取り組んだ受講生は理解を深められたと思われる。ただし、e-learning教材の大半にアクセスした記録がなく取り組み状況が芳しくない受講生が少なからず見受けられることは非常に残念である。教材は対面授業に参加する上での基礎となるものであるため、必ず取り組んでほしい。対面授業については、授業の中心となるグループ活動に十分な時間を確保するように努めたため、いずれのグループも十分にディスカッションや発表の準備を行うことができたと思われる。情報通信技術の進化や社会の変化などにより我々を取り巻く状況は刻々と変化するため、教材には含まれない最新の話題や出来事を継続的に取り上げていく必要がある。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 英語IVオーラルコミュニケーション[F
B]2
 授業コード 11A04-002
 教員名 OTTOSON, Kevin
 教員コード 103121
 登録人数 24
 回答数 20
 回答率 83.3%
 休講回数 0 回
 補講回数 0 回

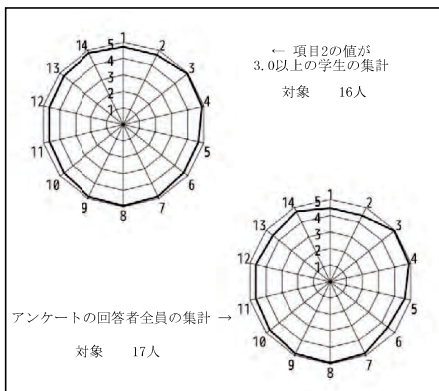


授業評価結果を踏まえた点検・評価

- 1) The class as a whole were able to achieve the goals for this class. Specifically, they were able to talk about a variety of topics for at least seven minutes in English. They were also able to demonstrate knowledge of vocabulary through quizzes and use in a variety of class tasks. However, when it came to discussions and debates for the class, I believe they fell a bit short.
- 2) Overall the scores were high, but the lowest one (4.30) was in regards to whether they felt they developed skills and abilities in English from this class. Based on a final survey from this class, many of the students felt that I should have pushed them more in this class. Had I pushed them more, then perhaps they would have felt that they accomplished or developed more from this class.
- 3) Going forward, I will incorporate more frequent assessments of abilities. I would like to have a speaking diagnostic with the students within the first two weeks of class so that I can better assess their needs. Furthermore, I will incorporate some simple reflection activities in their journal work so that they can assess their progress each class.

2019年度Q4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 英語IVオーラルコミュニケーション[F
B]3
授業コード 11A04-003
教員名 TAYLOR, Jamie
教員コード 104100
登録人数 23
回答数 17
回答率 73.9%
休講回数 0 回
補講回数 0 回

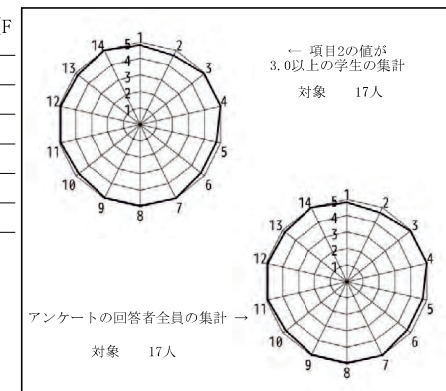


授業評価結果を踏まえた点検・評価

- (1) In this class, we aimed to improve general conversation skills as well as listening and presentation skills. We had many chances to practice these things throughout the year and in Q4.
- (2) In general, most of the goals for this class were met fairly well. Students' listening and presentation skills especially improved. Students were able to maintain conversations for a good amount of time, and they were able to use the skills we practiced throughout the year in their final conversations.
- (3) Next year, I hope to find more time throughout the year to review conversation skills learned in Quarters 1 and 2. I also hope to work more in negotiating meaning or working through misunderstandings in conversation with next year's class. I will also focus more on intonation with next year's group.

2019年度Q4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 英語IVオーラルコミュニケーション[F
B]5
授業コード 11A04-005
教員名 LOTT, Danielle
教員コード 103593
登録人数 22
回答数 17
回答率 77.3%
休講回数 1 回
補講回数 0 回

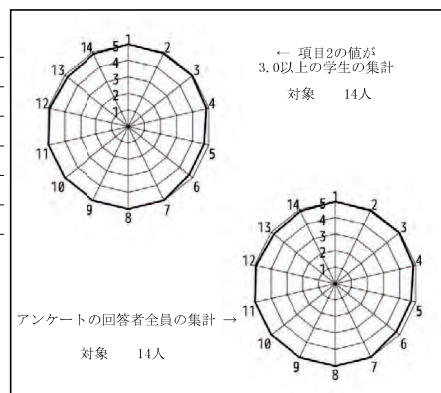


授業評価結果を踏まえた点検・評価

- 1) My goals were to develop students' communicative competency through recursive practice, the teaching of conversation strategies, and self-assessment. In the previous year students had expressed that they felt some difficulty in preparing for and completing three speaking tests. This quarter I only conducted one speaking test and allotted more time for review. I also incorporated a research element into their final project to encourage them to expand on the content learned. Students were able to use conversation strategies in the speaking test. They were also able to discuss the content they had covered with some depth. In addition, according to their final reports, the students felt more competent.
- 2) Based on the numerical data and comments, I feel that from the students' point of view the course was a success.
- 3) In their final reports, some students requested more work on pronunciation. This year I had spent more time with pronunciation, but students still felt that they needed more work in this area. Next year I'm considering pronunciation apps, teaching of the phonetic alphabet, or some kind of summer homework for them to work on their pronunciation.

2019年度Q4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 英語IVオーラルコミュニケーション[F
B]7
授業コード 11A04-007
教員名 FILER, Benjamin
教員コード 103850
登録人数 25
回答数 14
回答率 56.0%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

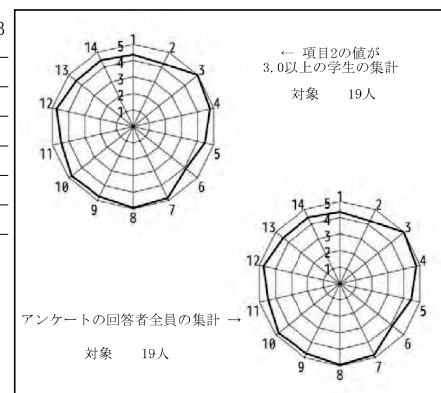
During Q4 for this particular class, there goals were slightly different from the previous three quarters. The main difference was a move towards performance as a focus of class activities. This involved role-plays, improvisation and short performances. The students seemed to enjoy these activities and it gave them a chance to express themselves in English in different ways than they were used to. Students performed in groups in front of other students twice during this quarter and the oral feedback from these activities was very positive.

The quantitative data from the student feedback is extremely encouraging as it seems to indicate a sense of satisfaction with the course. I am delighted to see this, but will certainly maintain my efforts in making these classes useful and effective for the students' oral communication development.

I will not change too much for this course in the upcoming academic year. However, there are one or two minor changes that I will make in order to improve and update the content. Firstly, I will update the readings in the course book as they are becoming slightly out of date. Another change I will make is to ensure that reserve a suitable classroom for the students' final performances.

2019年度Q4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 英語IVオーラルコミュニケーション[B
]5
授業コード 11A04-012
教員名 都築 千絵
教員コード 103924
登録人数 22
回答数 19
回答率 86.4%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

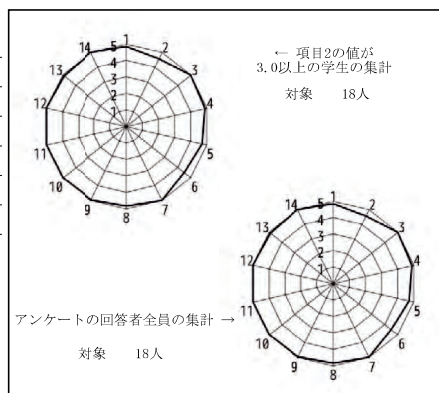
この授業は、口頭での英語コミュニケーション能力の向上を目指す通年のクラスであった。第4クォーターでは、積み上げてきた会話スキルを駆使し、ディスカッションとプレゼンテーションを主に行った。シラバスに記述されている19の到達目標は達成された。

学生の授業評価の結果では、到達目標に関する数値が他に比べて低く、到達目標への意識付けをさらに強化していくべきだとわかった。各クォーターでシラバスを扱う最初だけではなく、授業全体として、どの到達目標のために今何をしているかを具体的にはっきりと示すようにしたい。また、改善点として記されていた、プレゼンテーションの準備時間と原稿を読むという選択肢については、来年度は学生の力に応じて対応していきたいと思う。最後に良かった点は10点記述があったが、「先生と生徒の距離が近いところ」が挙げられ、コミュニケーションを教える授業としては嬉しく感じる。また毎回グループメンバーを変えた指定席を用意したが、「指定席だったので色々な人とコミュニケーションがとれた」と評価されたので、続けていこうと思う。

今回の授業評価の結果を踏まえ、今後も学生同士が話す時間を最大限に取りながら、学生がもつ英語でコミュニケーションを取りたいという気持ちを大事に育てながら、授業の到達目標をさらにはっきりと示しながら授業運営をしていきたいと思う。

2019年度Q4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 英語IVオーラルコミュニケーション[P]
11
授業コード 11A04-020
教員名 HOWREY, John
教員コード 100371
登録人数 18
回答数 18
回答率 100.0%
休講回数 1 回
補講回数 1 回



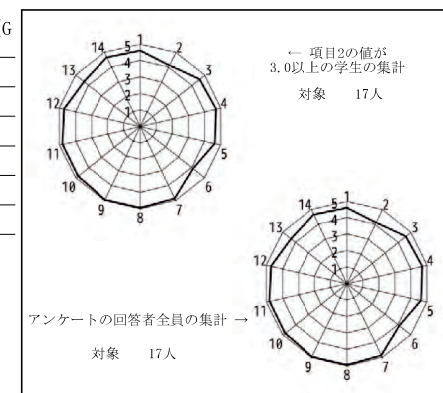
授業評価結果を踏まえた点検・評価

This course is designed to give students more fluency and confidence speaking in English over a variety of topics. To develop their English fluency, students did vocabulary building, question and answer patterns in pairs, extended conversations and discussions and several presentations. Students also participated in COIL by watching and commenting on video presentations by their peers in Taiwan and receiving comments in turn on their own work.

I am pleased with the way the class responded to the activities in class and their scores on the evaluation. All the scores were quite high so there is not much I can comment on. Most students enjoyed the COIL project and learned a lot from the presentations the Taiwanese students did. A few did not like it however (3/18 or 15%) and stated they preferred face-to-face communication. In the future I will try to add other types of activities for the COIL program so that students can discuss shared topics more.

2019年度Q4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 英語IVオーラルコミュニケーション[G]
13
授業コード 11A04-034
教員名 GOTOH, Mie
教員コード 100186
登録人数 18
回答数 17
回答率 94.4%
休講回数 1 回
補講回数 1 回

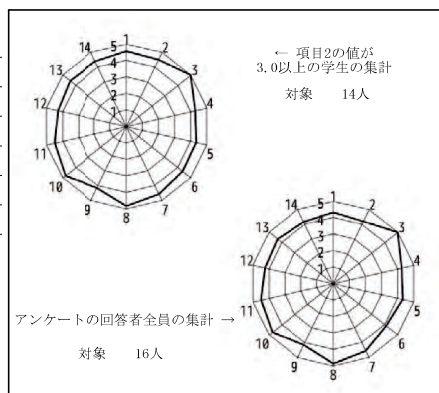


授業評価結果を踏まえた点検・評価

第4クウォーターでは、スピーチや、プレゼンテーション、ディスカッションに加えてディベートを行い、それぞれのシチュエーションで適切な表現を使い英語で表現できるようになることを目標にしました。毎回ペアを代えて行うペアワークやグループワークを多く取り入れ、たくさんの生徒とコミュニケーションを英語で取る練習を重ねました。取り扱うトピックの難易度があがる中、多くの生徒の成長がスピーキング力で見られました。生徒のコメントには、「リスニング力とリーディング力をより高められたと思います。ディベートのやり方を理解することができました。」「今まで、知らなかった英語の言い回しや表現を学ぶことができて楽しかったです。」「課題を毎回明確にしてくれたこと。」などの内容が多く、授業目標はほぼクリアできたかと思います。ただ英語力がついてきていると自覚できなかった生徒もいたようなので、今後の課題として、毎回の授業での到達目標をより明確にし、生徒にも着実に力がついていることを実感してもらえるように工夫したいと思います。

2019年度Q4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 英語IVオーラルコミュニケーション[G
18
授業コード 11A04-039
教員名 KUMAI William N.
教員コード 000204
登録人数 20
回答数 16
回答率 80.0%
休講回数 0 回
補講回数 0 回

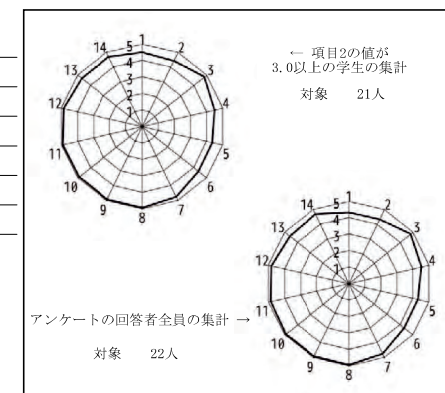


授業評価結果を踏まえた点検・評価

This course proposed to maximize the time students had for speaking, and indeed this is reflected in the comments. Although students regarded activities as "games," they were in fact carefully designed language practice activities based on the principles of complexity science. Some who did not feel like speaking actually found themselves in what is known as a fitness valley; the reason for not speaking is unclear and therefore unaddressable. There were also complaints about the textbook, although students were expected to practice "active learning" in which self-study plays a large part. This point can be emphasized in the next iteration of the class. In the next quarter, an experiment in textbook-less learning will be conducted, especially since Q1 and Q2 students are expected to be high-level returnees. Instead of a textbook, students will engage in even more intensive active learning by creating the textbook themselves from videos found on YouTube. This will also function as listening practice, the skill they most need when studying abroad in Arizona.

2019年度Q4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 英語IVリテラシー[FB]2
授業コード 11A08-002
教員名 ELLIOTT, Darren
教員コード 101579
登録人数 24
回答数 22
回答率 91.7%
休講回数 4 回
補講回数 3 回

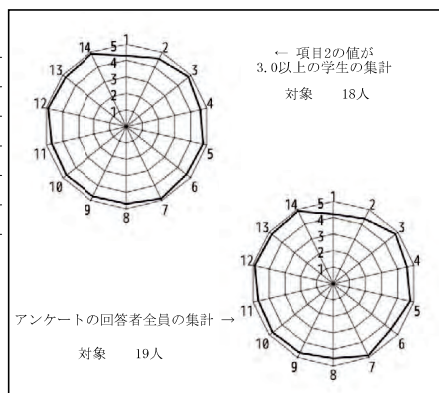


授業評価結果を踏まえた点検・評価

I was very satisfied with this class, overall. I had made a concerted effort to plan for the whole academic year, by introducing authentic short fiction over the first three quarters, looking at stylistic and structural elements, leading towards the students' production of their own creative writing. They did an excellent job, everybody was able to produce a coherent and interesting story of several pages by the end of the quarter, and several produced something outstanding. I have high expectations of the students in this class, so it is very important to create a good learning atmosphere in which the learners feel able to ask questions and make mistakes. So I was especially please that this came up in a number of comments from the students, for example "I was relieved that support was provided in an environment where questions could be asked immediately if there were any misunderstandings.". Of course, this atmosphere takes time to develop, so I look forward to starting again with a new class of first years very soon!

2019年度Q4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 英語IVリテラシー[FB]3
授業コード 11A08-003
教員名 BAILDON, MARTIN
教員コード 102326
登録人数 25
回答数 19
回答率 76.0%
休講回数 2 回
補講回数 2 回

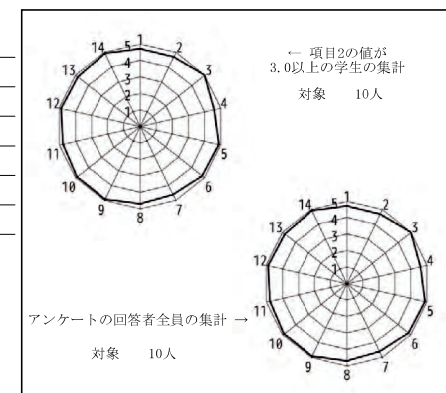


授業評価結果を踏まえた点検・評価

I am very satisfied with the results of the student class evaluation and pleased to see the main goals of the course were achieved; general reading skills, writing skills for practical everyday situations, and reading and writing for academic purposes. Judging by comments made in Part 15, students were able to relate material from the course into other courses or their daily lives. Questions 3~14 elicited responses above an average of 4.5, and it is pleasing to know students appreciated my sincerity (Q7-4.89) and were satisfied with the course (Q14-4.89). Comments were very positive and several related to the approach and usefulness of feedback students received both as a class and individually. Again I am glad students appreciated and were aware of the time and effort required in this approach. One comment referred to the use of the textbook stating that printouts I provided were more interesting and useful. I agree that the textbook was not covered as much as previous quarters for this course and I am looking to use a different textbook in the future if I am teaching this subject again. My goals for the future of this course are to enable students to express themselves by providing platforms and topics which stimulate interest. Further, I would like to introduce skills for reading and writing academic papers earlier in the course.

2019年度Q4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

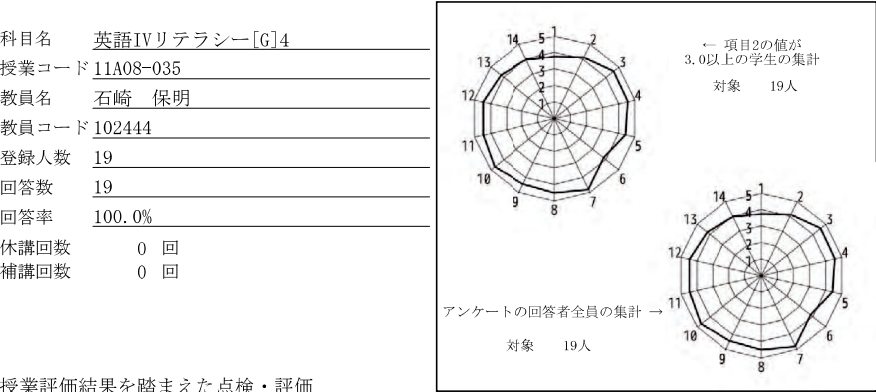
科目名 英語IVリテラシー[FB]5
授業コード 11A08-005
教員名 TIDMARSH, Andrew
教員コード 104101
登録人数 23
回答数 10
回答率 43.5%
休講回数 1 回
補講回数 1 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

1. The main goal of the final quarter for Literacy was to further develop critical thinking skills into students' writing while at the same time pushing students to demonstrate everything they had learned in quarters one to three. This meant there were numerous opportunities for students to review the mistakes they had made previously and truly aim for highly accurate and well-developed writing in the final quarter. Judging by the scores for students' final portfolios, I judge that this goal was attained when thinking about most people.
2. Looking at the information and numbers presented, the assessment is encouraging but I am still unhappy with many aspects of the class and I would like to improve on many points next year. For example, I would like to utilize a more appropriate and useful textbook that will enhance many of the core activities of the class.
3. For the coming year, I will be reviewing the activities conducted on Schoology to make sure they are an appropriate match for the themes and topics that are used for activity questions. At the moment there are some topics that did not work quite as well as I had planned so there is definitely room for improvement.

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

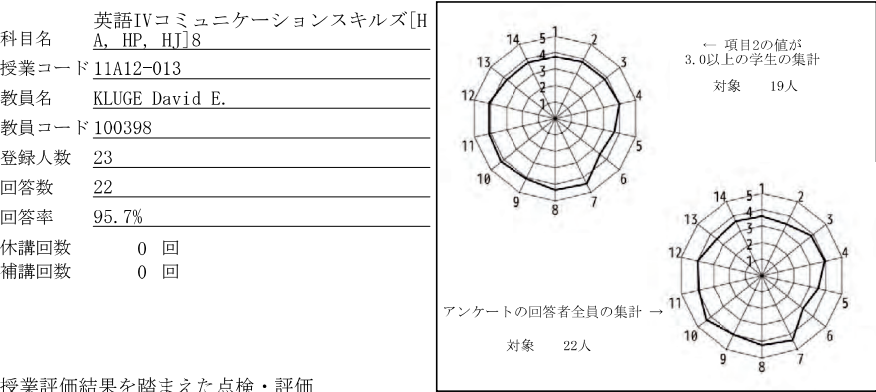


授業評価結果を踏まえた点検・評価

今回授業評価を受けた科目は、特にアカデミック・ライティングに焦点を当てた共通教育科目です。昨年度に引き続き、リサーチを伴うエッセイの書き方を丁寧に指導するとともに、ライティングの機会を増やすことを念頭に、TOEFL対策ともなるようなトピックをライティング課題として選び、昨年度よりも多く課しました。自由記述欄では、「受講生の理解度を確認しながら授業が進められていた点良かった」、や、「ライティングの機会が増えた」といった好意的な意見があったこともあり、当初の目標はおおむね達せられたと考えています。

同科目は昨年度も同クォーターで授業評価を受けており、その時の評価と比べて、項目3から14の平均値が0.12上昇しました。項目別に見ても、9項目で前年度同時期よりも上昇し、設問6と13の2項目のみ、わずかではあるものの、評価を下げる結果となりました。設問6と13は、受講生が学力や理解が深まったことを実感しているかを尋ねたものであり、教員側から見るとライティングの力はQ3と比べて着実についていると感じられるものの、それが肌感覚として受講生に伝わっていないという点については、今後ポートフォリオをさらに活用して、授業の到達目標や自身のこれまでの学びを振り返る機会を増やすことにより、改善を図っていきたいと考えています。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書



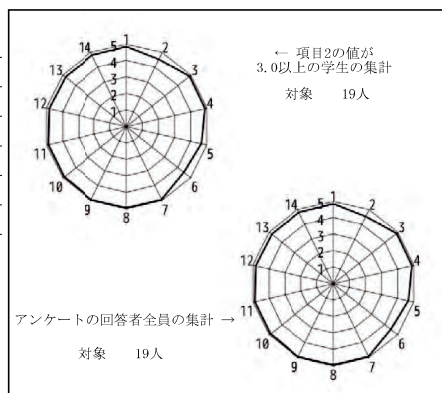
授業評価結果を踏まえた点検・評価

The goals of the class were to improve reading and speaking skills. Reading was assigned each class and the second class of the week was dedicated to reading. Students practiced conversational speaking in each class, information transaction, and discussion every week, and one speech for each of three units, practicing and evaluating each one several times. The two main goals of the class were achieved but could be emphasized even more in the future.

The overall average of student evaluations was 3.84 (Q1-14) and 3.89 (Q3-14) which is okay but not great. The lowest score of 3.23 was for Q6: Do you think that you are making solid progress towards achieving the course's attainment target? Do you think that you are making solid progress towards achieving the course's attainment target? This was a little disappointing but understandable as these were first-year students and this course was not like any high school class they have ever experienced. However, the written comments showed that some students understood what I was trying to do and were happy with the class: "The point that you can learn English through experience rather than classroom," "A place where I enjoyed learning English." "I enjoyed the class in a fun and good atmosphere." "It was good to learn English through music." "I was able to interact" "The teacher was sincere." This was the first course of the week and I tried new activities which improved throughout the day. I will certainly try to do better next quarter.

2019年度Q4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 英語IVコミュニケーションスキルズ[F
A, FF, FS, FG]3
授業コード 11A12-018
教員名 BROADBY, Deborah
教員コード 103594
登録人数 20
回答数 19
回答率 95.0%
休講回数 1 回
補講回数 1 回

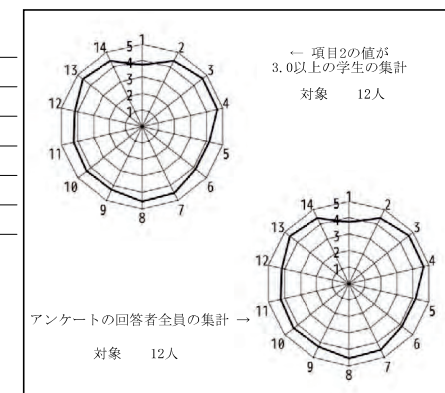


授業評価結果を踏まえた点検・評価

According to the goals set at the beginning of this course, I believe that they were met to a rather high degree. Whilst the survey results and comments were predominantly positive, I believe that as a teacher I can always try my hardest to improve my teaching, learn from my mistakes and listen to student's feedback. I was pleased that almost all of students participated in the porta survey. In the following school year, I hope to continue to listen, adapt and modify my lessons to suits the needs, level and interests of my students. I will also continue to ask my peers and senior advisors for advice on ways to help me be a better teacher. I would like to continue to create a positive and enjoyable learning environment for my future students.

2019年度Q4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 フランス語IV<E・B>1
授業コード 11B04-007
教員名 OLIVERO, Regis
教員コード 104119
登録人数 14
回答数 12
回答率 85.7%
休講回数 0 回
補講回数 0 回

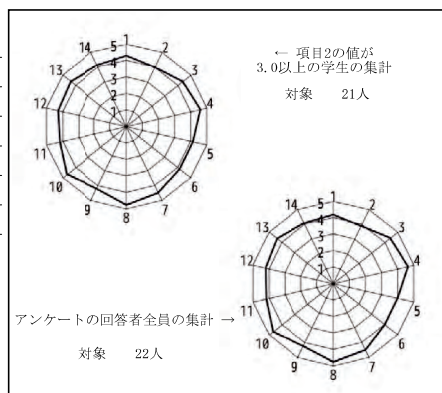


授業評価結果を踏まえた点検・評価

The goal at the beginning of the Quarter 4 was to reinforce the knowledge acquired previously and to prepared the students for the final test in the best conditions; I believe those goals were correctly achieved given that all the students passed the final examination successfully. The overall result was good albeit a little bit lower than in the previous quarter. As the program grew more difficult at the end of the year, I could notice that some students were slightly struggling in meeting the requirements set during the class. Based upon what was reported in the comment section, I should have taken more time to explain a few points more slowly. It was important to finish the program on time for the final test and although a few students were lagging a bit behind, noone really gave up. But that is certainly something I will take into account more carefully next year. As a conclusion, I would like to say that I enjoyed teaching this group and although the students were non specialists, they really tried hard and I hope this introduction to French has been beneficial to them.

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 ドイツ語IV<J・P>2
授業コード 11C04-009
教員名 梶浦 直子
教員コード 102557
登録人数 22
回答数 22
回答率 100.0%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

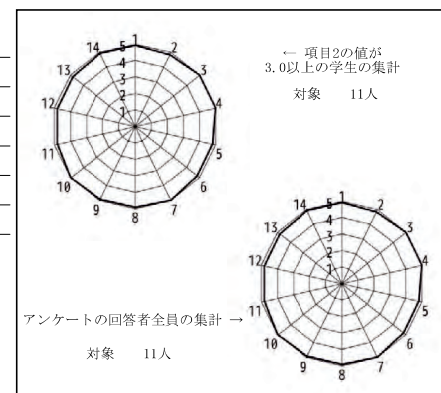
この授業の到達目標は、ドイツ語の基礎知識を覚えることでだけでなく、ドイツ語の運用能力を習得することにある。授業では多くのグループワークを取り入れ、学習者は積極的にグループワークに参加することが求められた。学習開始当初には授業形態に馴染めない学習者の姿が見られたが授業が進むにつれて、多くの学習者が、グループ内で活発に意見を交換し、非常に積極的に学習に取り組むようになった。自由記述からも学習者が積極的に参加し、グループ学習を楽しんでいたのがうかがえる。

設問2「受講に際して、予習や復習を含め、主体的に授業に参加し、内容を理解しようとする努力をしましたか。」の評価が（3.82）と低いことは、この授業において予習を求めていることに起因していると考えられる。一方で、復習にもあまり取り組んでいないことも予想される。今後は、授業外学習を促進できるような仕組みを取り入れていきたい。

また、授業でのプレゼン課題や試験結果に学習の成果が表れているが、設問13「この授業を通して、新しい知識（あるいは、技術や能力）を得たり、理解が深まったと感じますか。」（4.36）の評価が低いことから、学習者は自身の学習成果を十分に評価していないことがうかがえた。今後はこれらの点に留意し、授業においてこれまで以上に授業の目標を明確に伝えるようにし、気軽に発言、質問ができるような環境づくりを心掛けたいと考えている。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 スペイン語VII[FS]2
授業コード 11D07-002
教員名 LANDEROS NERI, Sergio Gustavo
教員コード 103688
登録人数 13
回答数 11
回答率 84.6%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

Evaluation report for class 11D07 002 4th. quarter.

Prof. Sergio Neri. We were working on developing a communicative competence that allows students to:

- be able to describe and compare places, express an opinion, agreement and disagreement, differences and similarities, likes and dislikes.
- be able to talk about historic events.
- talk about past events.

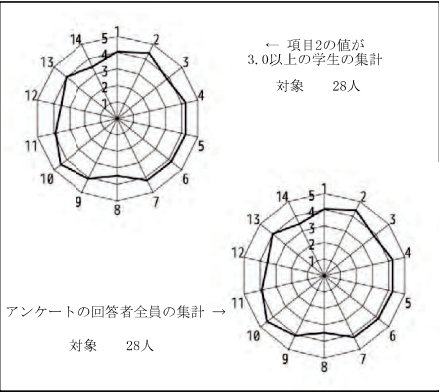
In order to achieve that students learned to:

- Use comparative expressions and expressions for opinions. - Use the expressions “I like” and “I would like” in Spanish and understand their differences.
- Construct and use some relative clauses with connectors like: “... that...”, “... where...”, “in which...”, etc. in Spanish.
- Differentiate and properly use the “Indefinite Pass” and the “Perfect Pass” in Spanish.

As for the results of the survey, as it can be interpreted in the graph, the answers of the students were positive compared to the media. Nevertheless, every academic year represents an opportunity for improving and that's the aim for the next term.

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 中国語Ⅳ<H>4
授業コード 11F04-004
教員名 虞 萍
教員コード 101432
登録人数 30
回答数 28
回答率 93.3%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

中国語の授業に関してはクォーター制を導入して以来、基本的は二人の先生がペアを組んで、授業を担当することになっています。それに、クォーターごとに担当の先生が変わることになっています。一部の学生はクォーター制におけるこのような教育方針にまだ慣れていませんので、年間を通して、一人の先生に教えてほしいという要望が出ています。新学期が始まるQ1の時に、担当の先生は学生に中国語におけるこのような教育方針について説明することを提案します。

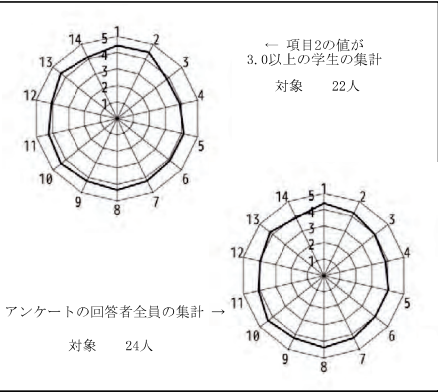
今学期（Q4）の最初の授業で、語学勉強する時に、予習・復習の重要性について強調したため、このクラスの多くの学生は予習・復習を行うようになりました。

授業の内容によっては関連する中国文化について説明しました。このことについて、学生から高い評価を得ています。それに、「第三クォーターまでの先生より熱心で、文法などを詳しく教えていただき、理解が進んだ。」「先生が真面目です。」「（この授業は）よかった。」など称賛のコメントも多数頂戴しました。

語学の授業では条件がそろえば、学生にネイティブ先生の生の発音を聴かせて、勉強効果を高めさせることが理想的ですが、しかし、学生の聞こえ具合および自身の喉の調子を考えると、来年度から教室の作りによって（生の声が通りにくい教室の場合）はマイクを使用する予定です。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 韓国朝鮮語Ⅳ<E・B>
授業コード 11G04-004
教員名 陸 心芬
教員コード 101225
登録人数 30
回答数 24
回答率 80.0%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

Q4の授業目標にしていた、初級レベルの基礎文法の習得や基礎会話ができることについて、おおむね達成したと言える。学生による授業の評価の設問項目の平均値が4を超えており、評価にそれが現れていると思われる。

Q4では尊敬・意志・推測・勧誘表現の活用語尾が自由自在に使われることであった。特に表現力をアップさせるためにペアの会話練習及び会話の自由作文、小テストを続けて行った。学生が授業に取り組む姿勢は概ね良かったもののやる気のない学生に対する対処がうまくできなかった部分については今後も悩みながら工夫をし続けるつもりである。

学生の自由記述欄の良かった点としては、「力がついた」「韓国の映画を見ることができた点」「先生の懸命さを感じた」「書いて読むから覚えやすい」などがあった。

改善すべき点としては、「指示されてないのに宿題の提出を言われ、やっていないことについて減点された」の意見があった。

これらの意見を踏まえ今後の授業に参考してより楽しい授業になるよう工夫していきたい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名	日本語I(文法)2
授業コード	11L06-002
教員名	山口 薫
教員コード	019406
登録人数	19
回答数	
回答率	
休講回数	0 回
補講回数	0 回

レーダーチャートなし
(授業評価アンケート不実施のため)

授業評価結果を踏まえた点検・評価

この授業は、総合政策学部の留学生が、日本の大学で学んだり日常生活を送ったりするのに必要な日本語の基礎を勉強し、適切に使えるようにすることを目指すものである。科目名は「日本語I（文法）」であるが、実際には文法ばかりでなく会話、聴解、漢字等幅広く扱い、それにより留学生が日本語の4技能を高め、総合的な運用力をつけられるようにするための練習を行っている。今学期は特にスライドを活用し、文法項目や語彙の意味の違いを視覚的に示したり、口頭練習をテンポよく進めたり場面を提示して自発的発話を促したりする工夫をした。その結果、授業中の学生たちの積極的な発言が増え、日本語学習に対するモチベーションも高まったように感じる。しかし一方で、単位を落とすことになった学生も多くいる。留学生にとって、今後の学生生活を送っていく上で、日本語の基礎力をきちんと身につけることは避けて通れないものである。それを理解し自律的に学習に向かえるよう、指導を行っていきたいと考えている。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名	日本語I(運用)2
授業コード	11L07-002
教員名	佐々木 陽子
教員コード	019695
登録人数	14
回答数	0
回答率	0.0%
休講回数	1 回
補講回数	2 回

レーダーチャートなし
(回答数4件以下のため集計しない)

授業評価結果を踏まえた点検・評価

1 受講生の学習歴の異なり幅が広く、またネイティブとの会話生活経験があるなど学習の質にも大きな幅があるという点で、従来と比較して困難な運営が予測されたため、中盤から初級者が追いつき教室全体として基礎的な表現力を身に付けてきたため、結果として教室活動もスムーズに動くレベルに達し、到達目標に達することができた。

2 学生の受講状況、受講態度等はおおむね熱心で、宿題（課題）についても丁寧に実施提出するなど、学習意欲は最後まで高く保たれていた。学生の能力に幅がある場合、個別の学修目標が重要になるが、チューターや雑誌新聞等の教室外リソースを活用するように課題を設定したため、学生ごとの異なる目標に対して努力を継続することができたと思われる。課題のチェックや提出された課題をコピー印刷して次の課題を指示するなど手間はかかるが、課題を個別に与える意義は大きかったと考えられる。

3 学生の能力や履歴に関して幅が大きい状態が続く場合、プレイスメントテストの見直しや、ある程度の学修履歴があれば中上級を本人意見を参考にして選び取らせるなど、本人の学習動機を損なうようなクラス配置にしないことが重要であると思われる。とはいえ同じプレイスメントテストの判断を継続することによって今後も実際は中上級と思われる学生が配置される可能性があるため、それへの対応を準備しなければならない。

2019年度Q 4 集中 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名	短期留学プログラム（春季）A1
授業コード	14C01-001
教員名	山田 貴将
教員コード	104223
登録人数	16
回答数	
回答率	
休講回数	0 回
補講回数	0 回

レーダーチャートなし
(授業評価アンケート不実施のため)

授業評価結果を踏まえた点検・評価

①本授業の開講当初に設定していた目標は以下の3つである。

1. 英語によるコミュニケーション能力および異文化適応力を高める
2. 日本文化の理解を深め、世界に情報発信する力を高める
3. 現地での人的交流やフィールドワークを通じて、国際性に富んだ社会問題解決能力を養う

1及び2に関しては、第5回目授業中に行われる「日本文化プレゼンテーションコンテスト」の準備を行う過程で、英語によるコミュニケーション能力を伸ばしながら、母国である日本を改めて見つめ直し、日本文化を世界に向けて発信する意欲と積極性を養うことができた。3については、現地滞在中にキャンパス内外における様々なアクティビティに参加することを通じて、多くの人々と交流する機会を得た。また、帰国報告会での発表に向けて、各グループの関心に基づいて実際されたフィールドワークは、国際的な視野から問題を捉え直す貴重な機会となった。

②全6回（2コマ×6回）の授業を通じて、やむを得ない場合を除いての欠席はゼロであり、学生の受講態度についても、非常に積極的であったと評価できる。これは、事前事後の授業に真剣に取り組むことで留学経験がより一層充実したものになることを全ての受講生が理解して授業に臨んだ結果であると考えられる。

③次クォーターにおいても、事前事後授業が短期留学プログラムの効果を高めていく上で必要不可欠である点について初回授業を通じて受講学生に十分理解させたい。また、より多くのオーディエンスに各アクティビティ（「日本文化プレゼンテーションコンテスト」及び「帰国報告会」をご参観いただくことを通じて、学生がよりオーセンシティブを感じるができるように努めたい。

2019年度Q 4 集中 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名	短期留学プログラム（春季）B
授業コード	14C02-001
教員名	森 由卯子
教員コード	048017
登録人数	8
回答数	
回答率	
休講回数	0 回
補講回数	0 回

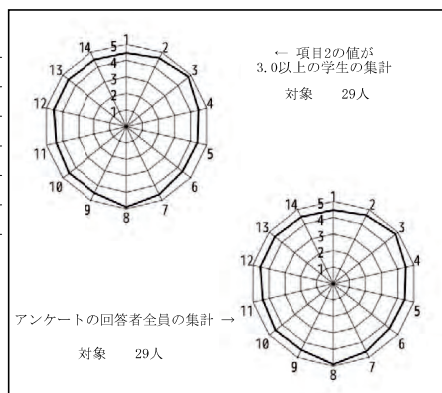
レーダーチャートなし
(授業評価アンケート不実施のため)

授業評価結果を踏まえた点検・評価

当初設定していた目標は、「事前講義および関係図書からペルーについての知識を学び、往還する南米日系人について、また自分の関心のあるテーマについて調べ、日本語と英語でのプレゼンの仕方を学びつつ、現地で学ぶ目標を明確にし意識を高めること」、そして「留学中の大学での講義により新たな知識を得るとともに、事前に学習したことを実際の目で確かめ、新たな気づきを得ること」であった。事前講義においては、プレゼンの方法論を事前講義にこれこみ、日本語と英語でのプレゼンの技法等を学び、日本語と英語での2回のプレゼンをすることで、より論理的なプレゼンをすることができるようになった。また、関係図書から、ペルーについての各分野についての一般的な知識を得ること、またその中から自分の関心のあるテーマを見つけることができた。このような準備もあり、現地の大学でのプレゼンはよいものになったと聞いている。また、現地に赴いてみて色々な人との交流を通して、はじめてわかったことや新しい気づきがあった。そして、事前準備を十分していったからこそ理解が深まったことなどを学生たちは感じたようだ。特に今回はコロナウィルスでの影響で、現地でも一つの交流が中止になったが、そのような危機の中でのペルー人の日本人に対する対応なども感じる場所があったようだ。改善できた点としては、前回ではこのプログラムのテーマである「往還する南米日系人」についての講義数が少なく、テーマがぶれていた点が反省点であったが、今年度は、上智大学および上智短大とオンラインで繋げて野内氏の講義を受けたことで、このテーマに関する時間数も少し増え、日系人の往還について調べる学生も多かった。また、こちらが意図した以外のことで、多くの学生がコミュニケーション能力や外国語習得の重要性を挙げていた。3大学での参加により、意識の高い学生との交流は刺激になったようだし、言語ができることで、より内容のあるコミュニケーションが取れることに気づき、外国語学習のモチベーションが上がった。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 スポーツ科学演習B
授業コード 12D11-001
教員名 笹川 慶
教員コード 103190
登録人数 36
回答数 29
回答率 80.6%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

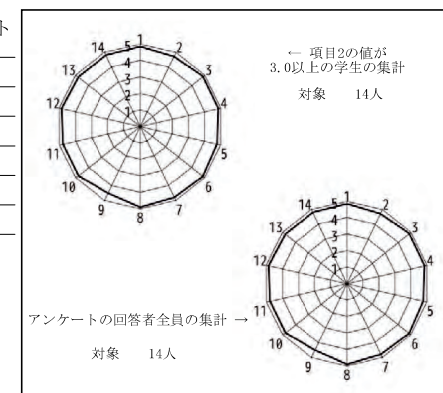
①. 各学生の最終課題から、4つの到達目標のうち1と2における到達の程度は高かった。しかし、3及び4についての到達度合いはそれぞれ中、低と感じた。

②. 項目1~14及び3~14の学生による評価平均点がともに4.55点であり、項目15に対する回答の「先生がひとりひとりのプランに合った指導やアドバイスをしていた。」「わからないことは、講師が例を作り生徒がしっかり作れるようにした。」「目標達成に向けて教授が学生に真剣に向き合っていたこと」「学生主体で授業が進められており、内容の理解を深めることができた点。」などからも窺えるように、本授業履修生にとって全体的にみると満足度が高い内容で構成できたと評価できる。しかし、項目6の平均点は4.38と全項目の中で最も低かった。この原因は到達目標の3と4に対する手応えがいまいち感じられなかったことにあるのではないかと考える。

③. 本授業において優先的に改善すべき点は、②で述べた項目6の平均点を高めることである。そのためには①で述べたように到達目標の3と4の到達度合いを高めることが重要であると考え。授業後半で行われた『トレーニングの期分け理論』と『自身の着目するスポーツに応じたトレーニング計画の立案』で多くの学生につまづきが見られた。次クォーターではこの内容について、もう少し時間を使って取り組みせ、教員の介入の頻度も高めたい。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 スポーツ実技(フィットネス)フィット
ネス
授業コード 14E06-003
教員名 飯田 祥明
教員コード 103610
登録人数 20
回答数 14
回答率 70.0%
休講回数 1 回
補講回数 1 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

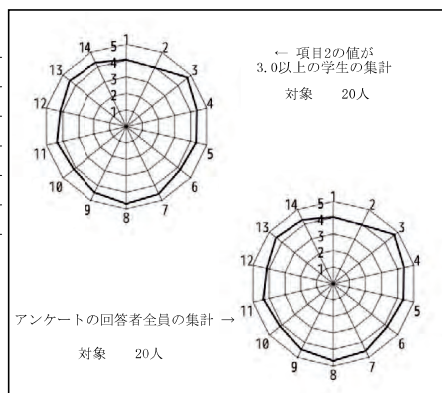
①開講当初に設定していた目標と到達の程度について
一つ目の「トレーニングの目的とその効果について理解できる」という目標についてはトレーニングノートを作り、毎回のトレーニング進捗を記録することでほぼ全員が達成できたと考えている。「トレーニング方法の実技に関する基礎を身につける」の目標については、質問への応答や参考図書を提供することで対応したが、これには受講者によって個人差はあったと思う。「健康状態や体力に合わせ、運動プログラムの作成および実践することができる」という目標に関してもトレーニングノートが有効活用でき、ほとんどの受講者が達成できたものと捉えている。

②数値データおよび自由記述等を踏まえての担当科目に関する総合的な自己点検・評価
どの数値も4.5以上で、全体的にみると学生からの評価・満足度は高かったと考えている。自由記述の設問で、インフルエンザでの欠席の取り扱いについての意見があったが、これは体育科目全体で検討をしていく必要がある。

③次クォーター・学期以降に向けての改善点、今後の抱負、方針など
今回から「トレーニング総重量」という指標に焦点をおき授業を進めたが、モチベーション維持や成果のフィードバックの面で非常に効果的であったと感じる。今後はさらに体力テストと体組成を効果的に改善できるような枠組みを作っていきたいと考えている。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 宗教に見る人間の尊厳7
授業コード 10D01-007
教員名 斎藤 喬
教員コード 103192
登録人数 25
回答数 20
回答率 80.0%
休講回数 0 回
補講回数 0 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

- ①この授業の到達目標は「世界の諸宗教の教典と現代まで受け継がれる信仰生活の特色を、複眼的に検証することができる。」であるが、ミニテストやレポートの結果を見る限り、受講者の多くが専門性の高い内容を含む講義に取り組み、宗教学的な知見について自分なりに身に付けることができているように思われる。
- ②この授業の平均値を他の「人間の尊厳」科目と比較すると、設問3を除いて全体的に平均点とほぼ同じかやや低い項目がほとんどである。特に、設問10は平均値よりも0.44ポイントも低く、授業の妨げとなる行為に対する改善策をもっと徹底的に推し進めることが必要である。また、設問12が平均値よりも0.2ポイント低く、授業中に適宜質問時間を設けた上で、ミニテストの解答欄にも授業に関する「感想・質問・意見」を書くように指示しているが、そのことが適切に伝わっていない可能性がある。あるいは、シラバスに明記した上で授業中に指示している事前・事後学習について、その内容が伝わっていない可能性もある。
- ③②の問題点を踏まえた上で、今後は受講者の授業への取り組みに関して注意喚起を強化した上で、授業に関する質問や事前・事後学習に関するアナウンスをさらに周知できるよう努めていく。

2019年度Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 人類文化学特殊講義(アジアの社会人類学)2
授業コード 22C70-002
教員名 宮脇 千絵
教員コード 152580
登録人数 6
回答数 2
回答率 33.3%
休講回数 1 回
補講回数 0 回

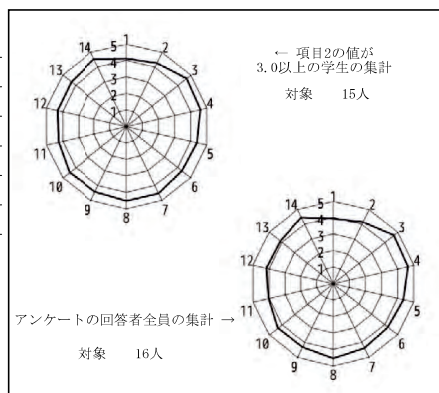
レーダーチャートなし
(回答数4件以下のため集計しない)

授業評価結果を踏まえた点検・評価

- ①現代アジアにおける女性像・男性像、ジェンダー、働き方・仕事観について関連する論文の購読を通じて、論文を購読する力をつけ、現代アジアの人々の文化や社会、考え方について理解し、自らが生きる文化や社会について自分の考えを説明できることを目標とした。毎回、課題論文に関しレジュメ担当、コメント担当を決め、学生による発表とそれを踏まえたディスカッションをおこなった。受講生が6名と少なかったこともあり、かえって密なディスカッションをおこなうことができた。最終レポートの出来も良く、各自がこの授業の目標を到達することができたと思う。
- ②授業期間中3回にわたり評価をおこなうようアナウンスをおこなったが、回答者は2名に留まった。おおむね4, 5の評価を得られた。授業期間を通じて受講生からは、仕事や結婚など身近なテーマだが異なる文化、社会の状況を知ることができて面白い、論文を読むことが楽しかったといった意見を聞くことができ、回を重ねるごとに着実に論文を読む力をつけられていることが感じられた。また、人類学研究所の講演会への振り替えにより、課題論文の著者をゲストスピーカーとして迎え、話を聞く回をつくったことにより多角的な授業をおこなえたと思う。
- ③毎回論文を読み発表をおこなうことが一部の学生にとっては敬遠されるようで、受講生が確定するまでに時間がかかってしまう。そのため最初の3回は講義形式にしているが、受講生が確定し発表順が決まるまで、私自身も授業の方向性が定められず落ち着かない。これを解消するため、次年度では論文講読以外の回をより多くすることも検討している。

2019年度Q4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 政治・経済と人間の尊厳7
授業コード 10D04-007
教員名 MERE, Winibaldus Stefanus
教員コード 101180
登録人数 55
回答数 16
回答率 29.1%
休講回数 0 回
補講回数 0 回

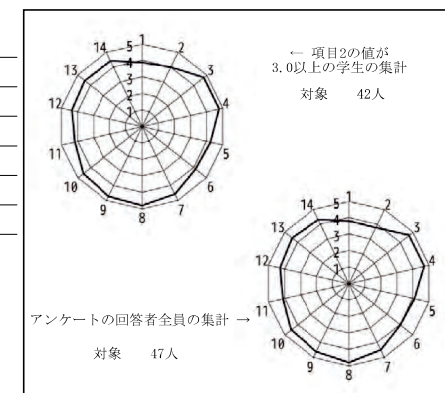


授業評価結果を踏まえた点検・評価

- (1) In general the course was done as plan and based on the syllabus. Looking at the reaction of the students during the class and evaluation from the report, it can be said that the course achieved its goal, which is to enable students understand the important of human dignity and people-centered policies in economic and political activities.
- (2) Based on my personal evaluation and the numerical data from the student evaluation, it can be said that the course has a meaningful impacts on students as they learn something not only for academic credit but also for life.
- (3) Some improvements are need in making sure that all the terms used during lecture and in handouts have a clear meaning. An academic environment also needs to be created in order to allow student actively engaged during the class.

2019年度Q4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名 人文地理概説
授業コード 22C05-001
教員名 岡本 耕平
教員コード 049502
登録人数 82
回答数 47
回答率 57.3%
休講回数 1 回
補講回数 1 回

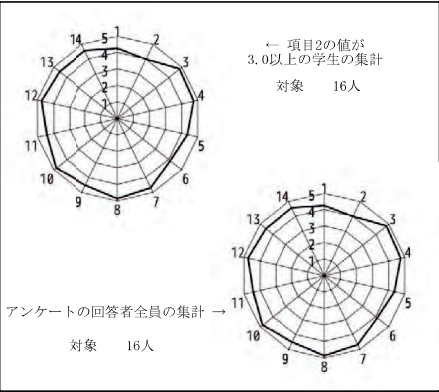


授業評価結果を踏まえた点検・評価

- ①授業評価の設問6「あなたはこの授業の到達目標に向けて力がついてきていると思いますか。」の評価点が開講主体別の平均値の全体平均の値を下回ったので、学生にあまり達成感を与えることができなかった。一方で設問4「毎回の授業の構成や進行速度は適切なものでしたか。」に対しては、平均値を上回る評価であったので、授業は目標通り進行し、学生もそのように評価したと言える。
- ②今回の授業評価は、全体的に芳しくなく、設問14「全体として、あなたはこの授業に満足しましたか。」の値も全体平均値を下回った。特に設問1「この授業を履修する前、あなたは授業の内容について興味を持っていましたか。」の評価が低かったことは、この授業のシラバス自体が学生に興味を抱かせなかったことを示している。この授業は、現在の日本の都市空間を理解するために、高度経済成長期以降の都市空間の変化を読み解くことを主眼としたが、学生にとっては祖父母の世代の歴史を扱っているものであって、興味を抱かせなかったのではないかと推察される。ただ、自由記述回答の設問15の「評価できる点」に関して、回答者数47人中8件の意見があり、それらは、「先生の教える内容がわかりやすく興味深い内容だった」「地理はあまり得意ではなく、この授業もついていける自信がなかったが、とてもわかりやすく、おもしろいと感じた」「とてもわかりやすい授業で、興味を持ちながら開けることができました」など好意的な評価であった。おそらくは、授業に興味をもった学生とそうでない学生に大きく分かれたのであろう。設問1の回答分布にもそれが現れている。
- ③一方、自由記述回の設問16「改善すべき点」については、1件のみ意見がありそれは「先生の、「しんど」という、口癖でしょうか…少し気になりました。」というものである。自分では気づかなかった点であり、以後気をつけたいと思う。来年度のこの授業は、今年度と同じシラバスにしてしまったので、設問1は改善できないが、授業ではできるだけ現在の都市空間に重点をおいて、学生の興味をもたせるようにしたい。

2019年度 Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名	現代の哲学
授業コード	22C09-001
教員名	久保田 進一
教員コード	104075
登録人数	33
回答数	16
回答率	48.5%
休講回数	0 回
補講回数	0 回



授業評価結果を踏まえた点検・評価

①開講当初に設定していた目標と到達の程度については、試験の採点の結果から判断して、概ね達成できたのではないと思われる。この授業では、「心の哲学」と「言語哲学」を中心に講義をした。これらの哲学の議論を通し、合理的な思考を身につけることができ、その目標は達成されたと思われる。

②数値データおよび自由記述等に関して、学生からは概ね高評価を得た。また、自由記述についても、「とても興味深い内容でした」ということだった。一方、改善点として「女子にだけ少し下品な発言をしたりするのが気になった」との意見があった。こちらとしては、どのような発言だったのか、覚えていないが、多分（具体的なことが書いてないので、どのような発言だったのかわからないが）、学生に興味を持ってもらうために少し行きすぎた発言ではなかったのかと思う。今後は気をつけたいと思う。また、コメントシートを使ったことによって、学生の質問や誤解している部分や理解不足の点も、次の授業で対応できたのも良かったのだと思われる。総合的に見て、学生の満足度も高かったし、内容もよく理解してもらえたと思うので、この授業に関しては良かったのではないと思われる。

③この授業は今回で終わってしまうので、次回の抱負としては、これと言って挙げることはないが、他の授業で、今回のアンケートの結果を生かして、今後の授業に活用していきたいと思う。また、学生とコミュニケーションを取りながら、一人一人に目を配った授業を行なっていきたいと思う。

2019年度 Q 4 「学生による授業評価」自己点検・評価報告書

科目名	応用哲学A
授業コード	22C19-001
教員名	竹下 至
教員コード	103135
登録人数	14
回答数	3
回答率	21.4%
休講回数	0 回
補講回数	0 回

レーダーチャートなし
(回答数4件以下のため集計しない)

授業評価結果を踏まえた点検・評価

①について
開講当初に設定していた到達目標は、（１）情報についての様々なとらえ方を知る、（２）志向性の問題を理解する、というものだった。これについて、アンケートの結果と授業内の小テストおよび定期試験の結果を見るに、概ね達成できたと思う。

②について
前回の反省から、テクニカルな内容、特に理解に数学的な知識を必要とする内容には深入りしないようにしたので、自然と全体的な理解度が向上したと思われる。ただ、そうした内容も当然、重要なものなので、学生の予備知識、難易度、内容の重要性などのバランスを考えて、内容の取捨選択を改めて考えることにしたい。

③について
今後の課題のひとつとしてフィードバックを増やすことを考えたい。今回はその機会として授業内の小テスト（1回）を設け、解説・採点という形でフィードバックを行ったが、他の形でのフィードバックの機会も増やしていきたい。